

富

特230-87

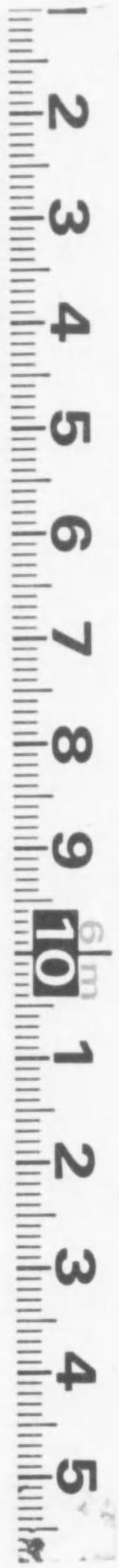


1200600317491

85

127

×
複写



始



特230
87



エホバの證者

明石順三氏著

富

全人類の最も熱望する所のも
のを充分に満足せしむる音信

發行所

燈

臺

社



次 目

第十章	第九章	第八章	第七章	第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	頁
責 任 と 結 果	審 判	大 な る 群 衆	ム リ シ テ 人	「囚 人」	嘘 言	貧 窮 と 死 の 原 因	富 を 得 る 道	ヨ ナ ダ ブ	眞 の 富 と 偽 の 富	一七
—三〇三—	—二九六—	—三五五—	—一九三—	—一七九—	—一四九—	—一三三—	—一二四—	—五〇—	—七—	



五木村の遺書

この書は、著者が生前に著したものである。著者の遺言として、この書が世に公刊されることになった。著者の遺言として、この書が世に公刊されることになった。



富

目

次

第一編
第一章

第二章
第三章
第四章

第五章
第六章
第七章

富

第一章 眞の富と偽の富

富と眞の幸福とを心より願ひ求むる者にとつて、最も必要なは、如何にして富を得、如何にして之を享樂すべきかと云ふ事に關する正當なる知識を得る事である。而して之に就ての眞の道に無知にして、單に不完全なる人間の意見に信賴して、それに盲從する者は、平安と永久の幸福を齎らす富を見出す事は決して出来ないのである。正しき道を學び知りて、斷えず之を熱心に歩む者のみが富と祝福の全部を獲得するに至るは絶対に確實である。正しき道は人間智所産の中には發見されない。眞に富まん事を欲する者は、神エホバとその大寶庫の中に之を熱心に探し求めなければならぬ。

人々よ、本書の中に記されある所を熱心に研究せよ。その時に人々は心に眞の平安を得べし、何故なれば之は單なる人間の意見に非ずして、神の聖言より取りたる眞理であるからである。之を慎重に學び

研究する者は必ず大なる満足を得べし。多数の人々は神エホバと聖書から離れ去つた。何故なれば彼等は神と聖書とに就て誤り教へられたからである。又他の多数は聖書に就て全く無知である、何故なれば彼等は自稱智者から「聖書を諒解する事は出来ない」と告げられたからである。聖書は正義を求めて恐れざる人々に眞の正しき道を指示すべく神より與へられたる啓示の書である。(テモテ後書二章十六、十七節)。

聖書は眞偽兩種の富を明らかに區別し、何故に眞の富のみが人々に幸福を與ふるかの理由を明示してゐる。眞偽兩種の富の何れを執るべきかを選ぶ前に人は先づ之等兩種に就て學び知らなければならぬ。然る後にその何れかを自由に選擇する事が出来る。若し人間の意見や言に聽き従ふならばその人は必ず己が歩む道を誤るのである。「諸々の君に依り頼むことなく、人の子に依り頼む勿れ。彼等に助あることなし」(詩篇百四十六篇三節)若しその人が神の聖言に信賴するならば必ず正しき道を歩む事が出来る。「汝心を盡してエホバに依り頼め。己の聰明に倚ること勿れ。汝凡ての道にてエホバを認めよ。さらば汝の道を直くし給ふべし」(箴言三章五、六節)空前未曾有の大危機は今全人類の上に臨む。心直き人々が己自身の運命を決すべく正しき道を學び知るべき時は到來した。

眞の富は我利私慾を以て獲得されたる金銭、家屋、土地等を以て成り、之等は他の人々を壓迫する爲に使用さる。現在にては金銭、家屋、土地の大部分が極めて少數者の手に専有され、民衆の大多數は生活難に苦み悩む。富を我利的に専有する此の行爲こそ即ち聖書の中に「利を貪ること」として示され

てゐるところのそれである。我利者は黄金の與ふる權力を愛す。此の故に「それ金銭を愛するは諸般の悪しき事の根なり」(改譯テモテ前書六章十節)と明示されてゐるのである。金銭そのものが悪しくはない。唯金銭が悪しき結果を生むと云ふ事を意味してゐるのである。何故なれば人は金銭を悪用して獲得せる不當の權力を愛好するからである。若し人が正當に金銭を儲けて、それを神の榮光のために使用するならばその結果は必ず善き結果を齎らすのである。

今地の物質的富を専有する少數者は決して眞に幸福なる者ではない。之等の者の大部分は傲慢不遜、残忍冷酷、而して極端に我利的である。彼等は更に多くを獲得せん事のみを願つて、その少しでも失はれる事を常に恐る。豪富は他を壓迫するために屢々用ひられ、而して之をなす者は己が權力に誇り慢ず。斯かる者等に就て神は示し給ふ、「此の故に傲慢は裝飾の如く其の頸をめぐり、強暴は衣の如く彼等を覆へり。彼等肥え太りて、其の眼飛び出で、心の願ひにまさりて物を獲るなり。また嘲笑をなし、惡をもて暴虐の言を出し、高ぶりてもの言ふ。其の口を天に置き、其の舌を地に遍く行かしむ。言へらく、神いかで知り給はんや。至上者に知識あらんやと。視よ、彼等は悪しき者なるに常に平安にして、其の富増し加はれり」(詩篇七十三篇六、九、十一、十二節)。

神の豫言の如く「悪しき日」は既に到來し、我等は今「末の日」にある。此の時に人々は契約破壊者となり、不忠背信、只管己が權力の増大のみを願ひ求む。(テモテ後書三章一、四節)。我利的政治權者は「富

者を絞(しぼ)り、それによつて己(おのれ)が地位を護り、更にその權力を増し加へんと狂奔す。絞る者、絞らるる者の兩者共に不幸であり、而して共に亦極めて我利的である。之等は何れも己が我利的慾望に驅られて驕進す。然れど失望は最も近く彼等の來るを待つ。『暴虐をもて恃みとする勿れ。掠奪ふ事をもて誇る勿れ。富の増し加はる時は之に心をかくるなかれ』(詩篇六十二篇十節)。「己の富を恃む者は倒れん」(箴言十一篇廿八節)。「鷓鴣の己の生まざる卵を抱くが如く不義をもて財を獲る者あり。其の人は生命の半にて之に離れ、其の終りに愚なる者とならん」(エレミヤ記十七篇十一節)。

斯かる者は金錢をもて己が神とし、之に依り頼むが故に愚者である。斯かる者は神とその眞の智慧を無視し、己が行爲そのものによつて己自身の愚なる事を自證す。聖書は示す「愚なる者は心の中に神無しと言へり」(詩篇十四篇一節)。斯かる者は己が行爲によつて自己の心中を曝露す。人間に對する神の御準備を無視し、只管我利的歩みを續くる者は己自身にとつて最も必要な事に盲目となる。地上人類の多數は物質的富の獲得に熱中狂奔して事實上狂人となつて了つた。偽富の興ふる所は暫時のみである。人は死する時、その人の富の力も亦終る。「財寶は震怒の日に益なし。されど正義は救ふて死を免がれしむ」(箴言十二篇四節)。「汝虚しきに歸すべきものに目をとむるか。富は必ず自ら翅を生じて鷲の如く天に飛び去らん」(箴言廿三章五節)。之等の聖句は偽富の何なるかを明示してゐるのである。

「眞の富」

眞偽兩種の富の區別を正しく諒解する事は其の人の生命と幸福の上に最も肝要である。之等兩種の眞の區別は唯聖書の中にのみ發見さる。神エホバは人の想像に優りて富み給ふ。「世」と云ふ言には天と地、即ち人の肉眼に見ゆると見えざるの兩部分を含んでゐる。之等の全部は神エホバに屬す。「地とそれに滿つるもの、世界と其の中に住む者とは皆エホバの所有なり」(詩篇廿四篇一節)。「元始に神天地を創造り給へり」(創世記一章一節)。「主よ、汝は榮光と尊貴と權威を受くべきものなり。汝は萬物を創造り、萬物は聖意によりて有ち、且つ創造られたり」(歌示雅四章十一節)。眞の富の何なるかを學び知らんと欲するならば、我等は先づ之の源泉にまで行かなければならぬ。

キリスト・イエスは極めて富み給ふ。彼に與へられたる本來の名は「神の言」即ち「ロゴス」である。と聖書は明示す。此の「ロゴス」の名は、發せられたる神の聖言を執行する者」と云ふを意味す。此の「神の言」即ちロゴスはエホバの創造の最初であつた。(歌示雅三章十四節)。然る後、神はその萬物創造の御仕事に此のロゴスを使用し給ふた。「太初に言あり。言は神(エホバ)と偕に在り。言は即ち(一)の神(大能者)なり」(ヨハネ傳一章一節)。之を THE EMPHATIC DIACRYOT の正譯に見ると斯うある。「最初にロゴスありき。ロゴスは神(エホバ)と偕にありき。一の神はロゴスなりき。即ち神エホバは絶大なる發源者に在し、始なく、亦終なき神(The God)に在す。而して神エホバの創造の最初がロゴス即ち「言」してあり、「一の神」即ち「一の大能者」であつた。エホバは此のロゴス即ち「言」を地上に遣された時に、彼に「イエ

ス」と云ふ名を授けられた。イエスは宣ふた、「父は我より大なればなり」(ヨハネ福音十四章十八節)。神エホバは「父」であり、キリスト・イエスは「子」である。故に「イエス・キリストをもて萬物を創造りし神」エホバに在す。(エペソ書三章九節)。キリスト・イエス即ち「ロゴス」に就て斯く記さる「彼によりて萬物は造られたり。天に在るもの、地の上にあるもの、人の見ることを得るもの、見ることを得ざるもの、或は位あるもの、或は主たる者、或は政事を執る者、或は權威ある者、萬物は彼に由りて造られたり。かつ其の造られたるは彼が爲なり。彼は萬物より前にあり、萬物は彼に由りて存つことを得るなり」(コロサイ書一章十六、十七節)。

エホバの御行爲の全部は神の宇宙的大組織制度の秩序と完全に一致す。エホバの組織制度はロゴス、ケルビム、セラピム、天使その他の者によつて形成され、其の最高に偉大なる全能の神エホバ在す。神の組織制度に與へられある諸名稱の一に「シオン」と云ふのがある。之は亦子等を産み出す「婦女」によつて表象さる。(イザヤ書九十四、一十三節)。エホバはその宇宙的大組織制度の中より或る者等を選び取りそれ等を神の首都制度の中に編入された。此の首都制度の首位が即ちイエス・キリストである。エホバはその聖意を執行するために此の首都制度を使用し給ふ。此の首都制度は聖書の中にて亦「神の國」又は「天國」とも呼ばれてゐる。

神は最初の人を創造して、彼の名をアダムと呼ばれた。然る後に神は一人の女を創造し、之をエバと名附けられた。之等の男女は己と同種の人類を此の地上に生み出す力を與へられた。此の最初の人と其の妻とは共にエホバの宇宙的组织制度の成員であつた。即ち彼等は肉眼に見えざる天的部員の下に監督を受けるところの、地上の見ゆる成員であつた。彼等は美と完全の場所なるエデンに在つた。人間は神よりその守るべき律法を示され、同時に其の律法に違背する時の刑罰は死なる事を併せ示された。その違背の方法が問題たるに非ずして、要するに律法を破る事は罪であり、而して其れに對する刑罰は死であると示されてある。神は人間に對して大なる事を要め給ふたのではなくして、唯或る種の果物を食するを禁じ給ふたのみであつた。人間は意識して神の律法を破つた、故に彼の上には當然死の判決が下され、彼は神の宇宙的组织制度の中より放逐されたのである。

或る長い期間の間にアダムの肉體は次第に衰へて行つて遂に彼は死んだ。最初の人はその創造された時より後、罪人と化するまでの間は富んでゐたが、然る後に彼は總ての物を失つて了つた。(創世記三章十七-廿四節)。神の律法を破つたアダムの悪事と、他の被造物が此の悪事に參加したる事とは共に神エホバの聖名の上に大なる誹謗を到來せしめた。然らばエホバは宇宙萬物の前に己が聖名の潔きことを證明し給ふのであらうか。然り、我等は今この事に就て學ばんとするのである。

神の御目的

「全能の神」なる名稱は、天地全宇宙の大創造主なる大永遠者の上に適用さる。其の「エホバ」なる聖

名は、神の被造物に對する御目的を意味す。アダムの叛逆と墮落後、そして彼が神の宇宙的組織制度より放逐されたる時、大創造主は象徴的辭句を用ひて其の御目的を發表し、神は御豫定の時に神の首都制度即ち「御國」を出現せしめ、不法者の全部を撃ち滅して天と地に正義を樹立し、それによつてエホバの聖名の潔き事を證明すべしとの旨を示された。(創世記三章十五節、十二章二、三節、廿二章十六、十八節)。「神は愛なり」(ヨハネ第一書四章十六節)と示さる。即ち之は、神は絶対無私者に在して、絶対無私の実行者に在すと云ふを意味するのである。被造物の心の中にエホバの聖名が潔められると云ふ事は別にエホバの榮光に何かを増し加へると云ふ譯ではない。此の大創造主に就て被造物が何と考へやうとも、大創造主には何の利益をも與へるのではない。大創造主は其の聖名を證明せんとの御目的を發表された。而して此の聖名の證明は、神の被造物自身の方で偉大なる富を受くるに必要な完全なる機會を大創造主より受けることとなるのである。神は人間を救はんと努力してゐられるのではなくして、唯人々が神の準備し給ふ救の道を發見し得る機會を彼等に與へ給ふのである。神は凡ての富の源泉に在す。眞の富を樂まんと欲する者は何れも神を知り、その御目的に就て正しき諒解を得なければならぬ。エホバは此の爲に必要なものの全部を備へ給ふ。

人間は本來、地に滿つる神の富を享樂すべき者として地の上に創造されたる者である。此の故にエデンにあつた完全なる人間は此の富を有してゐた。而して若し彼が大創造主に斷へず服従してゐたなら

ば、彼は永遠に此の富を享樂し得たる筈であつた。アダムは地上に己が子孫を繁殖する力を行使せざる前に、神の律法を犯したるが故に、己自身に於て全てのものを失ひたるのみに止まらず、後彼の子孫として生れ出でたる地上全人類は何れも罪人であり、不完全なる者であり、生存權を有せざる者となつた。「それ一人の人(アダム)によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人、罪を犯ししが故に死は凡ての人に及べり」(改譯ローマ書五章十二節)。神は地を人類の住所として創造されたと聖書は明示す。「われ地を創造りて、其の上に人を創造せり。われ自らの手をもて天をのべ、其の萬象を定めたり。エホバは天を創造し給へる者にして即ち神なり。また地を堅くし、徒らに之を創造し給はず、之を人の住所に創造り給へり。エホバかく宣ふ。我はエホバなり。我の外に神あることなし」(イザヤ書四十五章十二、十八節)。

然らば人間が神に叛逆して己が生存權と富の全部とを失ひたる事は、地球創造に關するエホバの御目的を失敗に歸せしめたのであらうか。エホバの御目的は決して失敗せず、之は必ず成就實現す。之に就て斯く記さる。「われ此の事を語りたれば必ず來らすべし。われ此の事を謀りたれば必ず成すべし」(イザヤ書四十六章十一節)。「如此わが口より出づる言も虚しくは我に歸らず、我が喜ぶところを成し、我が命じ遣りし事を果さん」(イザヤ書五十五章十一節)。エホバは其の聖意を妨害せんとする者を決して許し給はず。エホバと其の律法は絶対に不變である。(マラキ書三章六節)。エホバはその判決を決して取り消し給はない。

全人類はアダムの罪によつて生存権を失ひ、悉くが罪人として生れ出たと云ふ事が斯く判明せる時、然らば彼等は如何にしてエホバの聖手より眞の富を受け、之を永遠に享樂する事が出來得るやうになるのであらうか。

贖ひ

人間は己自身の努力によつては決して眞の富を獲得する事は出來ぬ。斯く記さるゝ汝等、我等の主イエス・キリストの恩を知る。彼は富める者なりしが、汝等の爲に貧しき者となれり。これ汝等が彼の貧窮によりて富める者とならんためなり。(コリント後書八章九節)。此の聖句は即ち、人々は如何にして其の望む所の富を獲得し得るかの際を最も簡明に示してゐる。全人類は罪に生れ、邪曲の中に孕まれ、(詩篇五十一篇五節)、神より離れ、罪の力の下に封じ込められ、必然死すべき者として貧困窮乏の中に此の地上に生れ出た。人類の中の極めて少數が他の人々を押しつけて、己等自身のみ地の物質的富を獲得、専有す。然し之等少數者は眞の富を失ひ、唯空き偽富を擁してゐるに過ぎない。己が富を頼み、財多きを誇る者、たれ一人己が兄弟を贖ふこと能はず、之がために贖價を神に献げ、之を永久に生き長へしめて朽ちざらしむること能はず。そは賢き者も死に、愚者も獸心者も等しく滅びて、其の富を他人に遺すことは常に見るところなり。彼等秘かに思ふ、我が家は永久に存り、我が住所は世々に至らんと。彼等は其の地に己が名を負はせたり。されど人は榮譽の中に永くとどまらず、亡び失する獸の如し。(詩篇四十九

篇六、七、九一十二節)。斯く不完全なる人間には其の熱望するものを得る事が絶對不可能である。

神には人間に與へたる審判を自ら取り消す事能はずと雖も、然かも猶人間に對する一の代價を受け容れて、之により人間と其の子孫を死の状態より解放する事を得給ふ。此の故に人間の爲にエホバの手に備へられる代價は、罪を犯さざりし以前の人間の完全さに匹敵相當するところの完全なる一個の人間の生命でなければならぬ。(申命記十九章廿一節)。即ち罪を犯したる人間アダムの身替りとなる者は、其の罪を犯さざりし以前の完全なる人間性に相等しき者でなければならぬ。神の此の律法に合致するには、神の律法に命ずる所のものに對して、それ以上であつてもならず、また其れ以下であつてもならぬ。地上全人類は罪人アダムの子孫であるが故に、己と同じき人間のために贖ふ者となる事は不可能である。「贖價」とは、律法の命ずるところに基いて、罪を犯したる者に相等しき價格又は價値を謂ふ。

罪を犯したのは完全なる人間アダムであつた。神の律法はその人間アダムの死を要求した。而して神の審判はアダムの上から其の生存権を沒收して了つた。斯くしてアダムは死んだのである。生存権を有する者以外の者がアダムに對する贖價となることは出來ない。アダムと其の子孫の爲に贖價たらんとする者は、未だ罪を犯さざりし以前のアダムの完全さに匹敵する者でなければならぬ。即ち罪人の身替りとなり、其の贖價となるために死なんとする者は一個の完全なる人間でなければならぬ。半人半靈の者は、一個の完全なる人間アダムの身替りとなる事は出來ぬ。以上に見るも被造物自身の方で此の贖價を

備ふることの絶対不可能なるが明かである。之を備へ得る者は唯神のみに在し、而して又神は自ら此の贖價を人間のために備へ給ふたと聖書は示してゐる。之ぞ即ちエホバが絶対無私の実行者に在す事を立證するものである。

神エホバの「言」即ちロゴスは、神エホバの次に位する靈者として、萬物創造に於けるエホバの代理者として、而して被造物全部の富を享樂する者として、極めて富める者であつた。此のロゴスが人間に對する贖價となるには、彼は一個の人間とならなければならぬ。即ち彼は天界に於て樂める富と榮光の全部を見捨てて、單なる一個の人間とならなければならぬ。之に就て斯く記さる「天の使たちより少しく劣らされし者：イエスを見たり。其の死にたるは神の恩に因りて凡ての人に代り、死を味はんがためなり」(ヘブル書二章九節)。之ぞ即ち地上にありたるイエスは半人半靈の者ならず、又靈者にも非ずして、彼は天使よりも低き一個の人間であり、罪人の代償となるべく己自身に於て罪なきに拘らず、一個の罪人として死ななければならなかつた事が明白である。故に彼は天界の富と榮光を見捨てて、貧しき者となつたのである。

然らば此のロゴス即ち今「イエス」と呼ばれる者は、如何なる方法で一個の人間とされたか。イエスに生命を與へたる者はアダムの子孫なる人間ではなかつた。若しイエスがアダムの子孫の一人として生れ出でたならば、彼も亦當然不完全なる人間に過ぎない。聖書は明示して、ヨセフとマリヤとは未だ尙

婚約中、即ち肉體關係あらざりし以前に、マリヤは「聖靈によつて妊みたり」と明示す。即ち神エホバの見えざる靈力が、處女マリヤの胎内に一人の兒を妊ましめたのである。今これを換言すると、エホバは其の靈力を用ひて、未だヨセフと借ならざりし以前のマリヤの胎内に胎兒を妊ましめ給ふたのである。神の天使はヨセフに此の神命を傳へた。即ち「ダビデの裔ヨセフよ、汝妻マリヤを娶ることを恐るる勿れ、その孕める所の者は聖靈に由るなり。かれ子を生まん、其の名をイエスと名くべし。そは其の民を罪より救はんとすればなり。凡て此の事は、豫言者に託りて主の言ひ給ひし言に、處女はらみて子を生まん、其の名をインマヌエルと稱ふべし、とあるに應はせんためなり。其の名を釋けば、神我等と借に在りとの義なり」(マタイ傳一章廿三節)。

豫定の時至るに及びてマリヤは、大創造主の靈力によつて奇蹟的に妊みしその子を産んだ。此の子は神によりて生れ出でたる者であつて、其の名をイエスと名けられた。此の名は「救世主」と云ふを意味す。イエス出生の瞬間、神の天使は天界より地上人類に對する最大重要事を傳へた。「主の天使來りて主の榮光彼等をめぐり照らしければ牧者大いに恐れたり。天使これに言ひけるは、懼るること勿れ。我萬民に關りたる大なる歡喜の音信を汝等に告ぐべし。それ今日、ダビデの邑に於て汝等のために救主生れ給へり。これ主たるキリストなり。天上ところには榮光神にあれ。地には平安、人には祝福あれ」(ルカ傳二章九―十四節)。

斯くしてイエスと名けられたる一個の完全なる子が此の世に生れ出た。其の子愈々成長して、精神強健に、智慧滿ち、神の恩寵その上に臨れり（ルカ傳二章四十四節）。神の律法によると、人が神の組織制度の僕即ち祭司の職に就くには滿三十歳たるべしと定められてゐた。イエスは成人した。そして今その父なる神エホバの御目的を實行する者としての資格を備へた。イエスはヨルダン河畔で洗者ヨハネに會つた。ヨハネはイエスの請ひに應じて河中でイエスに洗禮を施した。此の洗禮は、何事にも父の聖意をなさんとすのイエスの決意を外面的に表示したるものであつた。『イエス、バプテスマを受けて水より上れる時、天忽ち之が爲に開け、神の靈の鴿の如く降りて其の上に来るを見る。又天より聲ありて、此は我が心に適ふ愛子なりと言へり』（マタイ傳三章十六、十七節）。斯くエホバは、イエス・キリストが神の愛子であり、イエスは神の聖意を成就するために地上に遣された者なる事を聲明された。爾後三年半、人間イエスは最も強き試練の下に置かれ、其の状態にありて父なる神に對する忠誠を立證し、貞節を固く保つた。

何故にイエスは地上に在つたか。聖書の示す處によると、その第一の目的は、父なる神エホバの聖名の深きことを證明するにあつた。而して第二には、人類を贖つて、彼等のために生命の道を開く事にあつた。アダムの子孫なる地上全人類は生存權を有さずして此の世に生れ出た。之に就て聖書は簡明に示して言ふ、「これ一人より罪は世に入り、罪より死の來り、人皆罪を犯せば死の凡ての人に及びたるが如

し』（ロマ書五章十二節）。

全人類は罪を遺傳したのであつて、各人が其の罪に對して神の前に直接責任を負ふのではない。彼等は罪と惡の状態に生れ出るより外に仕方がなかつた。『視よ、われ邪曲の中に生れ、罪に在りて我が母われを孕みたりき』（詩篇五十一篇五節）。人類の上から此の不完全さを取り除く事は、唯一個の完全なる人イエスが罪人の身替りとして死に、それによつて人類のために贖價を備ふる事によつてのみ可能である。イエスは一個の完全なる人間であつた。そしてイエスは何れの點よりするも、罪を犯さざりし以前の人間アダムに匹敵してゐた。イエスは一個の人間としての完全なる生命と、生存權を有してゐた。神エホバに服従し、常にエホバの聖意に一致して歩む者は神より生存權を與へらる。完全なる人間イエスは人類に對する贖價たる可く必要な諸條件を具備してゐた。贖價が先づ備へられて後、エホバの聖名の證明が之に續く事となつてゐる。

神は罪人のために贖價たるべく、完全なる人間イエスの死なん事を強要し給はない。唯イエスが父の聖意に一致して自發的に死すべき方法を備へ給ふた。人々が永久の生命への機會を得る事は神の聖意であつた。而して主イエスに此の神の聖意をなす事を一任されたのである。此の故にイエスは父の聖意に従つて、「贖ひ主」たるべく己が生命を自發的に提供するのであつた。神の御準備に就て斯く記さる。『罪の價は死なり。神の賜物は我等の主イエス・キリストに於て賜はる永久の生命なり』（ロマ書六章廿三節）。

之に見るも意識的の罪人に對する刑罰は死であり、而してエホバが人間の爲に生命への道を備へ給はざる限り、死より脱して、生命に至る道は永久に開かれぬ事がある。生命は神よりの賜物である。神は凡ての服従者に對して、イエス・キリストを通じて此の生命を與ふるやう準備し給ふた。生命と生存權とは唯之を神エホバのみより受く。此の故に「神の賜物は我等の主イエス・キリストに於て賜はる永久の生命なり」と示されてあるのである。然し此の賜物を受くる前に、之を受くる者の上から不完全さが先づ取り除かれなければならぬ。而して此の不完全さを除去するには、完全なる人間イエスが犠牲的に死して、罪人のために贖價が備へられなければならぬ。此の理由に基いてイエスは斯く告げ給ふた。「斯くの如く人の子の來る人も人を使ふためには非ず、反て人に使はれ、又多くの人に代りて生命を與へ、其の贖價とならんためなり」(マタイ傳廿八章)。イエスの來れるは彼自身の利益のために何かを受けんが爲には非ずして、反て他の人々に仕へ、己が生命を人類に與へて、彼等のために救の道を開くにあつたのである。

貧窮

完全なる人間イエスは死ななければならなかつた。然し此の死はイエス自身の罪のためにも非ず、又死を強制されたるにも非ずして、此の死は父なる神の律法に服従してなすところの自發的の死であつた。父の聖意をなす事はイエスにとつて無上の歡喜であつた。(詩篇四十章八節)。イエスの死は強制的の死

ではなくして、父の聖意に一致しての自發的の死なる事に就てイエス御自身斯く告げ給ふ。「我が父我を愛す。そは我再び生命を得んが爲に生命を棄つるが故なり。我より之を奪ふ者なし。我自ら之を棄つるなり。我これを棄つるの權能あり。亦よく之を得るの權能あり。我が父より我この命令を受けたり」(ヨハネ傳十章十七、十八節)。

之を即ちイエスが父の聖意に服従する事を唯一の歡喜とされたる事を明らかに立證するものである。イエスは天界に於て甚だ富んでゐた。天界の靈者から地上の人間となる事はイエスにとつては富める者より貧しき者になつた事を意味す。地上に於ける一個の人間としてのイエスは富んでゐた。イエスはアダムを除いては、地上に於ける唯一の完全なる人間であつた。イエスは亦「人の子」の名稱で呼ばれてゐる。之は即ち、イエスが地上に於ける唯一の完全なる人間である事と、アダムの失ひたるものの全部を所有する正當の所有者となつた事を意味してゐる。アダムは其の罪の故に貧窮者となつた。此の罪人アダムの身替りとならんがために、イエスも亦自發的に貧窮者とならなければならなかつた。罪人に對する贖ひ主とならんが爲にイエスも亦當然所有するところの全部を棄てて一個の貧窮者とならなければならなかつた。之に一致して斯く記さる。「狐は穴あり、空の鳥は巢あり。されども人の子は地に枕する所なし」(ルカ傳九章五十八節)。之は別にイエスが、己自身を休むる爲に身を横たへる場所を有さないと云ふを意味してゐるには非ずして、罪人の身替りとなるために來たイエスは、己が所有すべきものの全部を

棄てると云ふ事を意味してゐるのである。此の理由によつてイエスは己自身を狐や鳥に比較對照されたのである。イエスは富の全部を棄てて、全く貧しくならなければならなかつた。

イエスは何故に貧しくならなければならなかつたのか。此の一理由として斯く示さるゝ「汝等の爲に貧しき者となれり。これ汝等が彼の貧窮によりて富める者とならん爲なり」(コリント後書八章九節)。之を換言すると、イエスは神の聖意に全く一致して、人類に對して生命の道を開く救世主たるの資格を備へられることとなつたのである。此の理由に基いてイエスは斯く告げ給ふ。「我が來るは羊(人々)をして生命を得、且つ豊ならしめん爲なり」(ヨハネ傳十章十節)。

エホバによつてなされた此の御準備と、キリスト・イエスによつてなされた此の贖ひの方法以外に、人間が生命を得るの道は絶無である。「此の外に別に救ひある事なし。そは天下の人の中に我等の依り頼みて救はるべき他の名を賜はざればなり」(使徒行傳四章十二節)。イエスの血を以て人類に對する贖價である事を固く信する者のみが永久の生命を有する事が出来る。神は此の御準備を、昔モーセの手によつてイスラエルの子孫を取り扱ふ事によつて豫表された。砂漠にあつたイスラエルの民は非常に食物を必要とした。神は民の指導者として任じ給へるモーセの手を用ひて食物を彼等に與へられた。此の點に就て猶太人はイエスに告げた。「我等の先祖は野にてマナを食へり。録して、天よりパンを與へて食はしむるとあるが如し。イエス曰ひけるは、誠に實に汝等に告げん。天よりパンを汝等に與へし者はモーセに

非ず。今我が父は天より眞のパンをもて汝等に賜ふ。神のパンは天より降りて生命を世に與ふるものなり。彼等(猶太人)言ひけるは、主よ、常に其のパンを我等に與へよ。イエス言ひけるは、我は生命のパンなり。我に來る者は餓えず、我を信する者は常に渴く事なし。我が天より降りしは、己の意のままを行はん爲に非ず、我を遣しし者の意のままを行はん爲なり。凡そ子を見て之を信する者は、永久の生命を得。われまた之を末の日に、甦らすべし。これ我を遣しし者の意なればなり」(ヨハネ傳第六章十一—十五、廿八—四十節)。

パンは肉體を支ふる食物である。イエスは此處で、御自身は人間に生命を授與する者として備へられたる者である事を示す爲にパンを例に用ひられた。「誠に實に我汝等に告げん。我を信する者は永久の生命あり。我は生命のパンなり。汝等の先祖は野にてマナを食ひしかど死ねり。凡て食ふ者をして死なざらしむる者は天より降れるパンなり」(ヨハネ傳第六章四十七—五十節)。イエスの之等の言は、神エホバより來れる絶對の權威をもつて語られたのである。

イエスの死は、神を信じて之に服従する者にのみ利益を與ふ。イエスは亦權威を以て更に斯く告げ給ふ。「我は光にして世に來れり。凡て我を信する者をして暗黒に居らざらしめん爲なり。我を棄て、我が言を容れざる者を審判くものあり、即ち我が言ひし言末の日にこれを審判すべし。そは我は己より言ふに非ず、我を遣しし父我が言ふべきこと、我が語るべきことを命じ給へるなり。其の命じ給ふところは

即ち永久の生命なるを我知る。この故に我が言ふところは父の告げ給ふままに言へるなり」(ヨハネ傳十二
章四十六、四十八―五十節)。神は何人に向つても贖價の償らす利益を押しつけ給はない。生命は「神の賜物」
であると示さる。凡て「賜物」とは人が先づそれを諒解して後に受け容れるものである。

完全なる人間イエスの死は、その死の様が如何にあつても律法の要求するところに合致する。何故な
ればアダムの上に下されたる判決は死であつたからである。然らば何故にイエスは木に釘づけられたの
であらうか。イエスは二本の材木の交叉したる所謂「十字架」の上に釘づけられたのではなかつた。人
間が考案して拜んでゐる偶像繪畫に示されてあるやうな十字形のものではなかつたのである。イエスの
身體は木の上に釘づけられたのである。イエスの此の死様は即ち此の人は神より呪はれたる者である。
と云ふを表示してゐる。罪人として死ぬる事は耻辱的死である。木に懸けられて殺されると云ふ事は即
ち此の者は死刑に處せられたる罪人である」と云ふを意味してゐる。之は即ち神の律法によつて定め
られある處である。(申命記廿一章廿二、廿三節)。神の呪詛は罪人アダムの上にあつた。此のアダムに對する
贖ひ主とならんが爲には、イエスは己自身に於て罪なきに拘らず、一個の呪はれたる罪人として死なな
ければならなかつた。此の理由によつてエホバは其の愛子を木に釘づけられたのである。『キリスト既に
我等のために誦はるる者となりて、我等を贖ひ、律法の呪詛より脱れしめ給へり。そは凡て木に懸る者
は誦はれし者なりと録されたればなり』(ガラテヤ書三章十三節)。「我等の先祖の神は、汝等が木に懸けて殺し

しところのイエスを懸らせ給へり」(使徒行傳五章卅節)。

イエスが木に懸けられて、殺されたる事は即ち、此のイエスは神の律法の命ずるところに従つて、最
悪の逆境下にあつても猶神の聖意に全く服従し、最も耻辱的死を喜び進んで自發的に遂げたと云ふ事を
全被造物に證したるものであつた。

完全なる人間イエスは貧しき人となりて、耻辱的死を遂げた。エホバは此のイエス・キリストを死よ
り甦らして、神性の大靈者となし、限りなき富を之に與へられた。之に就て聖書は斯く示す。「彼(イエス)は
神(大靈者)の形に居りしかども自ら其の神とひとしく在るところの事を棄て難きことと思はず、反て己
を虚くし、僕の貌をとりて人の如くなれり。既に人の如き形状にて現はれ、己を卑くし、死に至るまで
順ひ、十字架の死(木に懸られる罪人の死)をさへ受くるに至れり。此の故に神は甚しく彼を崇めて、諸々の
名に起る名を之に與へ給へり。此は天に在る者、地に在る者及び地の下に在る者をして悉くイエスの名
によりて膝を屈ましめ、かつ諸々の舌をして悉くイエス・キリストは主なりと稱揚はして、父なる神に
榮を歸せしめためなり」(ヘリド書二章六一―六十一節)。

神エホバはイエス・キリストを宇宙萬物の最上位に引き擧げて、彼を御自身の次位に置かれた。キリス
ト・イエスは宇宙の富の全部を興へられ、エホバの聖名の證明者、絶対權威ある代理執行者とされた。
キリスト・イエスは萬物創造に於てエホバの代行者であつた。而して其の復活後に於けるイエスは之等

萬物を嗣業として神より授けられたのである。之に就て斯く記さる、神昔は多くの區別をなし、多くの方法をもて豫言者によりて先祖たちに告げ給ひしが、此の末の日には其の子に託りて我等に告げ給へり。神は彼を立てて萬物の嗣となし、かつ彼をもて諸々の世界を造りたり。彼は神の榮光の光輝、其の質の眞像にて、己が權能の言をもて萬物を保持ち、我等の罪の潔めをなして、至上きところに在す威光の右に坐しぬ。彼が受けし名の天の使者の名よりも優れる如く彼等よりは優れり。そは天の使者たちの中なる誰に曾て斯く言へるや、汝は我が子なり。われ今日汝を生めりと。又われ彼の爲に父とならん。彼は我が子となるべしと。また長子を世に入らしむる時に言ひ給へるは、神の諸ての使者は皆これに跪づくべしと』(ヘブル書一章一―六節)。

キリスト・イエスは全地の王即ち正當なる支配者とされた。全地人類はキリスト・イエスの御名に於てのみ神エホバより祝福を受くべく、人々は皆キリスト・イエスの御名の上に固き信頼を繋ぎなければならぬ。その子に言へるは、神よ、汝の位は世々に及び、汝の國の杖(支配權)は正しき杖なり。汝は義を愛し、惡をにくむ。是故に神即ち汝の神は、喜樂の膏をもて汝の侶よりも優りて汝に注げり。また曰く、主よ、汝は元始に地の基を置く。天も汝が手の工なり』(ヘブル書一章八―十節)。キリスト・イエスは、その血を信じ、人類のために神の立て給へる此の祝福の授與者に全く服従する者の全部に對して永遠の救ひとなつた。既に完全ければ、凡て彼に従ふ者の永遠救ひの原となれり。彼はメルキセデクの如き祭司の

長なりと神に稱へられき』(ヘブル書五章九、十節)。

贖價の準備は、全人類を救ひて地上に永久の生命を樂ましむるが爲になされたるに非ずして、之は唯、主イエス・キリストを信じて神の律法に歡喜の服従をなす者に救ひと富を得る一の機會を保證するものであつた。此の故に所謂「全人類救濟の教理」は聖書に一致せざる誤つた教理である。それと同時に神は人を救はんと努力してゐられるのではない。況や人間の分際をも顧みず「靈魂を救ふの力を有す」などと説くは全く神の前に憎まるる不遜の言辭である。救は神の御準備に一致服従する者のみに對して、イエス・キリストを通じて神より來るのである。

知識

眞理の明快なる知得を有する者は即ち「知識」を保つ者である。「知る」と云ふ事は、眞理の何なるかを知覺し、理解し、諒解するを意味す。眞理を以てせずしては何人も正しく教へられない。イエスはエホバの聖言に就て絶對の權威をもつて斯く示し給ふ、汝の聖言は眞理なり」と。之は即ち聖書の中に記されあるエホバの御目的は眞理である、と云ふを意味するのである。(ヨハネ傳十七章十七節)。人は、眞理の知識を受けてそれに全く服従する時に、初めて至上者エホバの聖前に奉仕する者としての資格を與へられ、神の聖手によりて大なる富をその無限の寶庫より受ける事が出来るのである。

多數の人々は人間所産の教會制度やその偽教に欺かれた。羅馬カトリック教權は統治支配の權を偽稱

する少數の人間によつて組織されてゐる偽物キリスト教であつて、之は此の教權に服従する全地數億の
人々を支配してゐる。之等の大衆はカトリック教權即ち「教會」を形成する者に非ずして、之は單に此
の制度を物質的に支持する外圍團體と認められてゐるに過ぎない。此の制度は偽教理を人々に強制し、
人々は之に盲従をなしてゐる。之は聖書に示される神の眞理に絶對逆行する偽教理である。
羅馬カトリック教權は、人々を己が制度に盲従せしめんが爲に人々を聖書より離反せしむべく熱心に
努力しつゝある。而して之等の盲従者は全く自由を有さずして、此の人間製組織制度の奴隷となつてゐ
る。彼等は人間所産の偽教より自ら脱して、神の眞理の示す眞理に來らざる限り眞の自由を得ることは
絶對に不可能である。イエスは之等の盲従者に告げ給ふ、「汝等若し我が言に居らば……眞理を知らん。
眞理は汝等に自由を得さすべし……此の故に子若し汝等に自由を與へなば汝等は誠に自由を得べし」(ヨ
ハネ傳八章卅一―卅六節)。此の故に知識とは、聖書中に記されあるイエスの御言を正しく諷解する事を意味し
てゐるのである。

眞理の眞價は人間の言で評價し得ない。神の備へ給ふ眞の富を得んと願ふ者は以下の註聖句を慎重に
讀みて味はふべきである。「エホバを畏るるは知識の本なり、愚なる者は智慧と訓諭とを轉んず」(箴言一
章七節)。「若し知識を呼び求め、聰明を得んと汝の聲を擧げ、銀の如く之を探り、秘れたる寶の如く之を
窺ねば、汝はエホバを畏るることを曉り、神を知ることを得べし。そはエホバは智慧を與へ、知識と聰

明と其の御口より出ればなり。彼は義しき人のために聰明をたくはへ、直く歩む者の楯となる。そは公
平の道を保ち、其の聖徒の道すぢを護り給へばなり。斯くて汝は遂に公義と公平と、正直と一切の善き
道を曉らん。即ち智慧汝の心に入り、知識汝のたましひに樂しからん。謹慎汝を守り、聰明汝を保ちて
惡しき道より救ひ、嘘偽を語る者より救はん」(箴言二章三―十二節)。

「汝等銀を受くるよりは我が教を受けよ。精金よりも寧ろ知識を得よ。それ智慧は眞珠に優れり。凡て
の寶も之に比ぶるに足らず」(箴言八章十、十一節)。

「智慧ある者は知識を善ふ」(箴言十章十四節)。神が服従者の爲に備へ給ふ眞の富を受けて味ひ樂み得る者
は唯「智き者」のみである。「また室は知識によりて各種の貴く美はしき寶にて滿されん。智慧ある者は
強し。知識ある人は力を増す」(箴言廿四章四、五節)。

聖書の中にある「智慧ある人」即ち「智き人」とは、神の眞理の知識を得て、之に熱心に服従する者
を謂ふ。之ぞ即ち誠に智慧ある人である。「智慧を求め得る人及び聰明を得る人は幸福なり。そは智慧を
得るは銀を得るに優り、其の利は精金よりも善ければなり。智慧は眞珠よりも貴し。汝の凡ての財寶も
之に較ぶるに足らず」(箴言三章十三―十五節)。

正直に得たる物質的富を正しく使用する時に善き結果を生む。然れど之も亦眞理の知識と比較する事
は出来ぬ。「智慧を得るは金を得るよりも更に善らずや。聰明を得るは銀を得るよりも望まし」(箴言十六

十六節)。「エホバを畏るる事は智慧の本なり。聖者を知るは聰明なり」(箴言九章十節)。
聖書に示されてある「神を畏れる」と云ふ事は、神を恐怖すると云ふを意味してゐるのではない。「エホバを畏るるとは悪を憎むことなり。我は傲慢と驕奢、悪しき道と嘘偽の口とを惡む」(箴言八章十三節)。
此の聖句は即ち、他を害する行為の全部を嫌忌する事を意味してゐる。傲慢や驕奢より己を避け遠ざける、何故なれば斯かる行為は神に惡まれるからである。而して神の聖言を紊る如き人間製邪教の全部を排斥するのである。神に嘉せらるる者は常に神に教へられて進まねばならぬ。其の教示に云ふ「機會ある毎に他の人々に善をなせ」。而して審判の全部を主に一任せよ。(ガラテヤ書六章十節。ロマ書十四章四節)。
人は眞理の知識を得たる時に之を熱心に追ひ求め、その機會の許す限りに於てその歡喜を他の人々に宣べ傳ふ。斯くする事によつてその人は他の人々に向つて善をなす事となり、又己が感謝を實際に表明する事となる。人は神の賜物なる富を受くる前に先づ神の眞理の知識を有さなければならぬ。此の理由によつて、人々を神の聖書より離反せしめて彼等を無知の状態に封じ込め置かんとする組織制度の全部は全くの邪惡物なる事が明らかである。人々が眞理を知るの一の機會を得るために聖書は記し置かれたのである。如何なる人と制度とを問はず神の名を許稱して人々を偽り教へ、彼等を商品化する事は斷じて許されないのである。

神の祝福

神エホバは愛に在す、故に神は絶對無私に在す。此の神は人間のために救と祝福とを準備し給ふた。「それ神は其の生み給へる獨り子を賜ふほどに世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信する者に減ぶることなくして永久の生命を受けしめんが爲なり」(ヨハネ傳三章十六節)。神は無私の愛を以て御自身多大の犠牲を拂ひ、その愛子を與へて、人類の爲に生命への道を開き、彼等をして神の富の祝福を受くる者たらしめ給ふた。此の世の物質的富の獲得者は早晚悲みを見なければならぬ。神エホバの與へ給ふ富は之と正反對である。「エホバの祝福は人を富ます。人の勞工はこれに加ふるところなし」(箴言十章廿二節)。神の祝福には平安と歡喜とが常に伴ふ。
神の眞理を熱心に求むる者を確信づけるために斯く記さる。「エホバの法は完全くしてたましひを生きたがへらしめ、エホバの證言は確くして愚なる者を智からしむ。エホバの訓諭は直くして心を喜ばしめ、エホバの誠命は聖くして眼を明かならしむ。エホバを畏みおそるる道は聖くして世々に絶ゆることなく、エホバの審判は眞實にして悉く正し。これを黄金に比ぶるも、多くの精純金にくらぶるも彌まさりて慕ふべく、これを蜜に比ぶるも、蜂の巢の滴瀝に比ぶるも彌まさりて甘し。汝の僕は之等によりて戒めを受く。之等を守らば大なる報賞あらん」(詩篇十九篇七十一節)。
神の律法に従ふ者は決して悲哀を見ることなし。唯神の律法より離れ去る者の上のみ悲哀は臨む。此の故に神の律法を諒解して、之に服従するは何ものにも勝さりて望ましき事である。

神エホバより發する富は、イエス・キリストを通じて忠實なる服従者に與へらる。此の知識を得て神の道に歩む者に向つて斯く約束されてある「惡しき者の謀計に歩まず、罪人の道に立たず、嘲笑る者の座に坐らぬ者は幸福なり。斯かる人はエホバの法を喜びて日も夜も之を思ふ。斯かる人は水流の邊に植ゑし樹の期に至りて實を結び、葉もまた凋まざる如く、その爲す所みな榮えん」(詩篇一三三節)。イエス・キリストの忠實なる使徒パウロはエホバの大寶庫の富の或る一部を味ひ、己と同じく正義の道を求めて歩む者等に向つて斯く告ぐ「汝等のために感謝して止まず、常に我が祈禱の時に汝等を思ふ。我等の主イエス・キリストの神、榮光の父、智慧と默示の靈を汝等に賜ひ、汝等をして神を知らしめ、又汝等の心の眼を明かにし、其の召を蒙りて有つ所の望と聖徒に賜ふところの榮の富と、また信する汝等に對して行ひ給ふ神の能力の極めて大なることを知らしめ給はん事を願ふ。汝等の信するは神の大なる能力の感動に由るなり」(エペソ書一章十六・十九節)。

天の富

「世」とは天と地とを以て成る。「天」とは肉眼に見えざる部分を謂ふ。「地」とは肉眼で見ゆる部分を謂ふ。過去永らくの間、地上の人類は見えざる惡靈と、此の惡靈に用ひらるる人間の組織制度によつて支配されて來た。エホバは、正しき世界を立て、正義を以て地上人類を支配せんとすの旨を發表し給ふた。

「又汝の裔(子孫……は眞理)によりて天下の民皆福祉を得べし、汝我が言に従ひたるによりてなり」(創世記

廿二章十八節。イザヤ書卅二章一節)。エホバは其の發表せる御目的を必ず實行し給ふ。忠信なる使徒は此の神の御約束を確信して言ふ「然れど我等は、其の約束に因りて新しき天と新しき地を望み待てり、義その中に在り」(ペテロ後書三章十三節)。人々の切望するものは實に此の新天地である。此の新天地は正義の世を形成す。之ぞ即ちキリスト・イエスを首位とする神の首都制度であつて、人語に絶する富を保有するのである。首位者なるキリスト・イエスと共に十四萬四千人が之に参加して神の首都制度を形成し、キリスト・イエスの富と榮光に參與す。而して主イエスに奉仕する天使の一軍が之と共にある。

首都制度に參與する十四萬四千人は地上の人間の間から取られたる者である。(啟示録七章四節。十四章一・四節)。之等の者は、最初に眞理の知識を受け、此の世より離脱し、訓練の中にて試みられ、然る後に神エホバの承認を受けたる者にして、之等の仕事の全部は神エホバの祭司長なるキリスト・イエスによつてなされたのである。キリスト・イエスは最初に選ばれ、試みられて全き承認を受け、神に對する貞節を固く保つた事によつて、全宇宙に於てエホバの次の位に引き擧げられた。イエスはその復活後昇天迄の間、にその組織制度に入るべき成員の選擇を開始されたが、此の選擇の仕事は此の世の末までに完成するのであつた。此の榮光の首都制度は決して肉眼には見えない。何故なればキリスト・イエスを始め神の王室の成員は靈者であるからである。人間の肉眼で靈者を見る事は出来ぬ。此の王室が新しき天を形成す。此の十四萬四千人が人間より選び取られるとするならば、然らば人間は如何にして靈者たり得べきか。

人間は自力を以て己を靈者と化する事能はず、全ては神の御恵みと其の御能力によつてのみなされるのである。キリスト・イエスの全き服従によつて此の道が開かれたのである。

罪 祭

アダムは罪即ち意識して神の律法を犯した事によつて死を宣告された。人間の贖ひ主イエス・キリストは地上で死んだ。然し人間に對する死の判決は天界の法廷に記されあるが故に、之の身替りたるイエスの人間性生命は人間の罪のための祭物として天界の法廷に提出されなければならぬ。完全なる人間イエスは死せるが故に、その人間性生命の價值を罪祭として天界に提出する事は出来ぬ。人間イエスの完全なる生命はアダムのそれの如く罪の死の下にはなかつた。イエスは死んだ、然しイエスは聖く、汚れなく、罪なく、その生命權は依然實在す。(ヘブル書七章廿六節)。神はイエスを甦らされた。然し再び人間としてではなくして、決して死する事能はざる神性不滅の大靈者としてであつた。(マテロ前書三章十八節。黙示録一章十八節)。罪人の爲の罪祭として、人間の上を下されたる神の判決を満たすべく、人間イエスの生命の犠牲の價值を天の審判廷即ち「贖罪所」にまで携へて提出したのは此の神性のキリスト・イエスであつた。此の罪祭提出の儀式は、モトセがエホバの神命によつて築きたる荒野の幕屋に於ける模型によつて豫表されてある。

幕屋の儀式に於て牡牛が「庭」の中で屠られた。此の「庭」は幕屋の周圍であつて、之はイエスの死に

し地上を表象す。然る後にその屠られし牡牛の血は祭司によつて幕屋の中の「至聖」の中に携へ入れられ、「贖罪所」の上に注がれた。之は祭司長キリスト・イエスが天界に顯はれて、その犠牲の價值を提出された事を表象したるものである。(レビ記十六章六、十一、十四節)。此の幕屋の儀式は一年に一回行はれた。屠られたる牡牛は完全なる人間イエスを代表した。その血が「至聖」内に携へ入れられ、贖罪所の上に注がれた事は、イエスの完全なる人間性の價值が罪祭として天界に提出された事を豫表したのである。之に就て斯く記さる、「凡そ律法によるに諸ての物は血を以て潔めらる。血を流すこと有らざれば救はるる事なし。是故に天に在るものに象りたる物は、必ず之等をもて潔められしかど、天に在るものは之等よりも優りたる犠牲を以て潔めらるべきなり。キリストは眞の物の模型なる手にて造れる聖所に入らず、今より永く我等のために神の前に顯はれんとて眞實の天に入りぬ。また彼は祭司の長の年毎に他の獸の血をもて聖所に入る如く屢々己を獻ぐることをせず。若し然らずば彼は世の初めより以來屢々苦難を受くべきなり。然れど己を犠牲となして罪を除かんが爲に今、世の末に一度び顯はれたり。(ヘブル書九章廿二―廿六節)。天界に提出されたるキリスト・イエスの血は、人間を義とする基礎となり、神の聖意に服従する者を神との一致に連れ戻す基礎となつたのである。

キリスト・イエスはその生前に己が使徒たちを選び取られた事は事實である。そして之等の中十一人は死に至るまで神と主イエスに對するその忠節を立證した。然し彼等はイエスの犠牲の價值が天界に提

出されるまでは義とされなかつた。之等忠信なる使徒たちはペンテコステの時に義とされた。そして此の事は其の時彼等の上に聖靈が注がれた事によつて證據立てられた。(使徒行傳二章一十六節)。爾後、他の者がエホバの天的組織制度に入るの特權を受けるやうになつた。

パウロは主イエスによつて選ばれ、後キリスト・イエスの全權大使とされた。彼はエホバより靈力を受けて、種々書き記すの權威を興へられたが、彼の記述せる處は神の聖言の一部とされた。此のパウロは斯う記した。「我が汝等に傳へしは我が受けし所の事にて、其の第一は即ち聖書に應ひてキリスト我等の罪のために死に、また聖書に應ひて葬られ、第三日に甦り：：最後に月足らぬ者の如き我にも現はれ給へり」(コリント前書十五章三一八節)。

キリスト・イエスは人間の罪のために、一個の罪人として死んだ。神は主イエス・キリストを信ずる者を義とする爲にイエスを死より甦らされた。「義とされる」とは神と正しき關係に立つと云ふを意味し、斯かる者は即ち義人にして、當然生存權を有する者とされるのである。(ロマ書四章廿四、廿五節)。

人を義とし得る者は神のみに在し給ふ。人は義とされる前に先づ神の方則に一致すべきであつて、即ち彼はキリスト・イエスに關する知識を受け、イエスを以て人類の救ひ主と信じなければならぬ。イエスは斯く示し給ふ。「我は道なり、眞理なり、生命なり。人若し我に由らざれば父の所に行く事能はず」(ヨハネ傳十四章六節)。「我を遣しし父若し引かざれば人よく我に來るなし。我に來りし人は末の日に我これ

を甦らすべし。豫言者の書に、人皆教を神に受けんと録されたり。是故に凡て父より聽きて學びし者は我に來る」(ヨハネ傳六章四十四、四十五節)。

此の故に知識は第一義的に必要である。神は、熱心に正義を求むる者に此の知識を與へ給ふ。彼等は人間の皆罪人なる事と、キリスト・イエスは人間の贖ひ主なる事を學び知る。彼等はイエス・キリストの血を信じ、イエスのみが生命に至る唯一の道なる事を學び知る。人は斯くエホバに導かれてイエス・キリストに行く。そして彼は、神が生命の授與者に在す事と、キリスト・イエスが人間の贖ひ主なる事、生命は此のイエス・キリストを通じて神より賜はる賜物なる事を學び知るのである。

聖名のために

ペンテコステ以後、キリスト・イエスの再臨までの全期間は、神の國に於てキリスト・イエスに參與する者の選擇の爲に用ひられた。此の王室を形成する者の數は十四萬四千である。之等の者は單に天の榮光に參與するために選擇されたるに非ずして、之は地上に於て神の聖名と御國の證者たらんがために選ばれたのである。斯く記さる「神初めて異邦人を顧み、其の中より聖名を負ふべき民を取り給へり」(改譯使徒行傳十五章十四節)。斯く選ばれたる民等は未だ地上にある間に神エホバと其の王イエス・キリストを讚頌しなければならぬ。彼等は此の目的のために暗黒より召し出されて神の聖言の光輝の中に入れられたのである。(ペテロ前書二章九節)。神は人間を永遠の苦惱から救ひ出して天に引き擧げる爲に福音を宣べ

傳へしめられるのであるとの教への全部は贗偽である。神によりて諸國諸民の中より選び取られたる者等は神の民であつて、彼等の全部は試験を受け、地上にある間に或る特殊任務に服さなければならぬ。之等の選擇方法は左の如くである。

上記の如く人は神によつてキリストにまで引き寄せらる。然る後に神とキリストに對する信仰を表示し、神の聖意をなすべく己自身を獻げるのである。即ちキリスト・イエスの如く神の聖意をなすべく契約するのである。(詩篇四十三篇七、八節を見よ)。イエスがその弟子に與へられたる教示は、神の民の全部の上に同じく適用される。此の時、イエス其の弟子に云ひけるは、若し我に従はんと欲する者は、己を棄て、その十字架を負ひて、我に従へ。そは生命を保全せんとする者は之を失ひ、我が爲に其の生命を失ふ者は之を得なければなり。それ人の子は父の榮光を以て其の天使たちと共に來らん。其の時各々の行爲に由りて報ゆべし。(マタイ傳十六章廿四、廿五、廿七節)。

「己を棄てる」とは我意と我慾を棄てて、神の聖意を喜んでなす事を意味す。之即ち獻身である。キリスト・イエスと共に神の國に參與する者は、主イエスの如く死して後靈者として甦らされなければならぬ。之が神の聖意である。即ちキリスト・イエスと偕に生くる者は、先づ人間として死ななければならぬ。そして死に至るまでの間に神とキリストに對するその忠誠を立證するのであつて、斯かる者はイエス・キリスト再臨の時に報賞を受けるのである。

神とキリスト・イエスに在りて信仰を實行する者は神の前に「義とせられる」のである。使徒はアラハムが其の信仰によつて義とされたる事を教へ示して後に斯く附け加ふ、「それ信仰によりて義とせられたりと録されしは、唯彼の爲のみならず、亦我等の爲に録されしなり。我等若し我が主イエスを死より甦らし、神を信ぜば同じく義とせらるる事を得べし。イエスは我等の罪のために付され、又我等が義とせられん爲に甦らされたり」(ロマ書四章廿一、廿五節)。

獻身者を義とする者は神のみに在し給ふ。(ロマ書八章卅三節)。斯く神の御前に義とされたる者は、一個の義人として認めらる。是故に我等信仰によりて義とせられたれば神と和解く事を得たり。此は我が主イエス・キリストに頼てなり。亦我等彼により信仰によりて、今居る處の恩に入ることを得、かつ神の榮を望みて歡喜をなす」(ロマ書五章一、二節)。義とされる事は即ち其の人に人間としての生存權を與ふる事となる。

義とされたる者はキリスト・イエスの追隨者たるの資格を得たる譯である。之ぞ即ち一の召命である。「汝等の召されたるは之が爲なり。そはキリスト汝等の爲に苦難を受け、汝等をして己の跡に隨はしめんと模範を汝等に遺し給へばなり」(ペテロ前書二章廿一節)。

斯く義とされたる者は、キリスト・イエスと偕に死に、靈者として甦らされるのである。之ぞ即ちエホバの聖意である。此の者はキリスト・イエスと共に一の犠牲の祭物として神に受け容れられる。即ち

人間としての生存権が中断されて、靈者としての特權が開始されるのである。「それ汝等は死にし者にて、其の生命はキリストと偕に神の中に藏れあるなり。我等の生命なるキリストの現はれん時に我等も之と偕に榮光の中に顯はるるなり」(コロサイ書三章三、四節)。斯かる者は神によつて生れたる者である。「これは己の旨に従ひ眞理の言を以て我等を生めり。これ我等をして其の造る所の物の中にて、初めに結べる果の如き者とならしめん爲なり」(ヤコブ書一章十八節)。「生む」とは、神が「此の者は、神の子として天國に召されたる者である」と承認し給ふ事を意味す。「讀むべきかな、神、我等の主イエス・キリストの父、彼は其の大なる憐憫を以て我等を再び生み、我等をしてイエス・キリストの甦り給ひし事によりて生ける希望を得させ、亦我等の爲に天に藏めある朽ちず、汚れず、衰へざる嗣業を得しめ給ふなり。汝等信仰によりて神の能力に護られ、既に備へある所の末の時に顯はれんとする救を得るなり」(ペテロ前書一章三一五節)。

斯かる者はキリストに在る新被造物である。「是故に人、キリストに在る時は新たに造られたる者なり。舊は去りて、皆新しくなるなり」(コリント前書五章十七節)。之れ其の者に對する光榮ある希望である。爾後、死に至るまで彼は神に對して試練下に忠誠を立證しなければならぬ。

イエスは地上に來りし己が使命に就て斯く示し給ふ、「我これが爲に生れ、これが爲に世に來れり。それは眞理に就て證をなさん爲なり。凡て眞理に屬く者は我が聲を聽く」(ヨハネ傳十八章廿七節)。イエスはエホ

バの聖名のために忠信なる證者であつた。イエスの追隨者も亦然りてなければならぬ。イエスは眞理を告げたが故に大に誹謗され、迫害された。その如くイエスの追隨者も亦然り。(ロマ書十五章三節。詩篇六十九節九節) 神の民は此の世より全く離れなければならぬ。イエスは彼等に告げ給ふ、「世若し汝等を惡む時は汝等よりも前に我を憎むと知れ。汝等若し世の屬ならば、世は己の屬を愛すべし。然ど汝等は世の屬ならず、我汝等を世より選びたり。之に由りて世は汝等を惡む。僕は其の主より大ならずと我が云ひし言を心に記めよ。人若し我を窘迫ば汝等をも迫め、若し我が言を守らば汝等の言をも守るべし。然ど彼等は我を遣しし者知らざるに因り我が名の故をもて之等の事を汝等に加ふべし」(ヨハネ傳十五章十八、廿一節)。

キリスト・イエスの追隨者は眞理の證言をなすが故に之等の誹謗と迫害とを己等の上に招く。之れ彼等が神エホバの聖前にその忠誠を立證し得る好き機會である。彼等はエホバとキリスト・イエスに己が全部を獻げて、死に至る迄忠實にイエスの御跡を追隨しなければならぬ。イエスは之等の者に告げ給ふ、「汝死に至るまで忠信なれ、然ば我生命の冠を汝に與へん」(黙示録二章十節)。之は全時間と全精力を以てする全き獻身である。又斯く記さる、「效に信すべき話あり。我等若し彼と共に死なば彼と共に生くべし。我等若し忍ばば彼と共に王となるべし。我等若し彼を知らずと言はば彼も我等を知らずと云はん」

(テモテ福音書二章十一、十二節)。

忠信なる僕パウロは己が地上の歩みの將に終らんとする直前に於て兄弟等に斯く書き遺つた、「我今祭

物とならんとす。我が世を去る時近づけり。我既に善き戦を戦ひ、既に走るべき道程を盡し、既に信仰の道を守れり。今より後、義の冠わが爲に備へあり。主即ち正しき審判をなす者、其の日に至りて之を我に與ふ。唯我に與ふるのみならず、凡て彼の顯現るを慕ふ者にも與ふべし」(テモテ後書四章六八節)。

之ぞ即ちキリスト・イエスの追隨者の走るべき道である。ペンテコステ以後、キリスト・イエスの再臨までの間に神の王室の成員選擇の仕事が進行してゐた。此の期間内に死んだ忠信者等は主の再臨と復活の時を待つて居なければならなかつた。今、主イエス再臨の今日、使徒パウロ其の他の忠信者達は既に甦らされて神の天的組織制度即ち王室の成員とされたのである。而して今地上に残りて神とキリストに忠誠を勵む者を以て神の組織制度の地的部分が形成されてある。而して之等の者は死に至るまで忠誠を持続する時に、死の瞬間に於て肉體より靈體に甦らされるのである。即ち斯く記さるゝ「視よ、我汝等に奥義を告げん。我等悉く眠るには非ず、我等は皆末のラツバの鳴らん時忽ち瞬く間に化せん。そはラツバ鳴らん時、死にし人甦りて朽ちず、我等も亦化すべければなり。此の朽つる者は必ず朽ちざる者を着、死ぬる者は必ず死なざる者を衣るべし。此の朽つる者朽ちざる者を着、死ぬる者死なざる者を衣ん時、聖書に録して、死は勝に吞まれんとあるに應ふべし」(コリント前書十五章五十一―五十四節)。

地上にありて神の承認を受けたる者はエホバの聖名と御國に對する證者とならなければならぬ。之以外に彼等が忠誠を勵む道は絶無である。之ぞ即ち神の受膏者である。「主エホバの靈われに臨めり。こはエホバ我に膏を注ぎて貧しき者に福音を宣べ傳ふる事を委ね、我を遣して、心の傷める者を醫し、俘囚人に赦免を告げ、縛められたる者に解放を告げ、エホバの恵みの年と我等の神の刑罰の日とを告げしめ、又凡て悲しむ者を慰め、灰に代へて冠を賜ひてシオンの中の悲しむ者に與へ、悲哀に代へて歡喜の膏を與へ、憂ひの心に代へて讚美の衣を與へしめ給ふなり。彼等は義の樹、エホバの植ゑ給ふ者、其の榮光を顯はす者と稱へられん」(イザヤ書六十一章一―三節)。

彼等はイエス・キリストを通じて來るエホバの神命に絶対服従しなければならぬ。モーセを以て模範とする此のイエス・キリストの命令に服従せざる者は當然取り滅さる。(使徒行傳三章廿二、廿三節)。此の世の末は遂に到來した。忠信者の上に與へられた主の特殊命令に曰く「御國の此の福音は、諸々の國人に證をなさんため全世界に宣べ傳へられん。而して後、終は至るべし」(改譯マタイ傳廿四章十四節)。此の神命に服して忠信者は今神の國の福音を廣く全地に宣明す。此の理由によりて彼等は、神と御國に敵する者から嫌忌されるのである。(マタイ傳十章廿二節)。

彼等は神命に服し、戸別を訪れて此の御國の福音を傳ふ。(ルカ傳十章五節)。使徒等も亦此の事をなした。(使徒行傳廿章廿節)。エホバは之等の者に新しき名を與へられた。即ち「エホバの證者」が之である。此の故に彼等はエホバの聖名の證者となる。(イザヤ書四十三章十一節。六十二章一、二節)。彼等が神の敵より

反對を受ける事は必然である。然し彼等は「人に従ふよりは神に従ふ」のである。(使徒行傳五章廿九節)。彼等はそれが神の律法に反せざる限り此の世の諸國の律法にも服従す。之即ちイエスの示し給へる如くである。「カイゼルの物はカイゼルに納め、神の物は神に納めよ」(ルカ傳廿五節)。彼等はその神命遂行に際して當然誹謗と迫害を受く。而して之を死に至るまで忍ばなければならぬ。(マタイ傳十章廿二節。廿四章十三節)。

彼等はキリスト・イエスと共に榮光と權威と大なる富に與るべしと約束されてある。キリスト・イエスは限りなき神の富の嗣子に在す。(ヘブル書一章二節)。王室の成員は此の富に參與するのである。「聖靈自ら我等の靈と偕に我等が神の子たるを證す。我等若し子ならば又嗣子たらん。即ち神の嗣子にしてキリストと偕に嗣子たる者なり。我等若し彼と偕に苦みを受けなば、彼と偕に榮光をも受くべし。我思ふに、今の時の苦みは我等に顯はれん榮光に比ぶべきに非ず」(ロマ書八章十六・十八節)。

過去約千九百年間、神はイエスを首位とする神の王室の成員を召し、教へ、選擇されて來た。之等成員に向つて要求されるものは忠誠である。多數の者がクリスチヤンを以て自己自稱してゐたが、彼等の殆ど全部はキリストの追隨者の責任の何たるかを知らなかつた。王室の成員數は十四萬四千と定めらる。イエス・キリストは主の王、王の王に在して、彼と偕に在る之等の者は召され、選ばれたる忠信者である。(黙示録十章十四節。七章四節)。神は之等の者が死に至るまで神に忠節を立證する方法を設けて、彼等

に天の富を豊かに與へ給ふ。エホバは何者をも報酬で雇ひ給はない。神は何者をも報酬を以て御自身に奉仕せしめ給はない。如何なる者と雖も神に利益を與ふる事は出來ない。(ルカ傳十七章十節)。神との契約關係に入り、自ら進んで死に至るまで神の聖前に己が貞節を立證せんとする者に對してのみ天の富に與る事を許さる。

愛は最も重要なものであると示さる。神に對する愛とは、己が全部を以て神に絶対無條件の無私的奉仕をなす事を意味す。無私的愛による全き忠誠は、その者をして神の富を得せしむ。之等の者に就て斯く記さる。「嗚呼、神の智と識の富は深いか」(ロマ書十一節廿三節)。エホバの富は人間の智能を以ては到底測り知り得ず、されど神はキリスト・イエスの忠信者を此の無限の富の中に招き入れ給ふ。

人間の間から選び取られたる王室の成員十四萬四千の者は、エホバの天的帝國に於て永遠の住所を得るのである。「愛する者よ、我等今神の子たり、後は如何、未だ現はれず。其の現はれん時には必ず神に似ん事を知る。そは我等その眞の状を見るべければなり」(ヨハネ第一書三章二節)。

神の恵みは之等十四萬四千以外の者にも及ぶ。之等十四萬四千は、キリスト・イエスの王國に參與する神性の大靈者である。忠信者全部を代表する十二使徒に向つて斯く約束さる。「イエス彼等に言ひけるは、我誠に汝等に告げん。我に従へる汝等は、世改まり、人の子榮光の位に坐する時、汝等も十二の位に坐して、イスラエルの十二の支族を審判くべし」(マタイ傳十九章廿八節)。其處に再生更新の仕事が行はれ

る事は之に見るも明らかであつて、之の中には地上人類の中の服従者も含まれあり、又此の再生更新の
仕事に於て、キリスト・イエスの指揮下に十四萬四千の者が參與する事も明白である。

イエスの弟子に與へられたる此の教示は亦、生命を得んとする全部の者にも適用さる。汝等己がため
に財寶を地に積むな。ここは蟲と錆とが損ひ、盗人穿ちて盗むなり。汝等は己が爲に財寶を天に積め。
彼處は蟲と錆とが損はず、盗人穿ちて盗まぬなり。汝等の財寶の在る所には、汝等の心もあるべし。(改
譯マタイ傳六章十九―廿一節)。之等の聖言は神の聖意をなすべく契約せる者の全部に適用されるのである。

然らば如何にして天に財寶を積むべきか。人は己自ら地上に在りて天に財寶を積む事が出来る。財寶
と富の全部は天より來る。即ち神の聖言によつてエホバの聖意に關する知識を熱心に探り求むる時に之
を受けし事となる。エホバは富の源泉に在す。而して之の配分者に在す。地の富のみを求むるに熱心に
して、神の教示を無視する者は必ず滅び失す。エホバの聖意を求むるに熱心なる者は、即ち天に富を蓄
積する者にして斯かる者は永遠に生くべし。地上にある服従者は天より富を受く。神エホバは凡ての善
き賜物と完全き賜物の授與者に在す。(ヤコブ書一章十七節)。

地に財寶を積む者の末は空し。他を慮けて積み得たる地上の富は其の者に何の益をも與ふる事なし。
即ち云ふ、汝等の金銀は錆び腐れり。此の錆證をなして汝等を攻め、かつ火の如く汝等の肉を食はん。
汝等は此の末の日にありて猶財寶を蓄ふる事をせり。(ヤコブ書五章二、三節)

地の富は艱難の時に彼等を救ふ事能はず。神の聖意を聖書の中に探り求めて神とキリストと正しき道
に就て學び知り、之を見出したる善意者は即ち天に財寶を積みたる者にして、斯かる者は永遠の歡喜と
慰安とを得べし。

聖書と各種實證とは共に示して、十四萬四千の者の選擇が今將に完了を見んとする事を立證してゐる。
本書は、今地上にありて神の聖意を知らんと求むる善意ある人々の爲に書かれたるものにして、之等の
者を永遠の生命と眞の富の道に導き援助するものである。神の聖意をなすべく決意せる者は、必ず此の
大寶庫を發見し得べし。之等の富は神より發し、その祝福は今人の上に在り、此の富を得る者は最早悲
しむ事なく、反て永遠の平安と幸福を得べし。今、地上に於て永遠に生くる人類のために設け給ふ神エ
ホバの御準備に就て正しく知り得る者は誠に幸福なる者である。

第二章 ヨナダブ

人類の救ひ主イエスの誕生の時、之を告示すべくエホバより遣された天使は、その伴ふ天軍と共に妙なる大讃歌を歌つた。此の大讃歌は今も猶全地に聲高く響き渡る。此の大讃歌に言ふ「至上とところに榮光神に在れ、地には平安、人には祝福あれ」(ルカ傳二章十四節)。之を他の翻譯に見ると斯うある「至高きところには神に榮光あれ、善意ある人々の間に地の平安あれ」(Kotherham 譯)、又「至高き天に在す神に榮光あれ。地にては神を喜ぶ人々の間に平安あれ」(Weymouth 譯)。更に亦「至高き處には榮光神に在れ。地には平和、主の喜び給ふ人にあれ」(日本語訳)。天界より告示された此の神の音信に見るも、神は地上に善意を有する人々を有し給ふ事が明らかであつて、之等の人々こそ永遠の平安を有する者である。之は從來誤解されてゐた如く人間同志の間に於ける善意や親切を意味するに非ずして、此の善意とは神エホバとキリスト・イエスに對する善意である。偉大なる贖價の犠牲は之等の人々の利益のために備へられたのである。

今日地上諸國の間には争鬪滿ち、其處には平和が絶無である。今各國は何れも我利私慾に奔り、犯罪と暴逆との盛んなる跋扈跳梁を見る。「教會」と呼ぶ宗教制度を始めとして此の世の組織制度の全部は何れも我慾と不正不義に墮す。我等は聖書と眼前の實證によりて今、極端に我利的なる組織制度が地を支配する事實を教へられると共に、又總て空前絶後の大艱難に於て之等の組織制度の全部が壊滅する事を確知す。エホバは宇宙より不義不正の組織制度の全部を撃滅一掃するために神自ら此の大艱難を到來せしめ給ふのである。

聖書と實證とは共に示して、此の大艱難の時を逃れて神の國に進み入る善意者の大なる群衆あり、此等の者は既に其の姿を現はして、神とキリスト・イエスを讃頌しつゝある事を我等に教ふ。彼等は今斯く讃め歌ふ、「救は寶座に坐せる我等の神と羔羊より出づるなり」と。(歌示教七章九、十節)。彼等はエホバの唯一全能の神に在す事と、キリスト・イエスは神の膏注ぎ給ひし王に在して、全地諸國諸民にとつて唯一の希望なる事を知る。之等善意者に對するエホバの善意を知る事は最も重要である。今彼等は熱心に神の善意を探り求む。斯くして之等の者は、エホバと神の國を讃むる歌を全地に満たし、平安と幸福、實に人間の夢想だになし得ざる富を受けるのである。

神の聖書は示す「若し一人(アダム)罪を犯ししにより死この一人によりて王たらんには、況て溢るるの恩と、義の賜物を受くる者は一人のイエス・キリストにより生命に在りて王たらざらんや。此の故に一

の罪(アダム)より罪せらるる事の凡ての人に及びし如く、一の義(イエスの義の祭物)より義とせられ、生命を得ることも凡ての人に及びし如く、それ一人(アダム)の逆によりて多く罪人とせられし如く、一人の順(イエスの順)によりて多く義とせらるべし(ロマ書五章十七・十九節)。

「天の使等より少く劣らされし者即ち……イエス……其の死にたるは神の恩によりて、全ての人に代り、死を味はんが爲なり」(ヘブル書二章九節)。之等の諸聖句に見るもキリスト・イエスの犠牲の價値は、神の御目的を學び知りて之に服従する者等のために贖價として備へられたる事が明らかである。神の聖言を拒絶する者が此の贖價の祭物の恩恵に與る事の出來得ないは當然である。神は此の贖價の恩恵を惡しき者には決して與へ給はない。神エホバは特別に宣言して、神の聖言の知識を拒絶し、之に服従せざる者は必ず滅ぼさるべしと示し給ふ。エホバは己を愛する者を凡て護り給へど、惡しき者を悉く滅し給はん(詩篇百四十五篇廿節)。若し理性ある被造物が、一度神の富を知り、神とキリスト・イエスとを知り、神の聖言を學び知るならば、その者は神とキリストに服従して、之に對する愛を立證するに相違ない。神は地球を無爲に創造し給へるに非ずして地を人間の住所として創造された。之ぞ即ち神に服従する人間が地上に永遠に住むに至るべき事を明白に立證するものである。(イザヤ書四十五篇十二、十八節)。地の善意ある人々の全部が今、彼等のために準備し給ひしエホバの御目的と天より發する神の富を學び知るべき時は此處に到來した。

神がモーセの手を用ひてイスラエル人を埃及より救ひ出して後、紀元前六〇六年にイスラエルの最後の王ゼデキヤの支配の終りまでの全期間を通じて、イスラエル人は神の御目的のために選ばれたる神の聖き民であつた。神は彼等との間に一の契約を作成された。而して若し彼等が忠實であるならば「エホバの聖名の爲の一の民」は彼等イスラエル人の間から選び取られる事となつてゐた。彼等は其の不信不忠の故によつて一の民族として棄てられて了つた。イスラエル人が神の恩恵を蒙つてゐた間に、神は彼等を用ひて種々の模圖を作成された。之等の模圖は未來に發生を見んとする出來事を豫表するものであつて、即ちキリストの支配下に成る神の國を通じて地上人類が神より祝福を受くる事に就て豫示したるものである。神はモーセを仲保として彼等に律法を與へられた。而して「律法は來らんとする善き事の影」(ヘブル書十章一節)であるとして聖書は明示す。神の恩恵下にあつたイスラエル人がその當時なしたる多くの事は、即ち此の世の末に發生を見んとする事を豫表したのである。(コリント前書十章十一節)。今既に末日は到來し、之等の模圖、豫言的活畫又は豫言的戯曲は神の御恵みによつて解明された。その結果神を愛する者等は之によつて神の御目的を學び知り得る事となつたのである。我等は今之等模圖に就ての研究を進めんとす。

之等模圖の一に、イスラエルの王の一人のエヒウがヨナダブと云ふ人を己が戰車に同乗せしむべく招きた事が示されてある。此の模圖は今地上の善意者に對して重大密接なる關係がある。

之に就ては先づイスラエルの支配者とエヒウに關しての歴史的事實を知らなければならぬ。イスラエルの十支族がダビデの家に叛いて、己等自身の王を選んだ。アサはユダの王で、紀元前九七九年頃エルサレムを治めた。十支族はパレスチナの北部を占めてゐた。イスラエルの一將校オムリはイスラエルの王位を奪つて自ら王となつた。後、彼はサマリヤの地を買取つて、其處に王宮を設け、イスラエルの十支族を支配した。(列王記略上十六章十六―廿四節)。アハブはオムリに次いでイスラエルの王となつた。アハブはエテバアルの娘イゼベルを娶つて妻となした。彼等の間にアタリヤと呼ぶ娘が生まれた。之より暫くして後、エリヤは三年半の饑饉到來を豫言した。後アハブは戦死して、其の子アハジヤが王位を嗣いだ。(列王記略上廿二章卅四―四十節)。

アタリヤはユダの王位を嗣ぐヨラムと結婚した。ヨラムは紀元前九一三年頃エルサレムに於て其の統治を開始した。(歴代志略下廿一章一節)。ヨラムの次にアタリヤの子のアハジア即ちイゼベルの孫のアハジアがユダの王位に即いた。アハブの子ヨラムは其の兄弟アハジアの跡を嗣いでイスラエルの王位に即いた。豫言者エリヤは取り去られて、豫言者エリシヤが之に代つた。然る後、ニムシの子なるヨシヤパテの子エヒウはイスラエルの王たるべき者として膏そそがれた。(列王記略下九章一―六節)。暫して後エヒウはヨラムを殺した。(列王記略下九章廿四節)。而して後、エヒウはアハブの全家を一掃して了つた。

鍵

アハブの全家を撃滅する事がエホバの御目的であつたと云ふ事は、即ちエヒウの行動が何を豫表したるかを解く鍵となる。アハブはサタン即ち老蛇、即ち悪魔を代表してゐた。彼の妻イゼベルはサタンの「妻」即ち彼の組織制度を代表した。彼等の子孫即ち「裔」は「蛇の裔」を豫表した。之等は神とキリストと神の國に敵對する者なるが故に撃ち滅されなければならぬ。エヒウの仕事は、神エホバの聖名を汚辱し、人類を虐ぐる者等を撃ち滅さんとするエホバの御目的の進行状態を豫表したのである。

エヒウによつてなされた此の撃滅の仕事の最高峰は、バアル禮拜即ち悪魔崇拜者の掃蕩殲滅であつた。「バアル」とは「主」となる、結婚して夫となる、即ち所有者となる」と云ふを意味す。故に「バアル禮拜」は、悪魔を以て主人とし、夫とし、所有者とする彼の組織制度に参加して、悪魔を己が主、首位者として受け容れると云ふ事を意味してゐる。「バアルベオル」とは淫蕩にして不潔なる婦人と關係して悪魔の宗教を行ふ事を意味す。之は人々を神エホバより離反せしめんとするサタンの奸策である。

メソポタミヤより來た卜占者バラムはモアブの王バラクに示して、バアルベオルの悪魔的宗教を用ひて如何にしてイスラエル人を誘惑するかを教へた。エホバは以下に示す如き事を全く嫌忌し給ふ。「イスラエルはシツテムに止まり居けるが、其の民モアブの婦女等と淫を行ふ事を始めたり。その婦女等その神々に犠牲を獻ぐる時に民を招けば、民は行きて食ふことをなし、かつ其の神々を拜めり。イスラエル斯くバアルベオルに附きければ、イスラエルに向ひてエホバ怒を發し給へり。エホバ即ちモーセに告げ

て言ひ給はく、民の首領を悉く連れ來り、エホバのためにかの者どもを日に曝せ。然せばエホバの烈しき怒イスラエルを離るるあらんと。是に於てモーセ、イスラエルの士師たちに向ひ、汝等各々その配下の人々のバアルペオルに附ける者を殺せと言へり(民数記卅五章一―五節)。此の悪しきバラムは神命によつてモーセの手で殺された。(民数記卅一章八節)。

十支族はユダより離脱したる後、彼等はサマリヤの地に己が王國を建てたが、イスラエル人の惡魔崇拜を公認したのは即ちオムリであつた。その後を襲つたアハブに就て斯く記さる「オムリの子アハブは其の前に在りし凡ての者よりも多くエホバの目の前に惡をなせり。彼はネバテの子ヤラベアムの罪を行ふ事を輕き事となせしが、シドン人の王エテパアルの女イゼベルを妻に娶り、行きてバアルに事へ、之を拜めり。彼そのサマリヤに建てたるバアルの家の中にバアルの爲に壇を築けり。アハブ又アシラ像を作れり。アハブは其の前に在りしイスラエルの全ての王よりも甚しくイスラエルの神エホバの怒を起す事をなせり」(列王記上十六章卅一―卅三節)。

エリヤの豫言せる如くイスラエル人の上に三年半の饑饉が到來した。此の饑饉の終る頃、エリヤはアハブに會ひ、彼の惡魔禮拜がイスラエル人の上に臨む艱難の眞因なる事をアハブの面上に直言した。「アハブ、エリヤを見し時、アハブ、エリヤに言ひけるは、汝イスラエルを惱ます者此處に居るか。彼言ひけるは、我はイスラエルを惱ます者、ただ汝と汝の父の家これを惱ますなり。即ち汝等は、エホバの命

命を棄て、且汝はバアルに従ひたり」(列王記上十八章十七、十八節)。

アハブとイゼベルは、イスラエル人をエホバから離反せしむる爲に用ひられた「バアルの豫言者」を支持した。エホバはエリヤを用ひてバアルの豫言者四百五十人の上に神の審判を執行し給ふた。後にエヒウは人々に告げた「アハブはバアルに仕へた」と。(列王記下十章十八節)。之等の聖書の記録は、アハブが全き惡魔禮拜者であつた事を示してゐる。

エヒウはアハブの一將校として戰車を操縱する者であつた。エヒウとエリヤの上に膏注ぐ事に關聯してエホバはエリヤに向つて斯う告げられた。「又我イスラエルの中に七千人を残さん。皆其の膝をバアルに屈めず、其の口を之に接ざる者なり」(列王記上十九章十八節)。此の故にエヒウはアハブの軍隊の中にあつたと雖も、彼は惡魔禮拜を拒絶した此の七千人中の一人であつたに相違ない。

アハブが父アハブの後を嗣いで王となつた。彼は墜落して負傷し、使者をバアルゼブブ(エクロンの神)に遣はして己の治癒如何を尋ねた。「アハブヤ、サマリヤにある其の高樓の欄干より落ちて病を發せしかば、使者を遣はさんとて之に言ひけるは、行きてエクロンの神バアルゼブブに、我がこの病の癒ゆるや否やを問ふべしと。時にエホバの使者、テシベ人エリヤに言ひけるは、起ちてサマリヤ王の使者に會ひて、之に言ふべし。汝等がエクロンの神バアルゼブブに問はんとて行くは、イスラエルに神なきが故なるか。是によりてエホバ斯く言ふ、汝は其の登りし床より下る事なるべし。汝必ず死なんと。

エリヤ即ち行けり」(列王記略下二章二一四節)。

アハジヤの次にヨラムが王となつた。彼はアハブ程は悪くはなかつたが、然し彼の支配中にもイスラエルの中にはバアル禮拜が行はれてゐた。その當時老婦イゼベルは尙存生し、依然として惡魔禮拜を支持してゐた。(列王記略下三章一三節)。後、エヒウに就て斯く記さる、「エヒウ斯くイスラエルの中よりバアルを絶ち去りたり」(列王記略下十章廿八節)。エホバの模圖は之を以て終結し、爾後彼に關する記録は、エホバの僕の仕事の如何なる部分をも豫表してゐない。

「選ばれし僕」

エホバに選ばれし僕はその愛子キリストである。(イザヤ書四十二章一節)。エホバは昔、忠信なる豫言者等を用ひて、神の聖名に於て言行せしめ給ふたが、之等豫言者とそのなせる行爲は、未來に於て行はれる更に大なる事を豫表した。神は忠信なる豫言者エリヤを用ひて、惡魔禮拜(バアル禮拜)の憎むべき事を告示せしめ給ふた。エリヤと彼の仕事は、地上にある忠信者がキリスト・イエスの指揮下に於て、一八七八年頃より一九一八年までの間になした仕事を豫表した。エリヤは旋風と共に取り去られ、代つてエリヤが神の豫言者即ち僕となつた。此のエリヤの仕事は、一九一八年主イエスが神の宮に臨み給ひし時以後、その指揮下に活動する忠信なる追隨者の仕事を豫表した。(マラキ書三章一三節)。

キリスト・イエス指揮下の之等忠信者は「忠義にして智き僕」(マタイ傳廿四章四十五一四十七節)と示さる。

主は地上に於ける神の國の全利害を之等の者に委ね給ふた。斯く彼等は神の國の福音を全地に宣べ傳ふる任務を受けたのである。エリヤが取り去られたる後、エリヤが仕事を開始するまでの間に暫くの時があつた。聖書と實證とは一致して、エリヤの仕事は一九一八年以後、忠信なる僕等がキリスト・イエスの指揮下に於てなせし仕事を豫表してゐる事を教へてゐる。當時神の民の上には暫くの間無活動の時があつたが、それに續いて總て普通「エリヤの仕事」の名稱と呼ばれてゐるところの大なる活動が始まつた。此の「エリヤ期間」即ち「エリヤの仕事」は、一九一九年より始まつて、神の國の證言の完成までに及ぶのである。此の仕事に參與して忠誠を立證する者は、キリスト・イエスを首位とする「選ばれたる僕」級に編入されるのである。之等の者は神の宮の中に入れられ、爾後之等がエホバの證者とされるのである。(イザヤ書四十三章十一二節)。

王エヒウはエホバの「選ばれし僕」の模型であつて、時にはキリスト・イエスと其の忠信なる追隨者等を共に併せて代表した。エヒウの豫言的模圖は主イエスが一九一八年神の宮に臨み給ひし時より後に成就するのであつた。

エヒウはエリヤと會見し、又豫言者エリヤより二十八年も多く生存した。此の事は即ち、エホバは「エリヤ期間」(一八七八年より一九一八年迄)の間に御自身の聖名の證者たるべき者を準備し、之等の中の忠節を立證せる者等を「エリヤ期間」(一九一八年より始まる)に移された事を示してゐる。爾後之等の忠信

者は神の組織制度の成員とされ、「忠義にして智き僕」級を形成した。神は之等の者の上に「エホバの證者」と云ふ新しき名を與へられた。彼等は死に至るまで忠誠を持續する時に「第一の復活」に参加し、主イエス・キリストの如くなるのである。(黙示録廿二章六節)。此の「エホバの證者」はエヒウとヨナダブの豫言的戯曲即ち模圖の中に含まれてゐる。そして「エホバの證者」に關聯して、我等は今「ヨナダブ」級の者の本體を學び知る事が出来るのである。

立 證

エヒウはエホバの「選ばれし僕」を代表せりと結論を立證するために以下の諸事實を提示す。エヒウは、イスラエル人の一人として神と契約關係にあり、即ち律法の契約下にあつた。(列王記略下十三章一六節、十四章三三―三七節)。彼がバアル禮拜に反對してゐたと云ふ事は、彼が神の恩惠の下にあつた事を示してゐる。

『エヒウ』なる名の意義は「エホバこそ彼なり」と云ふ事である。故に此の名は「エホバこそ最高至上の權威者に在す」と云ふ事を高調してゐる。之ぞ即ち今「エホバの證者」が人々に向つて宣べ傳へ、彼等の注意を喚起しつつある所のものである。彼の父及び祖父の名にも意義がある。エヒウは、ニムシの子なるヨシヤパテの子であつた。(列王記略下九章二、十四節)。祖父の「ニムシ」の名は「救ひ出す」を意味し、之は *mashah* の原字より轉化せる名で、「引き出す」と云ふ事であり、「モーセ」の名と同一意義であ

る。又父の「ヨシヤパテ」の名は「エホバ審判す、即ち、證明さる」を意味す。此の字の後半の「シヤパテ」の意味は「審判す、判決す、支配す、證明す」である。(此のニムシの子ヨシヤパテは、列王記略下十五章廿四節にあるアサの子ヨシヤパテとは全然別人である)。此の故に「ニムシ」と「ヨシヤパテ」の二人の名は共に「エホバの聖名證明のため」に「引き出された」即ち選び取られたる者を表象してゐる。

エヒウはイスラエルの王たるべくエホバの命によつて膏をそがれた。アハブは決してエホバから膏をそがれなかつた。聖書の記録を見ると、イスラエルの十支族の上に王たる者として神より膏注がれたる者はエヒウのみであつた。「汝ニムシの子エヒウに膏を注ぎてイスラエルの王となすべし」(列王記略上十九章十六節)。エリシヤはエホバの神命に服して、己が「若者」を遣はして此の事を實行した。而して汝彼處に至らば、ニムシの子なるヨシヤパテの子エヒウを其處に尋ね得て内に入り、彼を其の兄弟の中より起たしめて奥の間に連れ行き、膏の瓶をとり、其の首に注ぎて言へ。エホバ斯く言ひ給ふ、我汝に膏を注ぎてイスラエルの王となすと。而して戸を開きて逃去れよ。止まること勿れ。エヒウ即ち起ちて家に入りければ、彼その首に膏を注ぎて之に言ふ。イスラエルの神エホバ斯く言ひ給ふ、我汝に膏を注ぎて、エホバの民イスラエルの王となす。(列王記略下九章二、三、六節)。

エヒウは斯くイスラエルの中よりバアル禮拜を驅逐撃滅すべき執行者としてエホバより任命されたのである。その神より受けし使命に就て記さる、「汝は其の主アハブの家を撃ち滅ぼすべし。それによりて

我が僕なる預言者たちの血と、エホバの謀々の僕たちの血をイゼベルの身に報いん。アハブの家は全く滅ぶべし。アハブに属する男はイスラエルに在りて擧がれたる者も擧がれざる者も共に之を絶つべし。我アハブの家をネバテの子ヤラベアムの家の如くにし、アヒヤの子バアシヤの家の如くなし。エズレルの地に於て大イゼベルを食ふべし。亦これを擧る者あらず』(列王記下九章七十一節)。

エヒウは其の使命を果たし、「エヒウ、アハブの家を断す……」(歴代志下廿二章七、八節)。即ち彼はエホバの執行者であつた。彼は其の使命を遂行するに當りてエホバより承認を受け、その子等のイスラエルの王位に當るを許された。(列王記下十章廿節)。即ち四代の子孫が百年間王位にあつたのである。エヒウ自身も廿八年間支那した。彼の子エホアハズはエホバの祝福下に十七年間位にあつた。(列王記下十三章一、四、五節)。エヒウの孫ヨアシは、預言者エリシヤの死と共にイスラエルの王位に即いたが、彼はエホバの預言者から恵みを受けた。(列王記下十三章十四、廿三節)。

エリヤはカルメル山に於てバアルの祭司四百五十人を殺戮した。エヒウは此の事を更に大仕掛けに行つた。(列王記上十八章四十節。列王記下十章十八、廿五節)。エリヤはバアル禮拜者の屠殺を開始し、エヒウはそれを完成した。(列王記下十章廿八節)。彼がイゼベル排斥者なる事は神の嘉納を受けた。神の承認を受ける者は何れも此の精神を有す。(黙示録二章廿三節)。エヒウはイゼベルを馬で踏み殺して了つた。エホバがその預言者エリヤを道して示し給ひし聖言を成し遂げた點に於てエヒウは神エホバの爲の證明者であ

つた。又彼はエリヤのなした始末たる仕事を此處で完成した。エリヤはカルメル山に於て、バアルとアハブの預言者の面前で天より火を呼び降した。彼は斯う祈つた。「エホバよ、我に應へ給へ。此の民をして汝エホバは神なることを知らしめ給へ」(列王記上十八章廿七節)。之ぞ即ちエホバの御名譽に對する證明である。然しこの事はアハブとイゼベルをして改心せしめなかつた。バアル禮拜は依然として續いた。而して神エホバは、バアル禮拜に關聯して聖名を證明する者としてエヒウを用ひられたのである。(列王記下九章廿五、廿七節。十章九、十一節)。以上は歴史的事實の概略である。此の事は即ち神がキリスト・イエスを

を用ひてサタンと彼の組織制度を全滅し給ふ事を確實に豫表してゐるのである。エヒウは軍人であつた。彼はイスラエルの軍の一將校として戰車隊に屬してゐた。イスラエルの軍隊はエホバの恩恵を受くる時に於てのみ敵に勝利を得た。故にその時に此の軍隊はエホバに屬する軍隊であつた。此の事は即ち、エヒウはエホバの神軍に屬する一將校であつた、と云ひ得るのである。(列王記上廿章一、廿節。列王記下三章五、廿五節。六章廿四節より七章十六節まで)。エヒウは戰車を「狂ふが如く疾走せしむる者」として有名であつた。(列王記下九章十六、廿節)。エヒウがイスラエルの軍隊の戰車隊に關係があつたと云ふ此の事は、即ちエヒウによつて豫表されたる所の者は、ケルビムの戰車(歴代志上廿八章十八節)に關聯して働かなければならぬと云ふ事を意味してゐる。之ぞ即ちエホバの組織制度の大戦車であり、預言者エゼキエルがその受けし異象の中に示されたものであり、「エゼキエル」によつて代表される者

が諒解するを許されたるエホバの宇宙的大組織制度である。(エゼキエル書一、十章)。「神の戦車は萬に萬を重ね、千々に千々を加ふ。主は其の中に在せり。聖所に在すが如く、シナイの山に在ししが如し」(詩篇六十八篇十七節)。「其の勇士は楯を紅色にし、其の軍兵は紅色に身を甲ふ。其の戦備を立つる時には、戦車の鐵杓鏃きて火の如し。鎗また閃めきふるふ」(ナホム書二章三節)。「エホバよ、汝は馬を驅り、汝の救ひの戦車に乗り給ふ。これ河に向ひて怒り給ふなるか。河に向ひて汝の聖怒を發し給ふなるか。海に向ひて汝の憤怒を洩らし給ふなるか」(ハバクク書三章八節)。「水の中に己の殿の棟梁を置き、雲を己の戦車となし、風の翼に乗り歩き給ふ」(詩篇百四篇三節)。

アハブとイゼベルの家に關するエホバの聖言は完全に證明された。神は御豫定の時に、サタンと彼の組織制度に關する聖言を完全に證明し給ふのである。エヒウはアハブとイゼベルの家に關する仕事を成し終つたが、然し彼の仕事はそれで終了したと云ふのではなかつた。

エホバの爲の熱心

エヒウはエホバの爲に熱心であつた。之は即ち彼がエホバの大執行者キリストを代表する一の有力なる理由である。キリスト・イエスに就て斯く記さる。「そは汝の家を思ふ熱心我を食ひ、汝を誇る者の誹謗我に及べり」(詩篇六十九篇九節)。之ぞ神の王室に對する熱心である。エリヤもエホバのために熱心を示した。彼はバアルの豫言者達を屠つた後、ホレブの山の穴の中に己自身を隠したが、神の間に答へて斯

う云つた。「我は萬軍の神エホバの爲に熱心なり」(列王記上十九章十節)。此の「熱心」なる原字は他の處で「嫉妬」と譯されてゐるが、之は絶対に誤譯である。(出埃及記廿五章五節。申命記五章九節。申命記四章廿四節)。

王キリストの治下に成る神の國に就て斯く記さる。「萬軍のエホバの熱心これを成し給ふべし」(イザヤ書九章七節)。「我は神の熱心の如き熱心をもて汝等を思ふ」(コリント後書十一章二節)。パウロは己自身の事に就て猶太人の前に述べて云ふ。「先祖の嚴かなる律法に由りて教へられ、神に熱心なりし事は今日の汝等すべて者の如くなりき」(使徒行傳廿二章三節。ピリピ書三章六節)。神の受膏者は之と同様の熱心を有さなければならぬ。「キリスト我等の爲に己の身を棄て給へり。これ我等を凡ての罪より贖ひ出し、且己の爲に一の民を潔め、之をして熱心に善き事を行はしめん爲なり」(テトス書二章十四節)。「熱心」とは一の事をなさんとする固き決意と努力を示す。之の原字が聖書の中で屢々「嫉妬」と誤譯されてゐるのである。

エヒウは己が使命を果すに何者の妨害をも許さざる固き決意を以て戦車を疾く驅つた。彼は使命を受けるや直ちに使命を遂行すべく己が幕僚と共に出發したのである。王の使者等が來て其の疾走の理由を尋ねた時、「退け、邪魔するな」と彼は叫んだ。その如くキリスト・イエスは、敵の眞只中に支配を開始せよとの神命をエホバより受くるや直ちに「天に戦」を起し、サタンと彼の天使等を天界より地上に逐ひ落された。聖書は教へて證言の仕事の完了と同時に、キリスト・イエスは直ちに敵を撃滅し給ふと示してゐる。(詩篇百十篇一六節。撒示録十一章十七十九節。十二章七十一十二節。マタイ傳廿四章十四、廿一、廿二節。詩篇四十五

第三、四節。

「キリストの體」の成員は皆エヒウの如き熱心を示さなければならぬ。「遺残者」は今神の國の既に到來せる事實を見て之を感じ、敵の組織制度の全く滅亡するまで熱心に働かなければならぬ。(イザヤ書六章九—十二節)。大屠殺開始前に證言を完了せよとはエホバの神命である。「遺残者」は之を熱心に爲す。彼等の忠誠を妨害する者は絶無である。「我わが凡ての道を思ひ、足をかへして汝の證言に向けたり。我は汝の誠命を守るに速くしてたゆたはざりき。我が敵汝の聖言を忘れたるをもて我が熱心われを滅ぼせり」(詩篇百九篇五十九、六十、百廿九節)。

萬軍のエホバの聖名に於てその使命を遂行するに際して遺残者は他の人々が「彼等は狂氣したか」と怪しむまでの熱心を以て疾く驅る。敵の批評などは全然問題にしない。ダビデはエホバの軍に従つて出征した時に云つた「王の事は急なり」(サムエル前書廿一章八節)。神の受膏者は今神命遂行に急がなければならぬ事を熟知す。彼等は召されし事と選ばれし事を固くするに熱心である。(ペテロ後書一章十節)。彼等はエホバの家のために極めて熱心である。「其の日にはエルサレムに向ひて言ふあらん。懼るる勿れ、シオンよ、汝の手を萎へ垂るるなかれと」(ゼバニヤ書三章十六節)。

ヨ ナ ダ ブ

レカブの家の先祖ハマテはケニ人であつた。(歴代志略上二章五十五節)。ケニ人はカナンの南部とシナイ山

脈との中間なる砂漠に住んでゐた。彼等はミデアン人と關係があつた。パロがモーセを殺さうとした時に、若者のモーセは埃及からミデアンの地に逃げて行き、其處でケニ人なるエテロの娘と結婚した。(出埃及記二章十五—廿一節)。ケニ人等はモーセが困つてゐた時に彼を大いに援けたが、モーセは此の親切を決して忘れなかつた。後、イスラエル人がモーセに引率されて埃及よりカナンへと進軍中、ケニ人の地を過ぎて来た時にモーセはケニ人に告げた「我等は、エホバが曾て、我これを汝等に與へんと言ひ給ひし處に進み行くなり。汝も我等と共に來れ。我等汝をして幸福ならしめん」(民數記略十章廿九節)。レカブは此のケニ人の子孫の一人であつて、ヨナダブの先祖に當る。而して此のヨナダブは遊牧族レカブ人の眞の元祖に當つてゐる。

ヨナダブと彼の民は、イスラエル人ではなかつたが常にエホバを禮拜し、身に割禮を施して、己等自身はモーセの律法とそれに伴ふ儀式を守らなければならぬものと考へてゐた。バアル禮拜者等は彼等に敵對した。ヨナダブ人は普通の古代アラブ族と異つて嚴律を固守してゐた。彼等は飲酒せず、家を建てず、種を蒔かず、葡萄の樹を植ゑなかつた。(エレミヤ記卅五章六、七節)。之ぞ民族としては全く特殊の存在であつた。彼等は二百五十年間此の戒律を嚴守した。紀元前六〇七年、バビロン王ネブカデネザロのユダヤ侵略は、レカブ人の天幕をエルサレムへと逐ひ、彼等は其處にて誘惑と戦ひ、特別に祝福を受け

た。(International Bible Dictionary 第五〇頁 "Reuben" の項を見よ)

エヒウは諸王とアハブの諸子其の他に對する殺戮執行の使命を進め、アハジヤの從者四十二人を片附けた時にヨナダブと遇つた。エヒウは斯う尋ねた、汝は何れに味方するか。その時、ヨナダブはエヒウがバアル禮拜をイスラエルから根絶するの仕事を進めてゐる事を知つてゐた筈である。斯くてエヒウ其處より進み行きしが、レカブの子ヨナダブの己を迎へに來るに遇ひければ、其の安否を問ふてこれに、汝の心は我が心の汝の心と同一なる如くに眞實なるや、と言ひけるにヨナダブ答へて、眞實なり、と言ひたれば、然らば汝の手を我に伸べよ、と言ひ、其の手を伸べければ、彼を引きて己の車に乗らしむ』

(列王紀下十章十五節)。エホバは或る御目的のためにヨナダブを此の模圖中に登場せしめ給ふたのであつた。此のエホバの聖意こそ之が諒解されたる時に忠信者に甚大なる慰安と力附けを與ふるものである。記録に見るとヨナダブは直接殺戮の仕事に携はらなかつた。然らば彼は此の模圖中に何を表象したか。

ヨナダブは今地上にありて善意を有する者等を代表した。彼等は「エヒウの仕事」が進行すると共に其の姿を地上に出現せしめ、サタンノ組織制度の下より脱して、正義の側に立つ。彼等若し從順と忠誠を神の御前に保つならば、神は彼等をハルマゲドンの時に保護し、その大艱難より携へ出して、地上に於ける永久の生命を彼等に與へ給ふ。之等の者こそ神の受膏者に好意を表する「綿羊」級である。(マタイ傳廿五章卅二―四十節)。

「ヨナダブ」の名の意義は、寛大、豊富なる「エホバの贈物」を意味す。(Strong's Concordance) 即ち

「ヨナダブ」級に對してエホバは寛大である事を意味してゐる。レカブ人は「正しきもの」として教へられたる所を固守する人々であつた。ヨナダブは正直と從順の道を守り、其の正しと信じたる處を行ひ、其の子等に正義を教へ、子等も亦此の道を守つたと聖書の記録は示してゐる。ヨナダブの子孫は神より教へを受けたのではなくして人間に教へられたのであつた。此の故に彼等は飲酒せず、家を建てず、天幕の中に住んだ。之は即ち彼等は自己否定の簡易生活を嚴守したる事を意味す。彼等は其の教へられたるところを守るに忠實であつた。彼等は神の民なるイスラエル人の不信に比して自分等は正義を守つてゐると信じてゐたのである。神はイスラエル人に向つて「汝等は惡魔の食卓に食ふべからず」と示された。即ちバアル禮拜を禁じられたのであるが、彼等は此の神命を無視してバアル禮拜に走つた。今日、羅馬カトリック教權を首位とする所謂「キリスト教會」は之と同様の惡事を行つてゐる。「汝等は主の酒杯と惡鬼の酒杯とを兼飲むこと能はず、主の食卓と惡鬼の食卓とに兼與る事能はず」(改譯コリント前書十章廿一節)。エホバは偽善者を嫌忌し給ふ。

此の世の宗教家を支配する羅馬法王教權と所謂「反抗派」の諸制度は今相並んで共に「キリスト教制度」を形成す。此處に示す教權及び其の教職者即ち之の支配階級の中には、眞面目なるカトリック教徒やプロテスタント教徒は含まれてゐない。カトリック教會の會員と目されてゐる者は多數あるが、之等は事實その會員に非ずして、教權の方では之等の人々を單に「カトリックの人民」と呼んでゐる。そ

の人がカトリック教徒であるからと云つて別に嘲笑さるべきに非ず。眞面目なるカトリック教徒は眞理を求めてゐる。故に此處に示さんとする處は、如何にして之等多數の人々が教權を形成する極少數者によつて誤導欺瞞されたかと云ふ事實を説明するにある。羅馬カトリック教會制度の支配組織なる教權は他の諸教會制度の教職者と共に宣言して、彼等は神の代表者であり、神の聖言を教ふる權威を獨占すると自稱す。彼等は己等がクリスチャンであると自稱してゐる。此の理由によつて彼等は神の聖意をなすべく神と契約せる者と目さるべきである。然るに彼等は神の聖意に従はずして我利私慾の道を歩みつゝある。羅馬カトリック教會の支配體なる教權は多數の人々を邪導して之を欺いた。

之等善意ある人々はカトリック制度を物質的精神的に援助す。又此の外他の所謂「キリスト教會」制度に屬する人々の多數も正義をなさん事を欲し、神を學び知りて之に奉仕せん事を願ひ求む。之等善意者が眞理を聽きて之を學び知るべき時は到來した。不信なるイスラエル人によつて豫表されたる所謂「キリスト教會」制度は、神の民であると自稱しつゝ尙神に服従する事を拒絶し、神を棄ててバアル即ち惡魔禮拜に墮して了つた。今地上にある善意者はヨナダブの家によつて代表されてゐる。我等は此の點を明らかにして後、不信なるイスラエル人が如何にして神の前に立つたかと云ふ事をヨナダブのそれと對照して研究を進め行く事とする。

エホバは豫言者エレミヤを通じて、不信なるイスラエル人とヨナダブ人との對照を示して置かれたが、

之は神が偽善なる「キリスト教會」制度と特にその指導者達を排斥嫌忌し給ふ事を語るものであり、又ヨナダブの家によつて代表されたる地上の善意者に神の恩恵が及ぶ事を示すものである。その豫言に曰く「ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの時、エレミヤに臨みしエホバの言に言ふ。汝レカブ人の家に行きて彼等と語り、彼等をエホバの室の一房に携れ來りて、酒を飲ませよ」(エレミヤ書卅五章一、二節)。

同豫言の此の部分は、神が現在の地上の善意者を神の家即ち組織制度の中に入れて、彼等の上に祝福を與へる事を開始される事を豫表してゐる。此の豫言の如く今、多數の善意者はエホバの組織制度の中に入り來りつつある。豫言者は續ける「是に於て我ハバジニヤの子なるエレミヤの子ヤザニヤと其の兄弟と其の諸子及びレカブ人の全家を取り、之をエホバの家にあるハナンの諸子の房に連れ來れり。ハナンはイグダリヤの子にして、神の人なり。其の房は收伯たちの房の次にして、門を守るシヤレムの子マアシヤの房の上に在り。我即ちレカブ人の諸子の前に酒を滿たしたる壺と酒杯を置き、彼等に告げて、汝等酒を飲め、と言ひければ、彼等答へけるは、我等は酒を飲まず。そはレカブの子なる我等の先祖ヨナダブ我等に命じて、汝等と汝らの子孫は何時までも酒を飲むべからず」(エレミヤ書卅五章三―六節)。

レカブ人は斯く己等の約束せし處に忠實であつた。彼等はその先祖ヨナダブの言を嚴守した。また汝等家を建てず、種を蒔かず、葡萄園を植ゑざれ。亦之を有つ可らず。汝の生き存らふる間は幕屋に居れ。然らば汝等が寄寓るところの地に於て汝等の生命長からんと言ひたればなり」(エレミヤ書卅五章七―十節)。

ヨナダブの家に屬するレカブ人は家屋や葡萄園の如き此の世の富に執着しなかつた。彼等が天幕に住んでゐたと云ふ事は、即ち彼等が他の古代の忠信者達の如くキリスト・イエスの支配下に成るところの更に善き政府の到來するを待望してゐた事を意味す。此の神の政府は「邑」によつて象徴されてゐる。(ヘブル書十一頁十四―十六節)。エルサレムの邑が東方の聯合軍によつて脅されたる時に、ヨナダブ人はエルサレムに移り住んだが、此の事は今地上の善意者が、地上にある神の組織制度の中に避難する事を示してゐる。

然る後神は、契約に不信なるイスラエル人を排斥する事と、その約束せる處を忠實に守るヨナダブ人即ちレカブ人の家を嘉納する事の對照を示して斯く豫言して置かれた。二時にエホバの言エレミヤに臨みて言ふ。萬軍のエホバ、イスラエルの神斯く言ふ。汝行きて、エダの人々とエルサレムに住める者として告げよ。エホバ言ひ給ふ。汝等は我が言を聽きて教を受けざるか。レカブの子ヨナダブが其の子孫に、酒を飲むべからず、と命ぜし言は行はる。彼等は今日に至るまで酒を飲まず、其の先祖の命令に従ふなり。然るに汝等は、我が汝等に語り、頻りに語れども我に聽かざるなり。我また我が僕なる豫言者たちを汝等に遣し、頻りに之を遣して言はせけるは、汝等今、各々其の惡き道を離れて歸り、汝等の行爲を改めよ。他の神に従ひて之に事ふる勿れ。然らば汝等は、我が汝等の先祖に與へたる此の地に住む事を得んと。然ど汝等は耳を傾けず、我に聽かざりき。(エレミヤ記卅五章十二―十五節)。

イスラエル人に關する此の豫言は今、諸國を支配する「キリスト教會」制度の支配權者の上にも的確に適用さる。特に之は多數の人々を邪導する羅馬カトリック教權に於て殊に然りである。即ち此の教權制度と之を支持擁護する仲間の全部は神に對して全く不忠不信に墮して了つた。而して此の邪惡制度の中にあつて、猶神に對して善意を有する者はヨナダブ人によつて豫表されてゐるのである。

然る後に、エホバは善意ある人々に向つて斯く告げ給ふ。「レカブの子ヨナダブの子孫は、その先祖が彼等に命ぜし所に従ふなり。然ど此の民は我に聽かず。此の故に萬軍の神エホバ、イスラエルの神斯く言ふ、視よ、我エダとエルサレムに住める者と共に我が彼等に就きて言ひし所の災禍を降さん。我彼等に語れども聽かず、彼等を召べども應へざるなり。茲にエレミヤ、レカブ人の家に言けるは、萬軍のエホバ、イスラエルの神斯く言ひ給ふ。汝等は其の先祖ヨナダブの命に従ひ、その凡ての誠命を守り、彼が汝等に命ぜしことを行ふ。是によりて萬軍のエホバ、イスラエルの神斯く言ひ給ふ。レカブの子ヨナダブには我が前に立つ人何時までも缺くることあらじ。(エレミヤ記卅五章十六―十九節)。

此處に即ち、今地上にありて、エホバの側に固く立つ者に對するエホバの確實なる御約束が示されてある。彼等若し最後まで忠誠を持続せば大なる神の富を與へられ、永遠の承認を受けるのである。

エホバの「選ばれし僕」キリスト・イエスの模型なるモーセはヨナダブの先祖なるケニ人を招待して「我等と共に來れ。我等汝をして幸福ならしめん」(民衆記卅九章廿九節)と言つた。之ぞ即ち今日「神の僕」

級の者が地の善意者に向つて、汝等我等と共に來りて神エホバとキリスト・イエスを學び知り、その御恵みを受けよ」と告げつゝある事を豫表してゐる。

エヒウの模圖に見るも、此の模圖の中に登場したるヨナダブが惡魔の宗教即ちバアル禮拜に全く敵對してゐた事が明白である。斯くてエヒウ其處より進み行きしが、レカブの子ヨナダブの己を迎へに來るに遇ひければ、其の安否を問ふて之に、汝の心は我が心の汝の心と同一なるが如くに眞實なりや、と言ひけるに、ヨナダブ答へて、眞實なり、と言ひたれば、然ば汝の手を我に伸べよ、と言ひ、其の手を伸べければ、彼を引きて己の戰車に乘らしむ(列王記略下十章十五節)。

ヨナダブは、エヒウがエホバの神命を奉じてイスラエルの地から惡魔禮拜を根絶するために仕事を進めつゝある事と、そして之は正しき事なる事を知り、此の仕事に全く賛成してゐた。その如く今日、地の善意者は、エホバの證者が神命を奉じてなすつゝある事の正しきものなる事を知りて、之に全く賛成し、此の正しき事の難はれん事を願つてゐるのである。

「戰車」は組織制度を象徴す。エヒウが戰車に乗つてエホバの命じ給ひし仕事を進めてゐたと云ふ事は、今「忠信なる僕」級の者、即ち「遺残者」がキリスト・イエスの指揮下に於て、地上にあるエホバの組織制度に屬して活動しつゝある事を象徴してゐる。エヒウがヨナダブの手を取つて彼を戰車の中に引き入れたる事は、主イエス・キリストが今、地の善意者を援けて彼等を神の組織制度の中に入れ給ふ

ことを象徴す。ヨナダブが其神に對する無私的愛を表明したる後に、エヒウが之を戰車内に引き入れたる事に注意すべきである。此の事は即ち神の祝福を受けんとする者は、神と其の御國の側に固く立ち、地上にあるエホバの見ゆる組織制度に公然と己を屬さしめなければならぬ事を示してゐる。

エヒウはヨナダブが己の仕事に全く同意してゐるのを見たる後に斯う告げた、「我と共に來りて、我がエホバに熱心なるを見よと。斯く彼を己の戰車に乘らしめ：：：(列王記略下十章十六節)。之は別にエヒウが己の熱心を自慢したるに非ずして、神の聖意をなすべく決意せる者の正當なる行動をヨナダブに示さんとしたのである。エヒウはその仕事を熱心になした。彼はエホバの神命に服して、その命じ給ふ處を忠實になすべく固く決心してゐたのである。ヨナダブはエヒウと共に行き、その言ふ處に従つてエヒウの仕事を援助支持した。エヒウがヨナダブの手を取つた事は、我は我が力を汝の爲に用ひ、汝を援け支へ、慰めて神エホバに奉仕する正しき道を汝に教へん」と云つた事を意味してゐる。その如く今日、主は善意ある人々に向つて同様に語り告げ給ふ。

エヒウはヨナダブを伴ふて、滅ぼされたるアハブの家の殘黨の居るサマリヤに行つた。その時、エヒウはイスラエルの地から惡魔禮拜の指導者たちを撃滅一掃せんと考へてゐたのである。此の場合ヨナダブがエヒウと共にあつたと云ふ事は、ヨナダブは惡魔に敵し、エホバに味方する者なる事を公然と表明してゐる事を意味するのであつて、此の事は亦今日、ヨナダブ級の者が神エホバと御國のために公然と

證言する事を豫表したのである。エヒウは悪魔の宗教なるバアル禮拜の祭司たちを一ヶ處に集合せしむる爲に一策を用ひた。茲にエヒウ、民を悉く集めて之に言ひけるは、アハブは少くバアルに仕へたるが、エヒウは大に之に仕へんとす。然ば今、バアルの凡ての豫言者、凡ての臣僕、凡ての祭司等を我が許に召せ、一人も來らざる者なからしめよ。我大なる祭祀をバアルの爲になさんとするなり。凡て來らざる者は生かし置かじと。但しエヒウはバアルの僕どもを滅さんとして偽りて斯くなせるなり。エヒウ即ちバアルの祭祀を設けよ、と言ひければ、之を宣たり。斯くてエヒウあまねくイスラエルに人を遣したれば、バアルの僕たる者皆來れり。一人も來らずして遣れる者はあらざりき。

「彼等バアルの家に入りたれば、バアルの家は端より端まで滿ちわたれり。時にエヒウ衣裳を掌どる者に向ひ、禮服を取り出して、バアルの凡ての僕等に與へよ、と言ひければ、即ち禮服を取り出せり。斯くありてエヒウはレカブの子ヨナダブと共にバアルの家に入りしが、バアルの僕等に言ふ。汝等尋ね見て、此處には唯バアルの僕のみあらしめ、エホバの僕を一人も汝等の中に在らしめざれと。彼等犠牲と燔祭を獻げんとて入りし時、エヒウ八十人の者を外に置きて言ふ、凡て我が其の手に付すところの一人にても逃れしむる者は、己の生命をもて其の人の生命に代ふべしと。斯くて燔祭を獻ぐる事の終りし時、エヒウその士卒と諸將に言ふ、入りて彼等を殺せ。一人をも出す勿れと。即ち刃をもて彼等を撃ち殺せり。而して士卒と諸將これを投げ出してバアルの家の内殿に入り、凡ての像をバアルの家より取

り出して之を焼けり。即ち彼等バアルの像を毀ち、バアルの家を毀ち、それを以て岡を造りしが今日まで残る。エヒウは斯くイスラエルの中よりバアルを絶ち去りたり」(列王記下十章十八―廿八節)

神がバアル禮拜の撃滅をエヒウに命じられたる此の事は此の悪魔の宗教が神の聖前に憎まるべきものなる事を立證す。此の事は亦羅馬カトリック教權その他の諸制度が神とキリストの聖名に於てなしつゝある偽善がエホバの聖前に於て大に憎まるべきものなる事を立證してゐる。エヒウがバアルの家に入つた時に、ヨナダブが之と同道したことは、即ちヨナダブが悪魔禮拜に敵し、エホバの側に立つ者なる事を表明した譯である。その如く今日、地の善意ある人々は、その以前に信奉したる宗教の如何なるものなるを論ぜず、エホバの證者と共同して之の仕事に援助支持し、公衆の前に證言して悪魔の宗教なる偽物「キリスト教會」制度の偽善と悪狀に反對すると共に、己等がエホバと其の御國に服従する者なる事を立證するのである。

他の多數諸聖句は此の結論と全く一致してゐる。エホバと其の王キリストは今、ヨナダブ級の者がエホバの證者の仕事に共働して、之を精神的物質的に援助支持し、斯くする事によりて神と其の正義の御國に對する彼等の忠誠を立證し得る機會を彼等に得せしめ給ふ。此の神の國の福音は、エホバの神命に従つて全世界に廣く宣へ傳へられざるべからず、而して此の榮ある仕事に參與するはヨナダブ級の者の特權であり、責任である。

エヒウはバアルの豫言者をして己が正體を自證せしむるために、彼等をして特殊の衣裳を着用せしめた。衣裳はその着用する者の正體を自ら識別せしむ。此の故にエヒウは云つた「禮服を取り出して、バアルの凡ての僕等に與へよ」と。そして他の者は皆バアルの宮から逐ひ出された。之は即ち惡魔の側に立つ者と、エホバの側に立つ者との兩者を區別するためであつた。エホバの證者は今眞理の音信を宣べ傳へよと命令さる。而して此の神の國の音信に敵する者は、何れも己自身が神の國に反對する者なる事を自證してゐるのである。今主の受膏者たちと共働する者は、その者が偽善なる宗教制度より脱して、エホバの側に立ちつゝある事を自ら立證してゐるのである。エリヤは惡魔禮拜者をして己等自身を識別せしむる爲に斯う云つた事がある「エホバ若し神ならば之に従へ。されど惡魔若し神ならば之に従へ」(列王記上十八章廿一節)。エヒウは之と同様の事をなしたのである。神は今、全地諸國の情勢を導いて、人をして己等自身が神エホバの側に立つか、それとも惡魔の側に立つかを自ら識別せしめ給ふ。斯く人々を分類する事に關する豫言的模圖は多數聖書の中に記録されてあるが、神は何れの場合に於ても最初に知識の音信を人々に與へて先づ彼等の注意を喚起して後、然る後に彼等をしてその何方に仕ふるかを自ら選擇せしむるの方法を執つてゐられる。

神は決して人々を救ふべく努力してゐられるのではない、と云ふ事を確と心に記憶せよ。神は如何なる人若くは制度、團體に對しても人を救へとは決して命じてゐられない。神には努力なし。神には唯其

「録」に「記」號

の聖意の如くに御目的を成就し給ふ事があるのみである。神は神に仕ふる者の爲に豐なる富を準備し給ふ。神は先づ眞理の知識を與へ、彼等をして誰が神に奉仕して祝福を受けるか、誰が我利的慾望に支配されて惡魔の擧となるかを自ら決定せしめ給ふ。神と人類の贖ひ主イエス・キリストを愛して之に奉仕する者は、此の眞理を勇敢に他の人々に告げ、その事によつて主より祝福を受く。斯かる者は神の聖言と其の御國を他の人々に語り告ぐる事を喜ぶ。之の結果として御國の音信は廣く宣へ擴められ、人々をしてその何れの側に立つかを自ら決定せしむるのである。此の故にエヒウとヨナダブの豫言的模圖は、善意ある人々をして神と其の御國の側に立ち、此の眞理を人々に知らしむる爲にエホバの證者と共働せしむる事となるのである。

エホバは更に他の豫言者等を用ひて、今地にある善意者と、天界にあるところのエホバの見えざる組織制度及びその天的制度と完全に一致して働く地的部分を顯示せしめ給ふ。神の組織制度の見えざる天的部分も之と同一の統制下にある。エゼキエルの豫言の中には、此の天的部分が地的部分と完全なる一致を以て活動し、地上人類を教へ、之を分類しつゝある一大組織制度の光景が一の豫言的模圖即ち豫言的戲曲によつて示されてある。そしてその第九章にある豫言は、他の諸豫言と同じく「全能の神の大なる日の戰」即ちハルマゲドンの直前に於て人々を分類する仕事が行はれる事を教へ示してゐる。之に

よつて善意ある人々が地上に出現するのである。

キリスト・イエスはエホバの大執行者に在して「全能の神の大なる日の戦」にエホバの天軍を指揮して、悪魔の組織制度の上にエホバの審判を執行し給ふ。上記エゼキエルの豫言の中に斯く記さる、「斯くて彼大聲に我が耳に呼ばはりて言ひ給ふ。邑を司る者ども各自撃滅の武器を手に取りて進み來れ」と「エゼキエル書九章一節」。之は最後の大戰のためにエホバの天軍を準備するところの號令である。故に各員敵を撃滅する武器を執りて進み來れと命令さる。エゼキエルは此の異象の中で六人の者が進み來るを見た。

「即ち北に向へる上の門の路より六人の者各々撃ち破る武器を手に取りて來る。其の中に一人、布の衣を著、筆記人の墨入を腰に帶ぶる者あり。彼等來りて、銅の壇の傍らに立てり」(エゼキエル書九章二節)。

「六」の數は聖書の中で未完了、未全、未滿、不足を象徴するに用ひられ、一方「七」の數は完全、完了、全部を象徴するに用ひられてゐる。エホバの組織制度は一にして完全であり、完備す。而して此の戲曲の中の「六人」は神の組織制度の天的部分を代表し、一方布の衣を著して「墨入を腰に帶ぶる者」は、地上にありて主イエス・キリストの指揮下に活動する神の組織制度の見ゆる部分即ち「忠信なる僕」級の者を代表す。即ち「六」は天的部分を代表し、「一」は地的部分を代表す。斯くして全部の「七」は合して神の全組織制度を表象するのである。神の組織制度の此の地的部分はエホバとその御國に就ての證言を宣明せよと命ぜらる。地上の「忠信なる僕」は新郎を待つ新婦に譬へられてゐる。之等の者に關

して斯く記さる、「新婦は潔くして光ある細布を衣る事を許さる。此の細布は聖徒の義なり」(歌示録十九章八節)。「布の衣を著て、墨入を腰に帶ぶる者」は、地上に遺残れる忠信なる僕級即ち「エホバの證者」の全部を代表す。エホバの組織制度の天的と地的の兩部分は斯く全き一致を以て活動す。天的部分は撃滅の仕事をなし、地的部分は眞理の音信を宣明するの任務に服す。その結果として、地の人々はハルマゲドンの前に、己自身を何れの側に屬せしむるかを自ら決定し得る機會を與へられるのである。證言の仕事は先づ成されなければならぬ。此の證言が完了すると同時にエホバの天軍は、悪魔と彼の組織制度の下にある全部の者を撃ち滅ぼす事となつてゐる。

サタンの組織制度の中心は宗教である。ニムロデの時以後、サタンは宗教を用ひて神エホバの聖名の上に誹謗と侮辱を加へ、又之によつて多くの人々を神より離反せしめた。特に所謂キリスト教は神を禮拜するために成り立つてゐると人々は誤信してゐるが、此の邪惡制度は宗教の假面下に成立せる純然たる政治的組織制度であつて、之は全地人類を支配するを以て其の目的としてゐるのである。多くの善意者は此の「キリスト教」の偽稱に欺かれて、之を支持援助して來た。地上にある此の全組織制度は「邑」として現はされてゐるが、之はハルマゲドンに於て撃滅一掃されるのである。此の最後の來る直前に、「エホバの證者」即ち「布の衣を著て、腰に墨入を帶ぶる者」は一の任務を神より授けらる。「時にエホバ彼に言ひ給ひけるは、邑の中、エルサレムの中を巡れ。而して邑の中に行はるる處の諸々の憎むべき事

のために歎き悲む人々の額に記號をつけよ」(エゼキエル書九章四節)。

偽善即ち惡魔禮拜は神の聖前に於て全く憎まる。此の大邪惡制度即ち羅馬カトリック教權の治下に於て、多くの不正不義、殘忍暴戾なる惡事が神とキリストの聖名に於て行はれたる事を地の善意者は見た。而して之等善意者が此の豫言中に、「邑(サタンの組織制度)の中に行はるる處の諸々の憎むべき事のために歎き悲む人々」として表はされてゐるのである。

之等善意者が眞理を學び知るの機會を有する事はエホバの聖意である。人の額は理智を象徴す。故に「歎き悲む人々の額に記號を附ける」と云ふ事は、之等の人々をしてエホバの御目的に關する知識を理解せしむるを意味してゐるのである。エホバの證者は今、神命を奉じて實に此の事をなしつつあるのである。此の理由によつてエホバの證者は今、聖書を解明する書物冊子の多くを人々の手に配附して、聖書を理解せしむべく活動しつゝあるのである。從順なる人々は喜んで眞理を學び知る。之等の人々こそ即ち「ヨナダブ」級の者であり、額に記號を附けられ、神の組織制度の見ゆる部分に参加し、エホバの證者と共に出で行きて、神の國の證言を他の人々に傳達するのである。

此の證言の仕事即ち神の眞理を望む人々の「額に記號を附する」仕事は神の御豫定の時に終了すべし。即ち許さる「時」にかの衣を着て、腰に筆記者の墨入を帯ぶる人復命して言ふ、汝が我に命じ給ひし如くなしたりと」(エゼキエル書九章十一節)。

此の事はイエスの豫言と全く一致す、「御國の此の福音は、諸々の國人に證をなさんため全世界に宣傳へられん。而して後終りは至るべし」(マテ)として此の「終り」は世界開闢以來空前絶後の大難難と共に來る事となつてゐる。(改訂マタイ傳廿四章十四、廿一節)。「衣を着て、腰に墨入を帯ぶる人」級によつて、此の證言が完了する時に、「六人」即ちエホバの組織制度の天的部分による活動が開始されるのである。キリスト・イエスは此の天軍に向つて號令し給ふ。即ち豫言者エゼキエルは斯く聞いた、「我聞くに、彼またその他の者どもに言ひ給ふ。彼に従ひて邑を巡りて撃てよ。汝等の目、人を惜み見るべからず。憐れむべからず。老人も少年も幼女も婦人も悉く殺すべし。然ど身に記號ある者には觸るべからず。先づ我が聖所より始めよと。彼等即ち家の前に居りし老人より始めよ」(エゼキエル書九章五、六節)。之等即ち天軍は、額に記號を有せざる者の全部を殺戮する事を明示してゐる。同時に此の大屠殺は「老人」より始めよとあるが、之はサタンの組織制度の上に實權を振ふる者等を意味してゐる。此の場合、額に記號ある者のみは見逃されるのである。之ぞハルマゲドン即ち「全能の神の大なる戰の日」の開始を意味す。「彼また彼等に言ひ給ふ。宮を洗し、死人をもて庭に灑せよ。汝等行けよ、と彼等即ち出で行きて邑の中に人を撃つ」(エゼキエル書九章七節)。

之に見るも惡魔の側にある者の全部は屠殺されるのである。「彼等を此と彼と打ち合せて碎かん。父子をも然すべし。我は彼等を惠まず、惜しまず、憐れまずして滅ぼさん」(エレミヤ記十三章十四節)。

類に記號を受け、ハルマゲドンを通じて主の保護を受くる者は即ち「ヨナダブ」級である。(尙これに就ての詳細説明は「Vindications」第一卷第九十四頁にあり)。

ノアと彼の家族

ノアと彼の家族に關する豫言的模圖の中にも地上の善意者の事が示されてある。ノアの時代に地の人は極度に悪化した。エホバはノアに告げて、地の被造物の全部を滅ぼさんとの御目的を示された。神はノアとその家族が、大洪水の時に安然なる避難所たるべき方舟の建造をノアに命じ給ふた。(創世記六章一―十七節)。此の大洪水による大破壊は、今全地を支配する悪魔の組織制度の滅亡を豫表するものであつた。(マタイ傳廿四章卅七―卅九節、ルカ傳十七章廿六、廿七節)。ノアが建造せる方舟は、神に奉仕する者のために設けられるところの唯一の安然なる所、即ち神の組織制度を表象す。ノアの時代に於ける地上の暴逆はサタンと彼の天使達が他の被造物を欺いた結果であつて、之に就ては「Isis, Jehovah」と題する冊子(日本版「天使」あり)に詳説されてある。

サタンは人々を欺くために主として宗教を用ひた。而して宗教そのものに就て諒解を得るは、今日正義を求むる人々にとつて最も重要である。

宗教制度の全部はニムロデより發す。(創世記十章八―十節)。宗教はサタンの寵器であつて、その最も甚しき悪例は即ち羅馬カトリック教權である。此の邪惡制度は神とキリストの聖名を詐稱して練り歩く。

サタンは之を用ひて多數の人々を欺き、彼等をしてエホバの御目的に就て全く無知ならしめた。羅馬カトリック教權は地上に於てエホバの證者に對する最強敵であり、一般の人々をして眞理に無知ならしむべく躍起狂奔しつゝある。之は多くの正義を求むる善意者を邪導して神より離反せしめた。サタンはプロテスタント諸教會制度を用ひても亦之と同様に多くの人々を欺瞞邪導した。之等の邪惡制度は皆その教職者の支配下にある。ノアの時代にサタンが「神の子たち」を異て捕へたのも即ち之と同一の方法であつた。(創世記六章一、二節)。現在教職者等が此の世の政治權者、商業金融業者と共働しつゝある此の事は、即ち彼等がサタンに捕へられて其の道具となつてゐる事を明らかに立證してゐる。羅馬カトリックとプロテスタントとを問はずその教職者は何れも人々に教へて、死者は煉獄や地獄に生存して苦んでゐると偽はり欺きつゝある。之ぞ即ちサタンが人間に語つた最初の嘘言である。(創世記三章四節。ヨハネ傳八章四―四節)。多數の人々は、己等の愛する死者が煉獄や地獄で苦惱してゐる爲に牧師や司祭等の祈禱を乞はなければならぬと誤信してゐる。斯かる嘘偽と欺瞞の全部は、サタンの發案であり、彼とその惡靈者によつて行はれるところの大詐欺である。サタンはハルマゲドンの大戦までの時が今や最も接迫せるを知り、人々を「降神交霊」の魔術に欺き入れて、人々を神に敵せしめやうと狂奔してゐる。此の故に今日此の種の妖術と魔術が全地に盛んとなつて來たのである。サタンと彼の惡靈者に從ふ者の全部は、ハルマゲドンに於て必ず滅亡するのである。

最高の真理

神エホバの御恵みを受けんと願ふ者にとつて最も重要な真理は何であるか。それは即ち、其處には唯一の安然なる避難所なる神エホバの組織制度が彼等のために設けられてあると云ふ事を知ることである。汝等静まりて私の神たるを知れ。我は諸々の國のうちに崇められ、全地に崇めらるべし。萬軍のエホバは我等と偕なり。ヤコブの神は我等の高き塔なり。』(詩篇四十六篇十、十一節)。神エホバに敵する者の最後は必ずその者の滅亡たるべし。左にその實例がある。

ルシフアーはエホバの全能の神に在す事を知ると共に、神に服従しなければならぬ事を知つてゐた。彼は神の組織制度の中にあつたが、自ら進んでそれより脱し、神に敵對する者となり、己と行動を共にした天使の一軍を己が部下となした。斯く神の組織制度より脱すると云ふ事は其の者の破滅を意味す。エホバはその御豫定の時至りてサタンとその惡しき天軍を撃滅一掃するの時至るまで彼等を放任して置かれた。之等の惡しき新衆に就て神がその聖言を以て示して置かれたる事は、理智ある被造物に對して一の強き警告として働くのである。

一度神の組織制度の中に入り乍ら己が特權を輕んじたり、己が責務を怠る者は必ず敵サタンの襲撃を受けなければならぬ。敵の誘惑に陥り、神の組織制度より離れて、後、之に敵對する者となる時、その者の最後は必ず滅亡である。意識的罪とは、故意に神の律法を犯す事である。斯かる惡を行ふ者は神必ず之を滅し給ふ。(詩篇百四十五篇廿節)。

サウルも亦曾て神の組織制度の中に入り乍ら之より脱落したる一人であつた。(サムエル前書九章十五、十七節、十五章廿二、廿六節)。イスカリオテのユダも之と同様であつて彼の最後は當然滅亡である。之と同じ運命は「罪の人」即ち「滅亡の子」の上にも必ず臨む。(テサロニケ後書二章三、九節)。之等の者も曾つては眞理に在り、神の恩恵を受け、神の組織制度の中にあつたに拘らず我愆のために之より離れ去つたが故に當然滅亡しなければならぬ事となつてゐる。之等の者に就て使徒ペテロは云ふ、「彼等若し我等の主なる救ひ主イエス・キリストを識るに因りて、世の汚れを脱れ、また之に累はれて勝たる時は、其の後の状態は前にまさりて更に惡しかるべし。彼等義の道を知りて尙その傳へられし所の聖き誠命を棄てんよりは寧ろ義の道知らざるを善とすべし」(ペテロ後書二章廿、廿一節)。イスラエルは神の選民として神より恩恵と保護を受けたるに拘らず此の民族はサタンの手に陥ちて永久に滅び失することとなつた。その如く「キリスト國」制度即ち「キリスト教會」制度も最初は神に奉仕する事を目的としたるに拘らずその指導者たちは神とキリストより離れ去つて、惡魔の組織制度と手を握つて了つた。故に之はハルマゲドンに於て滅亡するのである。

安 然

然らば何處に安然を求むべきか。而して誰が其の確實なる安然を得るか。ノアの時代の大洪水は、此

の世がハルマゲドンに於て滅亡する事の前影であつた。ノアはエホバに服従し、神に對して斷へず忠節を確保したるが故に彼はエホバの聖前に於て義人として承認された。ノアはエホバの神命に服して方舟を建造したが、之はノアと彼の家族のために唯一の安然なる避難所となつた。此の事は即ち大艱難時に際して、唯一の安然なる避難所はただ神の組織制度の中のみ見出される事を豫示するものである。ノアの方舟はエホバの神命によつて建造された。故に之はエホバの組織制度の模型である。此の故に「唯一の安然なる避難場所」はエホバの組織制度の中である」と言ひ得るのである。

大洪水は全地に大艱難を興へた。ハルマゲドンは最大の艱難を來らしむるのである。(マタイ傳廿四章廿一、廿二節)。ハルマゲドンの大艱難に際して、神に敵する者の全部には安然なる避難所が絶無である。(エレミヤ記廿五章卅三、卅五節)。單に「クリスチャン」を自稱するのみにては神とキリストより何の保護も受ける事は出來ぬ。エノスの時代より人々はエホバの聖名を濫用して來た。(創世記四章廿六節)。神の國の證言を宣明しつゝある「エホバの證者」に反對する者の全部は必滅すべく、之の中には「罪の人」即ち「滅亡の子」も含まれてゐる。サタンと共に叛逆した「ネビリム」(創世記六章四節)も亦ハルマゲドンに於て滅ぼされるのである。(「Vindication」第二卷卅三、一頁を見よ)。ノアの時代に不従順者となり、神の組織制度から離れ去つた「神の子たち」は永い間監禁された。(ペテロ前書三章十九、廿節)。之等の「神の子たち」は今尚生存す。そしてハルマゲドンの時に彼等の懲罰は終結するであらう。そして此の級の者は正義に復歸するならば救はれる事となつてゐる。

ヨ　ナ　ダ　ブ　級

るならば救はれる事となつてゐる。

「義の宣傳者」ノアは神の證者として、今地上にある忠信なる「遺残者」の前影であつた。又ノアと共に方舟の中に在つた者は今、神の組織制度に参加する地上のヨナダブ級を豫表した。之等の者は、若し彼等が神の示し給ふ條件を守るならば、エホバの聖怒の日に隠されて保護される事となつてゐる。(セバニヤ書二章三節)。その條件と云ふのは即ち、彼等が常に神の組織制度と共に在つて、喜んで神に奉仕し、エホバの證者と共働して此の世との妥協を拒絶する事である。而して「戦車」即ち神の組織制度の中に入り乍ら一方此の世を支持援助し、此の世の改善等を企つるならば、其の者は必ず艱難に遇はなければならぬ。唯一安然の場所なるエホバの組織制度内から進んで出て去る者の上に滅亡の臨むは必然である。

ヨナダブ級の者は眞理解明の書物によつて神の御目的を正しく學び知らなければならぬ。彼等は神の誠命を熱心に守る事によつて神に對する愛を表明しなければならぬ。「宮」級の者と、ヨナダブ級の者のために神は今、幕を開いて、神に歸順する者等の顔を照らし、將に發生を見んとする出來事と、一方過去六千餘年間の出來事の眞意義を悟り見させしめ給ふ。之等眞理の中の最も重要な點は左の如くである。

即ち、全能の神エホバは、生命の授與者に在し、神を愛して之に服従し、エホバに對して常に忠節を保つ者を守り給ふ。理智を有する全被造物の上には今や大なる試練が到來す。人々よ、此の警告に聞け、

「エホバは其の聖き宮に在すぞかし。全地其の御前に黙すべし」(ハバクク書二章廿節)。
 正しき道を學ぶ者は人間の教へを拒絶すべきである。神エホバとキリスト・イエスは、正義を愛して眞理を學び知らんと願ふ者等のために直接教師となり給ふ。(イザヤ書卅章廿節)。己が勝手なる教理を人々に教へんと企つる者等はサタンの道具にして、その教ふる所は皆神の聖言に逆行せる嘘言である。多數の人々は之等の偽教師に邪導されてゐる。神エホバよりその富を受けんとする者は何れも眞理を學び知らなければならぬ。而して眞理は聖書とその解明の書を熱心に研究する事によつてのみ學び得られるのである。善意を有する者等が此の事を他の人々に告げ知らす事は彼等の特權であり、責務である。

避難の邑

地の善意者即ちヨナダブ級の者は、神が聖書の中に示し置かれたる「避難の邑」に就ての御準備に深甚なる興味を有してゐる。之等「避難の邑」は、ハルマゲドンに際して或る者等の安然のために設け給ふ神の御準備を豫示してゐる。キリスト・イエスの模型なるモーセは此の「避難の邑」に就て初めてエホバより神命を受けた。後に彼は人々に斯う告げた。「エホバ、モーセに告げて言ひ給はく、イスラエルの人々に告げて言へ。汝等はヨルダンを渡りて、カナンの地に入らば、汝等の爲に邑を設けて、避難の邑となし、誤りて人を殺せる者をして其處に逃れしむべし。それは汝等が仇討ちする者を避けて逃るる邑なり。之あるは、人を殺せる者が未だ會衆の前に立ちて、審判を受けざる前に殺さるる事なからんた

めなり」(民數記卅五章九一十二節)。

モーセは、エホバの神命に従つて、此の事をイスラエル人がカナンの地に到達する少しく以前に於て彼等に告げた。(申命記一章一三節)。エホバは六つの「避難の邑」を設け給ふた。(民數記卅五章六節)。「六」の數は「不完全」を象徴す。而して六つの「避難の邑」が設けられたる此の事は、此の準備が地上に於ける不完全なる状態の時に人間のために設けられたる事を意味してゐる。此の「避難」とは保護若くは安然を意味す。殺人の行爲は、生命の貴重に就ての神の永遠の契約を破るものである。(創世記九章四一十六節)。昔、誤つて殺人の罪を犯せる者は、神の設け給へる之等の「避難の邑」に逃れ入り、或る時まで、或る條件を守りし事によつて保護される事となつてゐた。之を即ちハルマゲドンの時に於て、誤つて永遠の契約を破れる善意者のために、神が一の安然なる場所を設け給ふ事を示すものである。

昔、之等六つの「避難の邑」は遞失的に殺人の罪を犯せる者等のために設けられた。「此の六つの邑」は、イスラエルの人々と異邦人及び其の中に寄寓れる者の避難所たるべし。凡て誤りて人を殺せる者は其處に逃るることを得べし」(民數記卅五章十五節)。

「誤つて人を殺せる者」とは何を意味するのであらうか。地上にあるサタンの組織制度は、故意に永遠の契約を破りて殺人と流血の残忍行爲を逞しくす。神はその豫言者を通じて、サタンの組織制度を撃滅すべき旨を宣言して置かれた。即ち曰く、「民律法に叛き、法を犯し、永遠の契約を破りたるが故に地

は其の下に汚されたり。此の故に呪詛は地を呑み盡し、其處に住める者は罪を受け、また地の民は焼かれて僅少ばかり遺れり」(イザヤ書廿四章五、六節)。

サタンの組織制度の見ゆる部分なる商業と政治の兩要素は常に残忍なる戦争の流血行爲を企圖し、助長す。一方其の仲間なる「キリスト國」制度、特にその牧師や司祭等の教職者は之等の戦争を聖化し、不埒にも此の残忍なる流血行爲を以て神の聖意であると偽稱す。之等の意識的殺人者の全部は、ハルマゲドンに於て全滅するのである。

此の世の諸國、特に「キリスト國」制度に屬する諸國の内には、此の暴壓的なる商業政治制度を擁護支持し、陸海軍に入りて流血行爲に參與して、戦争を聖化する偽物「キリスト教」制度と共働し、之によつて神との間の永遠の契約を破る悪行爲に與し、又神に奉仕する忠信者を迫害する爲に働く警察官意に屬する者等がある。世界大戦中に多數の者が此の種悪行爲に參加し、神の民の上に甚大なる迫害を加へたが、然し彼等の大多數は之等の事が神の永遠の契約に違反する悪逆行爲であるとは知らずして之をなしたのである。

昔、イスラエル人の支配階級は、上記の悪事に該當する行爲を意識的になしてゐた。故にイエスは彼等に告げ給ふた。「それは義なるアベルの血より、宮と祭壇の間にて汝等が殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地に流したる義人の血は凡て汝等に報ひ來らんがためなり。われ誠に汝等に告げん、此の事皆此の代に報ひ來るべし」(マタイ福音書廿三章卅五、卅六節)。

イスラエルの公的分子が一般無防禦の民衆を殺し、特に神の僕を殺害したる行爲に對して彼等はエホバの刑罰を受けた。イエス殺害後、僅か數年にしてイスラエルの上に到來せる此の恐ろしき大刑罰に就て使徒ペテロは神の靈に満たされて彼等に斯う告げた。「汝等此の邪曲なる代より救ひ出されよ」と。(使徒行傳二章四十節)。

「キリスト國」制度に屬する諸國に於ては神の民の上に多くの迫害が積み重ねられ、多くの血が流された。亦此の制度に屬せざる諸國に於ても此の事が無意識のうちに行はれた。「キリスト國」制度特に其の支配分子は、神の聖意をなすと自稱し乍ら一方に於て此の種悪逆行爲を逞しくしつゝあり。エホバの豫言者は斯かる者に就て言ふ、「忠信なりし邑(新く自稱)如何にして淫婦とはなれる。昔は公平にて滿ち、正義其の中に宿りしに今は人を殺す者ばかりとなりぬ。汝の白銀は滓となり、汝の葡萄酒は水を交へ、汝の長たちは叛きて盜賊の仲間となり、各々賄賂を喜び、贈物を追ひ求め、孤兒に公平を行はず、寡婦の訟訴は彼等の前に出ること能はず。この故に主萬軍のエホバ、イスラエルの全能者宜しく、嗚呼、われ敵に向ひて念をはらし、仇に向ひて報ひをなすべし」(イザヤ書一廿四節)。

偽物キリスト教の教職者、特に羅馬カトリック教は此の世の商業權者や政治權者が一般民衆を掠奪し、虐殺するを傍觀するたるのみならず反て之を奨勵するたるが故に、彼等の全部は皆以上の聖言の適用を己等自身の上に受けざるべからず。エホバの豫言者は亦言ふ。

「われ子を産む婦の如き聲、初子を産む者の苦しむが如き聲を聞く。これシオン女の聲なり。かれ自ら歎き、手を伸べて言ふ。嗚呼、我は禍ひなるかな。我がたましひは殺人者のために疲れ果てぬ」(エゼキヤ記四章卅一節)。「他の者等は其の僕を捕へ、辱めて殺せり。王これを聞きて怒り、軍勢を遣して其の殺せる者を滅ぼし、又其の邑を焼きたり」(マタイ傳廿二章六、七節)。「猶太人にして亦「キリスト國」制度の中にも、之等の悪行爲に賛成せずと雖も周囲の事情に押されて悪行爲者を多少とも支持するを強制されてゐる者がある。之等の者こそ即ち「誤りて血を流す罪」をなしたる級に該當するのである。之等の「誤りて血を流す罪」を犯したる者は、其處に何等か避難の道が設けられない限り、彼等も亦「全能の神の大なる戦の日に滅亡しなければならぬ事となる。神エホバはその大なる御仁慈を以て之等の者のために必要な避難の道を準備し給ふ」モーセ、ヨルダンの此方日の出る方に於て邑三つを別てり」(申命記四章四十一、四十四節)。ヨルダン河を渡つた後に、ヨシユアはモーセの此の選擇を確定し、又カナンの地にて三つの邑を選んだ。(ヨシユア記廿七章七、九節)。之等の都合六つの邑は「イスラエル人」と「異邦人」及びその中に「寄寓れる人々」の爲に避難所となつたが、此の事は即ち、之等「避難の邑」によつて豫表されたる所の神の組織制度は、「キリスト國」制度の中にある者、又之と共に働する者にして然も之に屬せざる者のために避難所となる事を意味してゐるのである。「誤りて知らずに人を殺せる者を其處に送れしめよ。之は汝等が打打する者を避けて逃るべきところなり、これ即ちイスラエルの一切の子孫及

び之が中に寄寓り居る異邦人のために設けたる邑々にして、凡て人を誤り殺せる者を此處に送れしめ、其の會衆の前に立たざる中に仇討ちの手に死ぬるが如きことなからしめん爲なり」(ヨシユア記廿三章三、九節)。「鐵の器」、「投ぐる石」又は「木の器」即ち棒等を用ひて故意に人を殺したる者に對する刑罰は死である。(民數記卅五章十六、十八節)。その殺人者の血は復讐者の手によりて流されなければならぬ。之ぞ即ち神の永遠の契約を破つた者に對する刑罰である。「凡そ人の血を流す者は人その血を流さん。そは神の像の如くに人を造り給ひたればなり」(創世記九章六節)。「仇を討つ者、その故殺人を殺すことを得、即ち之に遇ふ所にて之を殺すことを得るなり」(民數記卅五章十九節)。然し其の殺人が若し偶發事故又は過失であるならば、その人を殺せる者は、己が安然のために「避難の邑」に逃げ入る事が出来る。「それは汝等が仇討ちする者を避けて逃るべき邑なり。之あるは、人を殺せる者が、未だ會衆の前に立ちて審判を受けざる前に殺さることなからん爲なり」(民數記卅五章十二節)。

仇を討つもの

「仇を討つ者」即ち斯かる悪行爲者の上に復讐を執行する者は誰か。神の律法の明文は、此の種「仇を討つ者」を以て神の公的執行者となしてゐる。「仇を討つ者」のヘブル語原字は、近親の故によつて復讐執行を委ねられたる者」を意味す。

人類にとつて最も密接なる近親者はイエスである。イエスは處女マリヤより生れた。故に彼はイスラ

エル人にとつて近親者であつた。(ガラテヤ書四、五節)。完全なる人間イエスは、己が貴き血潮を以て人類を買ひ取つた。故にイエスは「贖ひ主」に在す。そしてイエスは、人類の贖ひ主として、人類に生命を與ふる權威を父エホバより授けられた。(ロマ書六章廿三節。イザヤ書九章六、七節)。此のイエスはエホバの公的大執行者に在し、流血殺人者の上には、血は血を以て報ゆるところの判決を執行し給ふ。『それ父は誰をも審判かず。審判は凡て子に委ねたり。人の子たるによりて之に審判するの權威を賜へり』(ヨハネ傳五章廿二、廿七節。申命記十九章廿二節)。キリスト・イエスは父エホバの聖名の「證明者」であり、神に敵する全部の者の上に復讐を執行する者に在す。此の復讐執行に際して、各々撃滅の武器を手に執れる六人の者」によつて代表された者が、イエス・キリストの指揮を受けて之に参加す。(エゼキエル書九章一、二節。また「Vindiction」第一卷第九十四頁を見よ)。

『仇を討つ者はその故殺人を殺すことを得。即ち之に遇ふ所にて之を殺すことを得るなり』(民数記略卅五章十九節)。大執行者イエス・キリストはハルマゲドン即ち『全能の神の大なる日の戦』に於て流血殺人者の全部を必ず成敗し給ふ。此の時『避難の邑』即ち神の組織制度の外部にある者の全部は滅さるべし。神の律法の明文に曰く、『之あるは人を殺せる者が、未だ會衆の前に立ちて審判を受けざる前に殺さるることなからんためなり』(民数記略卅五章十二節)。他の殺人者の全部は殺さるべし。『避難の邑』は即ち避難の一方方法を保證するものである。『恐らくは仇討ちする者、心熱して、其の殺人者を追ひかけ、道路長きに

於ては遂に追ひ及きて之を殺さん。然るに其の人は素より、之を惡みたる者に非ざれば殺さるべき理あらざるなり……これ汝の神エホバの汝に與へて産業となさしめ給ふ地に、罪なき者の血を流すこと勿らしめんためなり。斯くせずば其の血汝に歸せん』(申命記十九章六、七節)。神の此の律法は、忠信なる遺残者が、神の國への契約に入れられたる後に發生するところの更に大なる事を豫表してゐるのである。(ヘブライ書十章一節。十二章十二、廿九節)。新約は既に就任し、忠信者たちは「神の國への契約」の中に入れられた。然る後に今、實體的『避難の邑』が設けられ、神の御慈悲を願ひ求むる者等のために其の運用を開始しつ

つあるのである。(之に就ては「Jehovah」と題する書中に詳説されあり)。
エヒウはエホバの聖名を證明すべく出て行つた時に、彼は其の使命遂行のために「その心を熱くした」と記さる。その如く「エヒウよりも大なる」キリスト・イエスは、エホバの聖名の證明のため敵の眞つ只中に支配を開始すべく遣された時に、イエスはその大使命を遂行するために極めて熱心であつた。流血の暴逆を逞しくせる全部の者に對して今復讐が執行されなければならぬ。何故なれば今は我等の神の復讐の日であり、流血殺人者の全部は神の大執行者キリスト・イエスの手に陥らなければならぬからである。此の故に惡魔は「己が時の幾許もなきを知る」、即ち『全能の神の大なる日の戦』が最も接迫してゐるのを知つてゐるのである。(黙示録十二章十二節)。斯くしてこれは殺人者の上に審判を執行して、エホバの聖名を證明することとなる。殺人流血の惡行爲に知らずして参加せる者、知らずして神エホバに敵對

せる者は今急いで「避難の邑」に走り入らなければならぬ。彼等は悪魔の組織制度の下より脱して、神の組織制度の中に固く立たなければならぬ。此の故に斯く記さる。「汝等バビロンの中より逃げ出て各自その生命を救へ。その罪のために滅さるる勿れ。今はエホバの仇を復し給ふ時なれば、報ひをそれになし給ふなり。矢を磨ぎ、楯を取れ。エホバ、メデヤ人の王等の心を激發し給ふ。エホバはバビロンを攻めんと謀り、之を滅さんとし給ふ。これエホバの復仇、其の宮の復讐たるなり」(エレミヤ記五十一章六、十一節)。

過去幾千年間、全地は悪しき者サタン、彼の残忍暴戾なる組織制度の支配下にあつた。エホバの大執行者キリストは之等の全部を撃滅粉砕し給ふ。エホバの大執行者キリスト・イエスは今、審判執行の爲に神の宮に臨み給ふ。神は今全地を呼びて、全地はその聖前に黙し、エホバの神命に服せよと詔命し給ふ。今はエホバが全地に警告を發し給ふ時である。サタンの地的組織制度は、己が達着すべき運命に就ての神よりの警告を受けた。此の警告は「キリスト國」制度の宗教家や商業家、政治家を喜ばさない。而して彼等は此の警告に聴く事を拒絶して、己が心を愈々頑固くした。之は牧師、司祭等の教職者に於て特に然りである。「キリスト國」制度の公的分子を形成する之等の者は、纏ゆる害意と悪意とを以て、眞理を宣明する神の民を迫害する事に熱中するのみならず、之等の中の或る者を殺害するのである。而して彼等は善意ある人々の眞理を厚ひ知るを極力妨害しつゝあるのである。

サタンの組織制度の天的地的の兩部分は、エホバの受膏者たちが神の聖名と其の御目的を宣明するを怒りて、之等を滅さんと斷えず窺ふ。(詩篇八十三篇一―五節)。ナボテを殺害してその所有物を強奪したるアハブとイゼベルの如く、牧師や司祭等の教職者とその仲間は今、エホバの證者に對して嘘偽の證言をなして彼等を苦しめ、之によつて己等の害意と悪意とを表示す。之等の者に對する神の律法に曰く、「若し怨恨のために人を推し、又は意ありて人に物を投げ打ちて死なしめ、または敵の心を挟さみ、手をもて人を撃ちて死なしめなば、其の人を撃ちたる者は必ず殺さるべし。これ故殺なればなり。仇を討つ者これに遇ふところにて之を殺すことを得べし」(民数記卅五章廿一節)。

血の復讐者イエス・キリストは害意ある司祭、牧師と其の仲間の全部をハルマゲドンに於て成敗し給ふ。神は天軍(撃滅の武器を持つ六人)によつて代表さる)に命じて、憐れみを加ふことなく之等の悪しき者全部を撃滅し給ふ。「我聞くに、彼またその他の者どもに言ひ給ふ。彼に隨ひて邑を巡りて撃てよ。汝等の目を惜み見るべからず。憐れむべからず。老人も少者も童女も幼児も婦人も悉く殺すべし。然ど身に記號ある者には觸るべからず。先づ我が聖所より始めよと。彼等即ち家の前に居りし老人より始む」(エゼキエル書九章五、六節)。此のエホバの神命に見るも神の聖名を汚し、エホバの忠信者を迫害するの悪行爲に參加せる者の全部は神より何の憐れみを受くる事なくして滅される事が明らかである。然らば之より避難し得る者は誰か。之ぞ即ち「避難の邑」に逃れ入るところの善意者である。彼等も

曾つてサタンの組織制度と共働したのであるが、然しその悪しき事を知り、神の御慈愛を知つて其の下より脱し、神の組織制度即ち「避難の邑」に逃れ入つたのである。彼等はバビロン即ちサタンの組織制度より脱して、神の組織制度の中に逃れ入り、エホバと其の御國の側に立つ事となつた。此の故に彼等は悪しき組織制度に對して最早何の同情も好意も有さず、固く主の側に屬して、神の組織制度と其のなすところに全く同意共働するのである。

長老たち

神の組織制度の長老とは、宮に入れられ、神より膏そそがれて、キリストの中に眞に成育せる者を謂ふ。之等の者は神の眞理と其の敵に關する證言をなす事を少しも耻としない。此の事はモアブの地に於て神が示し給ひし律法と一致す。然ど若し人、其の隣人を惡みて之を附け視ひ、起ちかかり撃ちて其の生命を傷ひて之を死なしめ、而して此の邑の一に逃れたることあらば、其の邑の長老たち人を遣して之を其處より曳き來らしめ、復仇者の手に之を付して殺さしむべし。汝かれを憐み見るべからず。罪なき者の血を流せる咎をイスラエルより除くべし。然せば汝に福祚あらん（申命記十九章十一―十三節）。

神の組織制度の忠信者たる「長老」は、サタンの組織制度に屬する殺人者、迫害者又その保護者の如何なる者とも妥協する事なく、之に同情することなく、好意を示してはならぬ。之等「長老」は此の悪しき組織制度より全く離れ遠ざかり、彼等の上に刑罰を執行し給ふエホバの聖意に全く一致して歩むの

である。斯くする事によりて之等忠信者はエホバと其の御目的に對する己が全き歸順を表明する事が出来る。此の故に之等忠信者は、「我等の神の刑罰」を勇敢に宣明す。何故なれば之は彼等の受けし使命の一であるからである。（イザヤ書六十一章一、二節）。

「キリスト國」制度に屬する全土には、罪なき者の血を流す行爲に参加するを好まざる善意者が多數にある。之等の者は無意識の裡にサタンの畏に陥り、他の人々に對する惡事の多くをなさしめられてゐる。神の律法は、誤つて過失をなせる者が其の心を悔ひ改めたる時に之を免す事を示してゐる。然し之等の者は、その罰を受くる事を免るるが爲に、人類に對する神の御準備を學び知つて、神と其の御國に歸順する事を表示しなければならぬ。忠信者たちは「避難の邑」の「長老たち」の如くに惡しき者を保護してはならぬ。彼等は「更に大なるエヒウ」キリストと一致して歩まなければならぬ。而してキリストが、エヒウの如く、實體的アハブの群衆の首を求め給ふ時に、彼等は當時の「牧伯等や長老たち」の如くに主の命に服して首を提出するのである。（列王記下十章一―七節）。之は別に彼等が直接の殺戮に参加すると云ふを意味するに非ずして、機會の許す限り勇敢に眞理を宣明して、決して容捨しない事を意味するのである。教職者、特に羅馬カトリック教權はエホバの證者が彼等を攻撃するとて抗議す。斯かる事は絶対に噤言である。神は他の人々をして眞理を知らしめんが爲に神の御目的を宣明するの任務を神の民に負はしめ給ふ。惡しき事を摘發曝露するものは即ち此の眞理そのものである。而して之は正義をな

さん事を望む者の利益となるために宣明されるのである。
 大審判者キリスト・イエスは、神の宮の寶座に坐し給ふて地上人類を分類し給ふ。神とその正義に一致せん事を願ふ者は、妥協を絶対に排斥して、主の側に固く立ち、彼等が神とその正義の政府に屬する者なる事を常に表明しなければならぬ。エホバの證者は、神と其の御國に就て學び知るまではサタンとそれらしむるやうに導く責任を課せらる。之等善意者は、神と其の御國に就て學び知るまではサタンと其の代理者、特に教職者の正體に就ては全く無知であつた。斯くして之等善意者は知らず此の不正不義の群眾を支持し、エホバの忠信者及びその他の人々に對して暴行迫害を加ふる悪行爲に参加してゐたのである。

主イエスが神の宮に臨み給ひ、シオンが築かれて後、神の國への契約に入れられたる者等は、神の組織制度を形成する事となつた。昔、忠信の契約がモアブの地に於て作成されたる後に、「避難の邑」が設けられた。此の事は即ち、忠信者が「御國への契約」に入れられたる後に、實體的「避難の邑」即ち神の組織制度が設けられたる事を豫表したのである。忠信なる遺残者が「御國への契約」に入れられる以前に於ては、善意者の多數は永遠の契約を破ると云ふ事に就て全く無知であり、無關心であつた。エホバの聖名の爲の民を選び取るべき「祭物の期間」はシオンの完成と共に終結した。然し今神エホバに歸順する善意者のために如何なる準備がなされてゐるのであらうか。彼等は未だ撒サタンの支配する此の世

の中に住み、然も之の惡しき政治に共鳴せず、之より離れ遠ざかつてゐる。彼等は神に奉仕せん事を願ひ求む。之等ヨナダブ級が今、己等に關するエホバの聖意の何なるかと、その受けし任務とを知る事は最も重要である。

多くの人々は世界大戦に従軍して流血行爲に参加し、之によつて永遠の契約を破つた。然し彼等はサタンの組織制度の支配權者に強制されて之をなしたのであり、又此の事が永遠の契約に違反するものなる事を知らずになしたのである。人々はその時、其處に司祭や牧師たちの偽善と、彼等自身に於て惡争に参加するのみならず又他の人々にも流血行爲を奨励する之等教職者の惡狀を見た。教職者たちの惡狀を目撃して厭憚したる之等の従軍者は、國後、キリスト・イエスを通じて神エホバの御目的を學び知らされ、己等も亦神の聖意をなさん事を願ふのであつた。彼等は惡を憚忌し、直き心を以て正義の道を探し求めた。又他の人々は此の世を支互する暴壓的組織制度を支持擁護し、エホバの證者やその他の人に暴行迫害を加ふる悪行爲に参加した。更に亦他の人々は、タルソの人サウロの如き氣持を以て、神の民を迫害する宗教制度に關係した。(使徒行傳八章一三節。九章一廿二節)更に亦他の人々は警察官憲として、教職者の惡事を援助し、エホバの證者に暴行を加へたが、眞理を學び知つて後に態度を改め、正しき道を歩さんと熱心に努むるのであつた。斯く心直く己が歩む方向を改め、神の示し給ふ道にエホバを採し求むる者は必ず神を慈見するのである。

「避難の邑」の實體はエホバの組織制度である。神は之を、誤つて永遠の契約を破つた者を保護するた
 めに設け給ふた。善意とは、他人に損傷を興へん事を目的とするを謂ふ。その一實例を擧げて見ると、
 司祭牧師等の教職者が、エホバの證者なる男女に罪咎なきを知悉し乍ら之を殺害するの行爲の如きが
 即ちそれである。己等にとつては全く眼の上の瘤なるエホバの證者を除去せんために行動する教職者た
 ちこそ全く憎むべきである。他の者等は教職者に此の害意あるを知らずして彼等を援助した。イスラエ
 ル人に興へられたる神の律法は即ち後者の上に適用されるのである。この六つの邑はイスラエルの子孫
 と、異邦人及び其の中に寄寓れる者の避難場たるべし。凡て誤りて人を殺せる者は其處に逃るることを
 得べし。(民衆記卅五章十五節)。

今、主が神の宮に臨み給へる今日此の時「キリスト國」制度の中に住み乍ら之に屬せず、神と其の正
 しき御國に奉仕せん事を願ひ求むる處の善意者は、神エホバとその御國とに全的奉仕をなす「邑」即ち
 神の組織制度の中に避難しなければならぬ。エホバは之等善意者を援助指導する責務を「エホバの證者」
 に興へられた。之は忠實に遂行されなければならぬ。その責務とは、善意者の爲に設けられたる神の御
 準備に關する音信を彼等に傳達することである。エホバは其の祭司長イエス・キリストを通じてその證
 者に示し、最後の來る以前に於て神の國の福音を全地に宣明せよと命じ給ふ。此の音信は人々に對する
 警告として、通牒として傳達さる。即ち善意者が各自神の聖前に己が責任を負はんが爲である。

「避難の邑」はレビの支族によつて占められた。斯かる者は之等の邑の一つに逃れ行き、邑の門の入口
 に立ちて、其の邑の長老等の耳に其の事情を述べし。然る時は彼等之を其の邑に受け入れ、處を興へ
 て己の中に住ましむべし。假令仇討ちする者追ひ行くとも彼等其の人を殺せる者を之に付すべからず、
 そは彼知らずして人を殺せるにて、素より之を惡み居りしに非ざればなり。(ヨシヤ記廿四、五節)。避難
 者に示し、之を慰め、援くるは「避難の邑」に住むレビ人の任務である。その如く實體的レビ人は今、神
 の組織制度の中に避難し來る者を慰め援け、彼等に必要なる事を親切に告げ知らすのである。之ぞ即ち
 彼等の「額に記號を附する事」である。神は豫言者エゼキエルを通じて祭司級の者に向つて特に示し、
 祭司級の者はあまねく地を行き巡りて、神の道を求むる人々の額に「記號」を附けよと命じ給ふ。斯く
 「記號」を附されたる者は後に「邑」に入り來り、大難難を通じて保護されるのである。(エゼキエル書九章六
 節。ゼパニヤ書二章三節)。

「遺殘者」の各員は之等善意者に關して特殊の使命を神より受けてゐる。然ど若し敵の心なくして思は
 ず人を推し、または意なくして人に物を擲ち、又は人あるを見ずして人を殺す程の石を之に投げつけて
 死なしむることあらんに、其の人これが敵にも非ず、また之を害せんとせしにも非ざる時は、會衆この
 律法によりて其の人を殺せる者と、仇討ちする者とに審判を言ひ渡すべし。即ち會衆は其の人を殺せる
 者を仇討ちする者の手より救ひ出して、之を其の逃れ行きたる避難の邑に還すべし。その者は聖き膏を

そそがれたる祭司の長の死ぬるまで其處に居るべし」(民数記卅五章廿二―廿五節)。

此の故に、人々を訪れて神よりの此の音信を彼等に傳達する事を拒絶する者、此の使命遂行に忠實なる者等に反対し、その仕事を妨害する者等は何れもハルマゲドンに於て大執行者キリストの御手に必然滅亡するのである。使命遂行の義務を怠る者、その履行を拒絶する者の全部は主によつて悉く記憶さる、何故なれば主は之のためにその受膏者たちを教へ照らし給ふたからである。「汝死地に曳かれ行く者を救へ。滅亡によるめき行く者を救はざる勿れ。汝われ等之を知らずと言ふとも心をはかる者之を曉らざらんや。汝のたましひを護る者これを知らざらんや。彼は各人の行爲によりて人に報ゆべし」(箴言廿四章十一、十二節)。「眞實の證者は人の生命を救ふ。嘘言を吐く者は偽り人なり」(箴言十四章廿五節)。

避

難

此の避難の準備がイスラエル人と共に亦「異邦人、寄寓れる者」等の爲にも設けられてあると云ふ事は、エホバの御仁慈が神の組織制度の外部の者にまでも及び、彼等が神の組織制度と共働することによつて安然なる避難所を得る事を示すものである。然し斯く避難し得る者は、先づ初めに此の事に關することを告げ知らされ、然る後、エホバの示し給ふところに全く一致して歩む者でなければならぬ。神の律法によると、その殺人が過失であり、而して被害者に對して殺人者が何の殺意をも有してゐなかつた場合、會衆はその加害者と、被害者の近親者との間を審判し、加害者が「避難の邑」に送れ入るべき者

かどうかを決定する事となつてゐる。其の人は會衆の前に立ちて審判を受くるまで、其の時の祭司の長の死ぬるまで其の邑に住み居るべし。然る後その人を殺せる者は己の邑に歸り行きて、其の家に至り、己が逃げ出し邑に住むべし」(ヨシヤ書廿三章六節)。

若し其の殺人が害意なき全くの過失である事が判明したならば、その加害者は避難の邑に於て保護を受け、その時の祭司長の死ぬる時まで其處に留まる事となつてゐた。假令會衆が其の殺人者を無罪と認めて避難の邑に於て保護を受くる資格ありと裁斷したにしてもそれだけでは未だ充分でなく、その殺人者は必ずその避難の邑に行きて、祭司長が代るまで其處に居留せなければならぬ。祭司長の死と共に其の殺人者は安然に己が邑に歸り行く事が出来た。此の事は即ち、神の組織制度の中に安然なる避難所を與へられたるヨナダブ級の者は、エヒウよりも大なる「イエス・キリストと共に」戦車」即ち神の組織制度の中に居留せしめ、心より喜んで主と共に歩み、地上にある祭司級の任務が完了するまで「エホバの證者」と共働しなければならぬ事を意味してゐるのである。斯うして之等の善意者は「全能の神の大なる戦の日」を通じて神の保護を受け、既に屢々示せるところの「現在生存する多數は決して死することなし」の級となりて永久に地上で生存するのである。

主イエス・キリストは偉大なる祭司長に在す。而して神の王室の忠信なる成員は祭司職の成員として認められるのである。(黙示録一章六節。廿六章六節。メテロ前書二章五―九節)。神の聖靈の膏は此の「末の日」に於

て「エホバの證者」の全部の上に特に注がれた。遺残者は斯くして「王なる祭司職」の成員とされたのである。

此の「全ての肉の上に聖靈を注ぐ事」は、主イエスが神の宮に臨まれた時以後に成就を見た。爾來「若者」即ち神の祭司職を形成する者は、己等に關する神の御目的の異象を受けた。(ヨエル書二章廿八、廿九節)。今はヨナダブ級の者が其の姿を出現して、神の組織制度の中に逃れ入るべき時である。「王なる祭司」級の者即ち神より膏そそがれたる遺残者が地上に在りて神の國の福音の宣明を續ける限りヨナダブ級は之と共に共働し、その證言の事業を援助支持しなければならぬ。然らざり限り彼等は「大復讐者」の手に陥るのである。

イスラエル人に向つて與へられたる律法の全部は末の日に發生を見んとする更に大なる事の前影であると云ふ事を確と記憶し置くべきである。(ヘブル書十章一節)。過失殺人者は「避難の邑」の廓内とその周圍の「郊地」内に於てのみ保護を受ける事となつてゐた。(民數記略卅五章二一、二五節)。若し「仇討つ者」が此の境界線以外の處にその敵と相見し殺し殺す事が出來るのである。「然ど人を殺しし者その避難の邑の境を出たらんに、仇討ちする者其の避難の邑の境の外にて之に遇ふことありて仇討ちする者即ち其の人を殺しし者を殺すことあるとも血を流せる罪あらじ」(民數記略卅五章廿六、廿七節)。

此の律法の豫言する準備は今日その成就を見てゐる。エホバは今、靈者の級に非ずして然も神を求むる地の善意者のために準備をなし給ふ。若し彼等が神の聖手より善き物を受けたる後に、神の御仁慈に慣れて神命の域外に我利的歩みをなし、賜はりしエホバの恩恵を輕んじて之を疎かになすならば、彼はエホバが彼のために備へ給ひし御保護の全部を失ふのである。彼は、サタンの組織制度の全滅すべきハルマゲドンの接迫せる事實を確信して之を感受し、その時に祭司職の全部が地上より取らるる事、而してヨナダブ級が常に神の側に固く立つたならばイエス・キリストを通じて神より永久の生命を賜はる事を斷えず感受してゐなければならぬ。一度び神の側に立ちて、神より賜はる善き物を味ひ、ヨナダブ級のために設け給ひし神の御慈愛の御準備を學び知る者は、最早サタンの組織制度に食を乞ひ求めつつ同時に神の御保護を受ける事は絶對不可能である。(エゼキエル書十八章廿四、廿六節)。

一度び神の側に避難して後、不義に歸り行く者は當然死すべし。エホバの大執行者キリストは斯かる者を誅し給ふ。而して主の御手は潔し、何故なればイエスはエホバの神命を執行し給ふからである。ハルマゲドンに於けるエホバの大屠殺を以て野蠻、不正、不義なりと批難し得る者は天地間に絶無なり。反て此の大屠殺は、人命の貴重を示す神の律法を證明するものである。エホバは其の豫言者を通じて此の警告の重要性に就て特に力説して斯く示し給ふ。「然るに人ラツパの音を聞きて自ら警めず、劍遂に臨みて其の人を失ふに至らば、其の血は其の人の首に歸すべし。彼ラツパの音を聞きて自ら警むる事をな

さざれば、其の血は己に歸すべし。然ど若し自ら警むることをなさば、其の生命を保つ事を得ん。我義人に、汝必ず生くべし、と言はん、彼その義を恃みて罪を犯さば其の義は悉く忘らるべし。其の犯せる罪の爲に彼は死ぬべし」(エゼキエル書卅三章四、五、十三節)。

「羊」

主は其の服従者に就て説明をなす場合屢々象徴的辭句を用ひ給ふ。その一に「綿羊」即ち羊があるが、此の獸は柔順にして素直である。主は幾度となく此の羊を用ひて、エホバとキリスト・イエスに服従する者に譬へられた。牧者と羊との關係が即ちそれである。イエスが教へ給ふたパレスチナ地方では、羊の群は常に牧者に導かれ、牧者の聲を知つて之に従つて行く。イエスは牧者に就て斯う告げ給ふた。「彼その羊を引き出す時は先に行くなり。羊彼の聲を知りて之に従ふ」(ヨハネ傳十章四節)。

エホバは神に歸順する者を導き、保護する大牧者に在す。「エホバは我が牧者なり。我乏しき事あらじ」(詩篇廿三篇一節)。キリスト・イエスは常に父エホバに服従し給ひ、絶対に従順なる「羊」として聖書の中に譬へられてゐる。(イザヤ書五十三章七節)。

エホバが其の選民イスラエルを埃及より引き出し給ふた時「己の民を羊の如くに引き出し、彼等を沙漠にて家畜の群の如くに導き給へり」(詩篇七十八篇五十二節)。イスラエル人の中の服従者は、神の選民の模範として、最後に王室の成員とされた。詩篇九十五篇七節。エホバはその愛子イエスを以て、神の王室の

成員となる者の全部に對する教導者となし、善き牧者とされた。主イエスは、主の召と命令に服従する「羊を遣はし給ふ。之等の者は「狼」に譬へられたるところの他の者の中に出て行くのであつて、キリスト・イエスは彼等を保護し給ふ。(マタイ傳十章十六節)。善き牧者イエスは己が眞の追隨者のために其の生命を與へ給ふた。イエス御自身は羊を生命に導き入るる「門」であり、「道」である。「我は門なり。若し人我より入らば救はれ、且出入をなして草を得べし。盜賊の來るは、盜まんとし、殺さんとし、滅さんとするの他なし。我が來るは羊をして生命を得、かつ豊ならしめん爲なり。我は善き牧者なり。善き牧者は羊の爲に生命を棄つ。我は善き牧者にて己の羊を知る。又己の羊に識らる」(ヨハネ傳十章九一、十四節)。

イエスは、忠實に主の御助に追隨してその忠節を立證する者に就て斯う云はれた。「我が羊は我が聲を聽く。我は彼等を識る。彼等我に従ひ、我彼等に永久の生命を與ふ。彼等は何時までも滅びず、亦之を我が手より奪ふ者なし」(ヨハネ傳十章廿七、廿八節)。主は斯く、エホバの神命に服して「善き牧者」イエス・キリストに隨ふ者等の上に細心の保護を與へ給ふ。

此の世の偽物「キリスト教會」では人々を偽り教へて、キリスト・イエスの自稱追隨者の全部は死後昇天し、此の外の者等は煉獄か若くは地獄の永劫の苦惱に落つるのであつて、天に行つた者以外には生命の希望が絶無であると告げてゐる。斯かる教へは神の聖言と全く逆行背反す。イエスは使徒等の如き忠信者を「羊」に譬へて後、更に地上に於ける柔順者を之等忠信者から區別して斯く告げ給ふた。「我は

此の檻にあらざる他の羊を有てり。彼等をも引き來らん。彼等我が聲を聞かん。遂に一の群、一の牧者となるべし』(ヨハネ傳十章十六節)。

此の「他の羊」とは即ち聖書の中に示されるところの「ヨナダブ級」の者にして、之等の者は神の御豫定の時に「善き牧者」キリスト・イエスを教導者とする神の組織制度の中に導き入れられる事となつてゐるのである。イエスは之等の柔順者に向つて告げ給ふ、「我誠に實に汝等に告げん。人若し我が言を守らば窮りなく死を見ざるべし」(ヨハネ傳八章五十一節)。「凡て生きて我を信する者は永遠に死ぬることなし。汝之を信するや」(ヨハネ傳十一章廿六節)。

聖書は明示して、エホバの天的組織制度の王室の成員となりて、キリスト・イエスと共に神の嗣子となる者の数は十四萬四千と豫定されてゐると教へてゐる。それと同時に聖書は又教へて、多數の人々が此の地上に永存し、キリストの支配下に成る神の國に於て神より無限の富を受けると示してゐる。今地上に生存しつゝある者は、神がその聖言の意義を明らかにして、眞理を探し求むる者の爲に神の大寶庫の扉を開き給ふ時に生れあはせてゐるのである。

以上の諸聖句は、聖書中に「ヨナダブ級」として示されてゐるところの神に對して善意を有する者が何者に該當するかを明らかに識別してゐる。之はその「額に記號を受けたる者」であり、「避難の邑」に逃れ入りて安然を得たる者であり、ノアの家族によつて豫表されたる者であり、「方舟」の中へ安然に避

難せる者であり、最後に神の組織制度の中に入れられて地上に祝福を嗣ぐところの「他の羊」級の者である。他の諸聖句は、此の級の者を種々異なつた名稱で現はしてゐる。神がその秘めし大なる富を準備し置き給ふのは即ち此の級の者の爲である。凡て理性を有する者は今日此の時、如何にせば、此の大なる富に參與し得るかを知らんと熱中す。此の驚くべき眞理を學び知り得る絶好機會は今人々の前に到來したのである。

第三章 富を得る道

エホバは全ての富の授與者に在し、キリスト・イエスは此の富の分配者に在す。「父は子を愛して、萬物をその手に授けたり」(ヨハネ傳三章卅五節)。エホバを知りて之に服従する者のみがイエス・キリストを通じて此の富を受けるのである。故にイエスは告げ給ふ「永久の生命とは、唯獨の眞の神なる汝と、其の遺ししイエス・キリストを知るこれなり」(ヨハネ傳十七章三節)。

多数の人々は生命の祝福を求めてゐるに拘らず邪導されて全く混亂状態に陥つてゐる。兎に角自分で正しいと信じた事を實行しざへすれば救はれる筈だ」と彼等は考へてゐるのである。然し之は全く誤つてゐる。神より富の祝福を受くる道は唯一あるのみであつて、それは神の定め給ふところの唯一の道である。然らばその道を發見する方法は如何。

正義を求むる者のために斯く記し置かる。「信仰なくば神を喜ばす事能はず。そは神に來る者は、神あるを信じ、且神は必ず己を求むる者に、報賞を賜ふ者なるを信すべければなり」(ヘブル書十一章六節)。

「信仰」とは何を意味するか。信仰とは、聖書中に明示されてあるエホバの御目的を學び知つて、神の此の聖言の御約束に絶対信頼する事を意味す。信仰は眞理の上に築かるべきであり、而して神の聖言は即ち眞理なる事を確信する事である。イエスは聖書に就て「汝の聖言は眞理なり」と明言されてゐる。聖書は「信仰」を定義して曰く、然れど信仰は希望の基にして、未だ見ざるものの確信なり」(ヘブル書十一章一節「Diabloty」)。信仰とは、我等が望む所の爲の固き基にして、未だ見ざる事の實現を必然なりとする確信である」(ヘブル書十一章一節「Weymouth 氏譯」)。

人は單なる妄想の上に己が確信を繋ぐ事は出來ぬ。絶対の事實と眞理を無視したる妄想の全部は無意義である。妄想に確信を繋ぎ得る者は狂人のみである。

人は悲みの伴はざる神の富を得ん事を願ひ求む。而して此の祝福の富を受くる希望を確保せんがためには、その希望を實現せしむるに足るところの理由を必要とすべく、而して其の理由は絶対確實なるものの上に築かれなければならぬ。此の希望の築かるべき基礎たるものが即ち信仰である。人は聖書の意味する眞の信仰を有つ前に先づ或る種の知識を有さなければならぬ。故に聖書は示す「然れば信仰は、(眞理の習得を) 聞くより出て、その聞くところは神の言(即ち眞理)によれるなり」(ロマ書十章十七節)。此の神の聖言による音信の眞理なる事を知る時に彼は、彼の希望に一致する眞實性と實證とを兼與ふるその音信に信頼する事が出来る。之ぞ即ち人が神の祝福を得んと待望し得る眞の理由である。

信仰を人間的意見の上に築いてはならぬ、何故なれば人間の全部は不完全であるからであり、又誰が眞理を語つてゐるかを識別する事が不可能であるからである。如何なる人の説く所も、それが神の聖言の上に築かれざる限りその全部は無價値である。不完全なる人間の言を信する事は、それは迷信であつて、信仰ではない。迷信の全部は必ず粉砕される事となつてゐる。眞の信仰を得んが爲には眞理に聴き、その聴ける眞理に固く信頼しなければならぬ。而して其の眞理の示す處に忠實に服従する時、其處には失敗が絶無である。神の眞理の聖言に信頼すると云ふ事は、即ち聖書に明示されあるエホバの御目的を信する事である。即ち斯く記さる、「凡て主の名を呼び求むる者は救はるべし。然れば未だ信ぜざるものを何て呼び求むることを得んや。未だ聞かざるものを何て信することを得んや。未だ宣ぶる者（眞理の言を宣べ傳ふる者）あらずば何て聞くことを得んや。若し遣されずば何て宣ぶることを得んや。録して、平和なる言を宣べ、また善きことを宣ぶる者の其の足は美はしきかな、とあるが如し」（ロマ書十章十三―十五節）徒らに自他の人間的意見や結論を宣ぶる者は、畢竟空言を語る者に過ぎない。徒らに人間の感情に訴へたり、感傷をそそる如き所謂「説教」をなす者は眞理を語つてゐるのではない。何故なれば眞理は冷静に而して嚴肅に受け容れらるべきものであるからである。此の故に神は眞理を求むる者に告げ給ふ、「いざ我等共に論らはん。汝等の罪は緋の如くなるも雪の如く白くなり、紅色の如く赤くとも羊の毛の如くにならん」（イザヤ書一、一八節）。「論らう」とは「理屈で論じ合はふ」と云ふ事で、即ち神の聖言を慎

重に研究する事を意味す。

此の故にエホバはその證者を遣して神の御目的を人々に告げ知らしめ給ふ。證者達は己等自身の意見を宣ぶるに非ずして聖書に明示されある眞理の音信を宣べ傳ふ。人は之を聴き、己自身を眞理に一致せしむる事によつて神に對する己が忠誠を立證す。之ぞ即ち眞の信仰である。

「教會」と呼ぶ人間的組織制度は己が勝手に教理教義を自製して、その形式主義に人々の聴き従はん事を勧め、又強制す。斯かるものは信仰ではない。「教師」は唯神エホバとキリスト・イエスあるのみにして、その眞の教へは唯聖書の中のみ明示されてある。聖書は眞理を求むる人間に對する眞の指針にして、人をして眞の道に歸せしむ。（テモテ後書三章十六、十七節）自他の人間的意見に信頼しつゝ同時に神の嘉納を受くる事は絶対に不可能である。人は神の聖言を知りて之に信頼し、之に服従する時にのみ神の嘉納を受けるのである。

此の故に聖書に就て或る種の知識を得る事は、信仰を有する上に絶対必要である。先づ最初に必要なるは「神を信する事」、即ち神の實在を信じ、この神は祝福の唯一源泉に在る事を信する事である。（ヘブル書十一章六節）。神は天地萬物を創造し給へる大永遠者に在る。神は聖書の示す如く「我有り」即ち永遠の實在者に在る。（出埃及記三章十四節）。「主よ、汝は古昔より世々我等の住所にて在せり。山未だ成り出ず、汝未だ地と世界とを造り給はざりし時永遠より永遠まで汝は神なり」（詩篇九十篇一、二節）。又斯く記さる。

「天を創造りて之を伸べ、地と其の上の産出物とを開き、其の上の民に呼吸を興へ、其の中を歩む者に靈を興へ給ふ神エホバ斯く言ひ給ふ」(イザヤ書四十二章五節)。

エホバは其の聖言即ち聖書を通じて御目的を人間に顯示し給ふ。其の諸々の聖名は何れも重要な意義を有す。神とは全能者、萬物の創造主を意味す。「エホバ」とは被造物に對する神の御目的を意味す。「全能の神」とはその御力の無限なるを意味す。「至上者」とは最高至上の權威者なる事を意味す。「父」とは生命の授與者なる事を意味す。神は我等の主イエス・キリストの父に在す、何故なればイエス・キリストは「神の創造の最初」であり、エホバより生命を受けたる「子」に在すからである。(默示録三章十四節。神は愛子イエス・キリストを任じて、その代理執行者、人類の救ひ主とされた)。

人は神エホバとその愛子イエス・キリストに就て或る種の知識を得る時に、更に進んで神と其の御目的に就て知らん事を願ふ。「エホバの聖名のための民」を選擧する事に關しての諸聖句は既に列擧した。之等諸聖句は、或る點に於て、永遠の生命を受くる者等の上にも等しく適用される事となつてゐる。故に「ヨナダブ」級即ち地の善意ある人々も亦之等諸聖句に就て知らなければならぬ。エホバの代辯者イエスは權威を以て斯く示し給ふ。「我は道なり、眞理なり、生命なり。人若し我に由らざれば父の所に行く事能はず」(ヨハネ傳十四章六節)。人は、信仰を有つ前に此の知識を得て之に信頼しなければならぬ。神はキリスト・イエスを通じて人類に對する救を準備し給ふ。之以外に人が救を得る道は絶無である。「此の

外別に救ある事無し。それは天下の人の中に我等の依り頼みて救はるべき他の名を賜はざればなり」(使徒行傳四章十二節)。イエスは又示し給ふ。「我を遣はしし父若し引かざれば人よく我に來るなし」(ヨハネ傳六章四十四節)。如何にすれば神エホバとの一致に入り得るかを知るは必要である。人はイエス・キリストを通じて神の備へ給ふ救の道と、之以外に救の道無なる事を學び知ることによつてイエス・キリストにまで引き行かる。永久の生命を無視して其處に祝福は絶無である。而して此の祝福はイエス・キリストを通じて神より興へられるのである。永久の生命は我等の主イエス・キリストを通じて賜はる神よりの賜物なり」(ロマ書六章廿三節)。此の故にイエスは告げ給ふ、「永久の生命とは神とキリストを知ることこれなり」(ヨハネ傳十七章三節)。

人よ、汝はエホバが眞の全能の神に在す事と、キリスト・イエスは神の愛子にして、父の聖意によりて木に懸りて死にて汝の爲に贖價を拂ひ給ひし事、このイエスを通じてのみ永久の生命を得る事を信するや。人よ、汝は聖書に示されある之等の眞理を信じ、全く之に信頼し得るや。若し然りとせば、エホバが人類の爲に備へ給ふ祝福を受けんが爲に必要な態度を示せ。然らばその態度とは如何。

獻身

神に對する善意を有する者として、神の聖意をなさん事を熱心に願ふ者となれ。神エホバに全き信頼を捧げ、其の聖意の絶對に正しきを知れ。完全なる人イエスは云はれた「神よ、我汝の聖意を行はんと

て来る（ヘブル書十章七節）。「我が神よ、我は聖意に従ふことを樂む。汝の法は我が心のうちにあり」（詩篇四十篇七、八節）。斯くイエスは神エホバに全く信頼し、喜んでその聖意を爲すべく契約された。此の契約こそ即ち献身である。神より恩恵を受けん事を願ふ者は何れも之と同じ道を歩まなければならぬ。即ちその人は主イエス・キリストを贖ひ主、救ひ主と信じ、神とイエス・キリストに依り頼むことによつて神の聖意をなす事を契約するのである。其の人に對する神の聖意は聖書の中に記さる。故に彼は聖書を學びて、神の聖意の何なるかを知らなければならぬ。

彼は、己が神の聖意をなすべく契約せる事を表明する證據を示すべきであつて、之によりて他の人々をして彼が神とキリスト・イエスの側に立つ者なる事を知らしむるのである。之に就て斯く記さる。「若し汝口にて主イエスを承認はし、又汝の心にて神の彼を死より甦らししを信せば救はるべし。それ人は心に信じて義とせられ、口に承認はして救はるるなり」（ロマ書十章九、十節）。

神の聖意をなすべく契約せる事を對外的に表明する事はその人にとつて必要である。多數の人々は「クリスチャン」を自稱すると雖も彼等は神とキリストの聖名を對外的に告白する事を耻づ。此の羞耻心そのものは即ち彼等が神の聖意をなすべく契約し居らざる事を立證す。「聖書に、凡て彼を信する者は辱しめられじと言へり」（ロマ書十章十一節）。何故に人々は此の祝福の唯一授與者の聖名を他の人々の前に告白するを耻とするのか。

パブテスマ

今日、ヨナダブル級の者は水による洗禮を受ける事を必要とするか。之は彼等が神の聖意をなすべく契約した事を表明する上に於て是非共必要である。之はその人の献身を對外的に表示するものである。

洗禮はアダムの叛逆より來りし罪を其の上から洗ひ去る爲ではない。人を此の罪より洗ひ潔むるものはイエスの犠牲あるのみである。（ヨハネ第一一章七、九節）。キリスト・イエスの血以外に罪を潔むるものは絶無である。（ヘブル書九章廿二節）。キリスト・イエスの血に己が信仰を立證する者のみが罪を潔められるのである。水による洗禮はその人が神の聖意をなすべく契約したる事を對外的に表明するものである。即ちその人がキリスト・イエスの血を信する事を立證する事となる。洗禮を受くべく水に入る事は、即ち彼が己の全部を神の聖手に委ねたる事を示すものであり、彼の謙遜なる服従を表象するものである。此の故に洗禮は献身者の全部にとつて必要である。

完全なる人イエスはヨルダン河畔にあつた洗禮者ヨハネに來て洗禮を受けん事を求められた。ヨハネは之を謝絶した、何故なればイエスは罪人に非ざる事をヨハネは知ると共に、彼は亦此の洗禮は罪ある人へのみ益あるものと諒解してゐたからである。イエスはその理由をヨハネに説明せず、唯斯う答へられた。「暫く許せ。如斯くすべての義しき事は我等盡すべきなり」（マタイ傳三章十五節）。イエスは完全に罪なく、聖く在した。イエスの洗禮は、イエスが父エホバの聖意をなすべく契約されたる事を對

外的に表明したるものであつた。

イエス水より上れる時、天より此の聲あるを人々は聴いた。又天より聲ありて、此は我が心に適ふ我が愛子なりと言へり。(マタイ傳三章十七節) 斯く神はそのイエスの従順を嘉納して、之を神の子として承認し給ふた。神とキリスト・イエスの側に固く立つ者は何れも己が獻身の事實を他の人々に表明する事を欲すると共に、又他の人々をして神に奉仕する事の重要な事を知らしめん事を願ふ。故に彼等は自ら洗禮を受ける事によつて己が獻身を對外的に立證するのである。水に入る事は即ち「我が我意は死んだ。今より後、我は神エホバの聖意をなす事を喜びとなす」と云ふを意味してゐる。

洗禮は全ての獻身者にとつて必要である。天界の祝福に與りて神の王室の成員となる者は、此の水による洗禮以外に更に重要な意義を有する他の洗禮を受けなければならぬ。此の洗禮に就て斯く記さる、「イエス・キリストに合はんとてバプテスマを受けし者は、即ち其の死に合はんとて之を受けしなるを汝等知らざるか。故に我等その死に合ふバプテスマによりて彼と共に葬らるるは、キリスト父の榮光に由りて死より甦らされし如く我等も新しき生命に歩むべきためなり。若し我等彼の死の狀に等しからば、亦彼の復活にも等しかるべし。我等の舊き人、彼と共に十字架に釘けらるるは罪の身滅りて今より罪に仕へざるがためなるを我等は知る」(ロマ書六章三・六節)。

之は水による洗禮を意味するに非ずして、イエス・キリストの死に合する洗禮を謂ふのである。

即ち忠信なる眞の追隨者は、キリスト・イエスの死にし如く死にて犠牲的の死を遂げ、その事によつて主イエスの如くに復活せしめられるのである。「ヨナダブ」級の者は此のイエス・キリストの死に合する洗禮とは全く無關係である。彼等の有する生命の希望は全然地上的である。天界と地上の何れを問はず永久の生命を受けんとする者は皆神の聖意をなすべく契約しなければならぬ。而して水による洗禮は此の契約の成立を表象してゐる。神の王室の成員たらんとする希望を以てイエスの御跡を追隨せんとする者のみがイエス・キリストの死に合する洗禮を受ける事となつてゐる。

イエスに向つて斯う尋ねた者がある、「師よ、律法の中に何れの誠命が大なる」(マタイ傳廿二章卅六節)。エホバの律法は絶對不變である云ふ事を記憶せよ。故にイエスの之に對する答は、天界と地上との何れを問はず永久の生命を得んとする人々にとつて重大なる關係がある。即ち曰く、「イエス答へけるは、汝心を盡し、精神を盡し、意志を盡して主なる汝の神を愛すべし。これ第一にして大なる誠命なり」(マタイ傳廿二章卅七、卅八節)。神の嘉納を受けん事を願ふ者は何れも此の「大なる誠命」を守らなければならぬ。然らば「愛」とは何ぞや。

之は單なる感情ではない。聖書の示す「愛」とはエホバに對する絶對無私的信服を意味してゐる。愛は我利心の正反對なるものである。「神は愛なり」と示さる。即ち神には我利心が絶無なる事を意味す。

神がその被造物に對する生命の授與者に在りて、被造物が神との一致に在りて、神に無私的の信服をなさなければならぬは當然である。神と偕に在る者は、如何なる事に於ても常に神が第一でなければならぬ。愛に階級の區別なし。神を愛する者は己が全部を以て神に信服すべきである。「精神」は愛情と動機との基座を象徴す。故に被造物の愛情は、己が創造主に對してのみ確立されるべきであつて、創造主と他の被造物に對して己が愛情を分配するが如き事はあつてはならぬ。神と被造物の何方を愛すべきかを決定しなければならぬ場合、神の嘉納を受けん事を願ふ人は、躊躇することなく神に對して己が全的の愛を獻ぐべきである。「意志」とはその生物の全部を動かすところの原動力である。「生物」とは「呼吸によつて生存する生物」を謂ふ。(創世記二章七節。即ち彼は己が全生命を以て神エホバを愛すべきである。)

「汝心を盡し……とある。『心』とは、何が神の聖意なるかと云ふ事をその被造物をして決定せしむる能力である。彼は神の聖意の何なるかを己が心で探り求め、之を決定したる時に喜び進んでそれを實行する事となるのである。故に神の最高の誠命とは、その被造物が己の全部を盡して神エホバに無私的の信服を獻げることである。此の誠命は被造物そのものの利益となるために與へらる。神の律法は示して、神を愛する者のみが神より富の祝福を受けると教へてゐる。故に神を愛する事は、その被造物自身にとつての益となるのであつて、之は神には何の利益をも與へないのである。之ぞ即ち被造物が神より豊かなる祝福を受け得る唯一の方法である。

然らばその人は、己が神と其の聖言を愛しつゝある事を如何にして自他に立證し得るか。之に就て聖書は斯く答ふ。「我等が喜び進んで神の誠命を守る事は、即ち神に對する我等の愛を立證するものなり」(ヨハネ第一書五章三節)。イエスと父エホバは常に全き一致を保ち給ふ。故にイエスを愛する者は即ち神エホバを愛することとなる。之ぞ即ち神の誠命である。(ヘブル書二章六節。ヨハネ第一書五章三節)。イエスは神の聖意をなすべく契約せる者に向つて告げ給ふ。「若し汝等我を愛するならば、我が誠命を守れ。我が誠命を有ちて之を守る者は、即ち我を愛するなり。我を愛する者は我が父に愛せらる。我も亦これを愛して彼に己を顯示すべし」(ヨハネ第一書四章十五、廿一節)。イエス・キリストはエホバの代理執行者に在り給ふ。故にイエスの命令は即ち神エホバの誠命である。此の故に神とキリストを愛する者は喜んで神とキリストの誠命を守るのである。(ヨハネ第一書四章廿四節)。

エホバは人間の我慾を満足する爲に救ひの道を備へ給はない、何故なれば斯かる事は人間に何の益をも與へないからである。神が人間のために備へ給ふ處は全く無私的なる愛に基くのである。「それ神はその生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり。こは凡て彼を信する者に減ぶることなくして永久の生命を受けしめんがためなり」(ヨハネ第一書三章十六節)。之ぞ即ち神が、キリストに在りて神を信じ、神に服従する人々のために備へ給ふ祝福の御準備である。「信する」と云ふ事は常に心の中で思念すると云ふ事を意味するに非ずして、之はキリスト・イエスの救ひ主なる事とエホバが生命の授與者に在りて事を知り、

此の眞理に絶対信頼し、正直に、熱心に神の聖意を實行する事を意味す。

エホバはその御祝福を如何なる被造物にも強制し給はない。神の祝福を受けんとする者は、神が人間のために定め給ふ方則に一致して歩むべきである。イエスは第二の誠命に就て斯う答へられた。「第二もまた之に同じ。己の如く汝の隣を愛すべし。凡ての律法と豫言者は此の二つの誠命に因れり」(マタイ傳廿二章廿九、四十節)。如何なる人と雖も己自身を書ふを欲せず。若し己が隣人即ち己と同じ人間を愛するならば、之を書ふ意志のなきは當然である。人はその「隣人」と正しく交らん事を願ふ。

イエスは亦斯う告げ給ふた。「汝等人に爲られんと思ふ如く人にも然せよ」(改譯ルカ傳六章卅一節)。神は神の嘉納を受くる者の守るべき方則を示して斯く告げ給ふ。「エホバの汝に求め給ふ事は唯正義を行ひ、憐憫を愛し、謙遜りて汝の神と偕に歩むことならずや」(ミカ書六章八節)。此等の誠命を守る者は神の嘉納を受く、人間は自家製の正義によつて歩いてはならぬ。心に責無き歩みは正し、然ど心に責を感じつつ尙我流の正義を固執する事は絶対に誤れり。人の良心は、神の聖言と一致する時に於てのみ初めて安全にして正し。

人よ、自家製正義によつて永久の生命を獲べしと自らを欺くこと勿れ。地上全人類はアダムの罪によつて罪の下に置かれたのである。エホバはその御仁慈と御憐憫とを働かして、人類の上から罪の結果なる不完全性を取り除く道を備へ給ふ。而して此の神の備へ給ふ道に従ふ者のみが此の救に入る事が出来る

るのである。神の祝福を受けんとするならば神の誠命に服従しなければならぬ。即ち斯く記さる、「此の故に一の罪(アダムの罪)より罪せらるる事の全ての人に及びし如く、一の義(イエスの義)より義とせられ、生命を得ることも全ての人に及びべし。それ一人の逆に由りて多く罪人とせられし如く、一人の順に由りて多く義とせらるべし」(ロマ書五章十八、十九節)。

アダムをして己の上にて死を到來せしめたるは彼自身の「逆」即ち不従順であつた。神の判決は彼アダム自身の死であつた。その判決の結果は爾後アダムの子孫なる全人類の上に及ぶ事となつた。アダムは己が子を生み出す以前に於て既に死の宣告下にありて死に向つて歩みつゝあり、従つて完全なる生命と生存權を己が子孫に傳へる事が出来なかつた。此の理由によつて地上全人類は皆「罪に生まれ」、「邪曲にありて孕まれ」たのである。不完全なる人間は、その不完全なる事によつて罪せらる。而して神には、不完全なる者を承認する事は不可能である。全人類は罪の中に生れ出たるが故に、若し其處に何等か生命への機會が備へられざる限り皆死に絶えなければならぬ事となつてゐる。此の生命への一機會こそ即ち神が備へ給ふ唯一の道にして、之以外に生命を得る道は絶無である。アダムの不従順によりて多くの人々が罪人とされた。そしてキリスト・イエスの死に至るまでの従順によりて多くの人はキリストを信じ、神の誠命を守る事によつて義とせられ、エホバの聖手に神の富を受くる者とされるのである。主イエス・キリストを信せず、神とキリストに服従せざる者は神の祝福を受くる事能はず。神の祝福を

受くる前に先づ信仰と服従とが必要である。人類の全部は罪の下に生れた。而して此の罪の下より脱し得る道は唯一つあるのみである。之に就て斯く示さる、「子を信する者は永久の生命を得、子に従はざる者は生命を見ることが得じ。且神の怒その上に留まらん」(ヨハネ傳三章卅六節)。此の「神の怒」とは、罪の故によりて神より離れたる罪人全部の上にある斷罪そのものを謂ふのである。此の「神の怒」の下より脱し得る唯一の道は即ちキリスト・イエスの血を信じて、神の誠命に服従する事である。此の道に歩む一の機會を與へられ乍ら之を拒絶する者は永久に生命を見る事能はず、引き續いて「神の怒」即ち斷罪の下に留まなければならぬ。贖價の犠牲は地上全人類に對して無條件で與へらるるにあらざして、之は唯神とキリストを信じ、神の聖言に服従する者のみに與へられる事が明白である。「人なるキリスト・イエスは萬人に代り、己を棄てて贖ひとなせり」(テモテ前書二章五、六節)。此の事は即ち贖價の利益は信する者のみに與へられる事を示すものである。

神の示し給ふ道を顧みずして、同時に救ひを得るは絶対に不可能である。不完全なる人間の教示に歩む者は必ず己自身苦難に遇ふべし。自家製正義によつて救を得んとするは愚者にも劣る白痴にして、其の最後は必ず一の者の滅亡たるべし。之に就て聖書は示す、「汝心を盡してエホバに依り頼め。己の聰明に頼ること勿れ。汝凡ての道にてエホバを認めよ、然ば汝の道を直くし給ふべし」(箴言三章五、六節)。之ぞ即ち人は己が見て正しとする所に依り頼むこと能はず、唯エホバとキリスト・イエスに頼る時に於て

のみ始めて正しき道に導かるべき事を明示してゐる。「己が道にエホバを認める」と云ふ事は、彼が神の聖書を熱心に探り、エホバの聖意に服従して、全榮光を神に歸する事を意味するのである。

主イエス・キリストを信ずると自稱しつゝ尙神エホバの聖意を知らざる者は決して安んではなない。彼は神の聖意を學び知りて之を行はなければならぬ。神の聖意を知らずして之を行ふ事は不可能である。此の理由によつて神は聖書とそれの正しき説明書を備へて人々を正しき道に導き教へ給ふのである。此の故に彼は神の聖書を正しく研究する事によつて神の御目的を學び知るべきである。故に神の人は云ふ、「汝の聖言は我が足の燈光、我が道の光なり」(詩篇百十九篇五節)。神は熱心に神の聖意を探り求むる者の爲に其の歩む道を明らかにし給ふ。斯くてその人は神の嘉納し給ふ道を歩む事が出来る。

斯く記さる、「地と其れに滿つるもの、世界とその中に住む者とは皆エホバの有なり」(詩篇廿四篇一節)。之は富の全部がエホバに屬する事を意味す。エホバは從順なる人々の住所として地を創造し給ふた。我地を造りて、其の上に人を創造せり。われ自らの手をもて天を伸べ、其の萬象を定めたり。エホバは天を創造し給へる者にして即ち神なり。また地をも造り成して之を固くし、徒らに之を創造し給はず。之を人の住所に造り給へり。エホバ斯く宣ふ。我はエホバなり。我の外に神あることなし」(イザヤ書四十五章二十八節)。神は地球を徒らに創造し給ふたのではない。地は永久に存續す。而して從順なる人々が此の地の上に永遠に住むに至るは之即ちエホバの聖意である。(傳道書一章四節)。

神とキリスト・イエスが人類の救ひ主に在す事を學び知りて、之に信服する者のみが、人類の爲に備へられし神の大なる富を受けんとするのである。不従順なる者の全部は永遠の滅亡に行く。今地にあつて「ヨナダブ」級の名稱で知られたる善意者は、貧窮より脱して永遠の富に入るのである。此の故に人が聖書に基いて神エホバの聖意を正しく學び知る事は最も重要事である。今地上には何故に斯くも甚しき貧窮が満つるのか。此の理由こそ人々の是非とも知らなければならぬ處であつて、然る後に人は、神が此の窮乏の全部を除き去り給ふ方法と、其の代りに幸福と永遠の平和とを全地に滿し給ふ御準備に就て學び知る事が出来るのである。

第四章 貧窮と死の原因

エホバは全能なる絶対無私者に在し給ふ。エホバは何故に此の甚しき窮乏と苦惱を人間の間放任し置き給ふのか。人類の間には何故に斯くも病氣や悲歎、悪事が充滿するのか。何故に人間は死ぬるか。之等窮乏と悲歎、死の全部に對する責任はエホバに歸すべきか。否、エホバは斯かる責任を決して自ら負ひ給はず。人は、聖書を正しく諒解する時に、之等の疑問に對する解答を得べく、而して神エホバとキリスト・イエスの御慈愛を悟り知るを得べし。

強慾は開闢以來最大の憎むべき犯罪を發せしむるに至つた。その結果はエホバの聖名に對する大なる誹謗侮辱となり、人類の上に窮乏と死を到來せしむる事となつたのである。此の大犯罪以後多數の年月が経過し、大犯罪者は己が罪跡を人々の前から巧みに隠蔽して了つた。神に對して善意を有する正義の欲求者のみが此の事實を諒解し得られるのである。

強慾とは他に屬するものを、己自身に獲得せんとする不當の慾望を謂ふのであつて、不正なる方法手

段によつて己が慾望を達成せんとする決意を意味す。之は極端なる我利心の發現である。他の所有物を不當に己自身の有になさんとする者は、その慾望を満足させる必要上、勢ひ誑詐と欺瞞を弄し、害意と悪意を以て他を害はんとするに至る。

此の大犯罪に關して聖書の記録する事實は斯うである。即ち、神はその全能全智、全愛を働かして己が聖名の榮光の爲に諸天を創造し、ロゴス、ケルビム、セラピム、天使、能力、權威等を創造された。『諸々の天は神の榮光を顯はし、穹蒼は其の御手のわざを示す。此の日、言を彼の日に傳へ、此の夜、知識を彼の夜におくる』(詩篇十九篇一、二節)。神は又地をも創造された。(創世記一章一節)。神の御豫定の時至るに及びて、地を開くべき人間が創造される事となつてゐた。そして此の人間の住所として、神はエデンと呼ばれたる地の一部を選び、其處に理想の住所なる樂園を造り給ふた。次で神は地中の諸要素を以てアダムと呼ばれたる完全なる人間を創造し、理智を有する一種の生物とされた。神は此の人間をエデンに置き、彼に對する神の律法及びその違反の場合に於ける刑罰に就て併せ教へ給ふた。(創世記二章七、十五、十七節)。神は亦人間の助手として一人の完全なる女を創造し、彼等に子孫繁殖の能力を與へられた。若し人間が神の律法を忠實に守つたならば彼は地を永久に所有し、地の富を豊かに享樂し得たる筈であつた。人間は『恐るべく奇しく造られた』と詩篇記者は記す。誠に『汝の御行爲は悉く奇し』である。(詩篇百廿九篇十四節)。人間は地上に於ける神の創造の中で最高峰を占むる者であつた。天界の一被造物にルシフ

ア一と呼ぶ一靈者があつた。神は彼を人間に對する見えざる監督とされた。彼に就て斯く記さる、『汝は膏そそがれしケルビムにして掩ふことをなせり。我汝を斯くなせしなり。汝神の聖き山にあり、又火の石の間を歩めり』(エゼキエル書廿八章十四節)。

「ケルビム」とは神の組織制度の中の一部署を擔任する者を謂ふ『掩ふ事をなせり』とは彼が或る部署を受持ちたる高位の者なりし事を明示してゐる。彼は神の『聖き山』(宇宙の組織制度)に於て高き役目を授けられてゐた。即ち彼は完全なる人間とその住所なるエデンを監督してゐたのである。『汝は神の園エデンに在りき。諸々の寶石、赤玉、黄玉、金剛石、黄緑の玉、葱珩、碧玉、青玉、紅玉、瑪瑙及び黄金汝を覆へり、汝の立てらるる日に手鼓と笛汝の爲に備へらる』(エゼキエル書廿八章十三節)。彼は美はしくも亦輝やかしき容姿を備へてゐた。『汝は其の立てられし日より終に汝の中に惡の見ゆるに至る迄はその行爲完全全かりき』(エゼキエル書廿八章十五節)。即ち彼は悪化して神に叛逆する迄は完全であつたのである。(Isaiah 63:10)

ルシフア一が墮落悪化して、不法者となつた時に、神は彼の名を改稱されたが、爾後彼は『老蛇』(欺瞞者)の意味す、『サタン』(敵對者)の意味す、『龍』(呑み食ふ者)の意味す、『惡魔』(誘惑者)の意味すの四名稱て呼ばれる事となつた。その悪化前に於ては、ルシフア一は「此の世の神」即ち大能の支配者であつたが、此の役目は彼の悪化と同時に褫奪されずして其のまゝにされてゐた。過去幾千年間、彼は此の世の「神」

即ち見えざる支配者として此の世を悪化した。(ヨハネ傳十二章卅一節、十四章卅節)。

彼の犯罪

ルシファアはエホバの神廷に現はれたる時、神の榮光を見、そして萬物がエホバを尊敬しつゝある豪華なる光景を目撃した。己自ら天使軍の上に一將たる者にして亦地上人間の上にも監督者たる事を知るルシファアは、義しき者の全部がエホバの聖前に捧ぐる崇拜と讚美と榮光を己自身に歸せしめん事を願つた。之は全く己が分際を超えたる大野望であつた。斯くて彼は強慾者と化した。彼は神を愛する事を止めた。彼は意識して神の律法を犯す者となつた。此の事に就て聖書は斯く記す、「あしたの子、ルシファア(明星)よ、如何にして天より墮ちしや。諸々の國を倒しし者よ、如何にして軋られて地に倒れしや。汝はさきに心の中に思へらく、われ天に昇り、我が位を神の星の上に擧げ、北の極なる集會の山に坐し、高き雲漢にのぼり、至上者の如くなるべしと。然ど汝は墓(陰府)に落され、坑の最下に入れられん」(イザヤ書十四章十二、十五節)。彼をして此の大罪を犯さしむるに至つた原因は即ち強慾心であつた。彼の最後に就て斯く記さる、「多くの水の傍に住み、多くの財寶を持てる者よ、汝の終り、汝の貪婪の限り來れり」(エレミヤ書五十一章十三節)。

神は完全なる人アダムに向つてその全き服従を求め給ふた。神は人間に向つて、山を動かす如き難事を求められたのではなくして、極めて些細な事、即ちエデンに生じた多くの果樹の中の或る一本の樹の

果實を食するを禁じられたるに過ぎなかつた。神は、神命に違反する場合の刑罰は死である旨を警告して置かれた。「汝之を食ふ日には必ず死ぬべければなり」(創世記二章十七節)。之に服従する事はアダムにとつて少しも難事ではなかつた。果實そのものが悪いのではなくして、悪いのは即ち神の律法を破る事そのことにあつたのである。

ルシファアは人間の監督者として、神に對する人間の義務の何なるかを知つてゐた。そして人間のために其の安然を護る事はルシファア自身の責任であつた。彼は他の凡ての犯罪者と同じく先づその心中に罪を發生せしめた。彼はその強慾心を達成するために欺瞞と誑詐を用ひた。此の故に彼は「老蛇」即ち欺瞞者と呼ばれるに至つた。(黙示録廿二章一、三節)。「蛇最も狡猾し」(創世記三章一節)。之は彼が狡猾にして奸智に長けたる欺瞞者なる事を意味す。彼は斯う考へた、人間が罪を犯した場合に若し神が人間を死に付されなかつたならば、それは神が嘘言者なる事を立證するものであり、此の事によつて神に對する全被造物の信頼心を破壊する事が出来る。亦若し其の場合神がアダムを殺して了はれたならば、それは即ち、地上に完全なる人間を有する事が神には不可能なる事を立證するものであつて、此の事によつても亦神に對する全被造物の信頼心を破壊して、其の結果エホバに當然屬する讚美と尊敬を己自身に歸せしむる事が出来る。

サタン即ち老蛇は此の奸計を實行するためにエバに近づいた。「神眞に汝等園の諸々の樹の果は食ふべ

からず、と言ひ給ひしや」(創世記三章一節)。エバは斯う答へた。「我等園の樹の果實を食ふ事を得。然ど園の中央にある樹の果實をば、神、汝等これを食ふべからず。又之に觸るべからず。恐くは汝等死なんと
言ひ給へり」(創世記三章二、三節)。此の時、サタンはエバの單純な信仰を嘲笑した事であらう。「蛇、婦に言ひけるは、汝等必ず死ぬる事あらじ。神汝等が之を食ふ日には、汝等の目開け、汝等神の如くなりて、善惡を知るに至るを知り給ふなり」と(創世記三章四、五節)。之は全く憎むべき嘘言であつた。エバは之に誘はれて神の律法を犯した。サタンは婦エバを欺いて、彼女を神より離反せしむる事に成功した。その時
アダムが来て、その出來事をエバより聞き、己自身もその禁せられたる樹の果實を食した。此の事は即ちアダムが神を愛してゐなかつた事を證明するものである。アダムは意識して罪を犯した。(テモテ前書二章十四節)。彼はエバをも愛さなかつた。何故なれば、若し彼がエバを愛してゐたならば、直ちに神の御前
に出でて御赦免を乞ひ求めたる筈である。アダムはエバが己より離れ去る事を知つてゐた。そして彼は己が樂みの爲に己も故意に罪を犯してエバと運命を共にしたのである。

アダムとエバは當然死を宣告されて、エデンより放逐された。(創世記三章十九、廿四節)。サタンの此の嘘言と惡事とは人類の上に死を到來せしむるに至つた。此の理由によつてイエスはサタン即ち惡魔を以て「彼は最初の殺人者であり、嘘言者である」と告げ給ふたのである。(ヨハネ傳八章四十四節)。爾後今日に至るまで、己が惡事を達成するために嘘言を弄する者の全部は、嘘言の父なる惡魔の道具となつたのである。

エデンに於ける食物は完全であつて、之は服従する者の生命を永久に支へる事が出來た。エデン以外の土地に産する食物は毒素を含有してゐた。エデンから放逐されたアダムとエバは漸次死に陥つて行つた。そしてその不快なる生涯の間に、彼等には子供が生れた。罪にあつた両親は當然完全なる子孫を生み出す事が出来なかつた。此の理由によつて地上人類の全部は遺傳的に罪人であり、時が來れば何れも皆死ななければならぬ事となつたのである。(ロマ書五章十二節。詩篇五十一篇五節)。エデンの時より今日まで
全人類の上に臨んだ病氣、悲嘆、貧窮、苦痛、犯罪の全部に對する責任は皆サタン即ち惡魔に歸すべきである。故意に他を苦しめ、掠め、壓迫する者の全部は皆サタンの道具である。

サタンに死の宣告

神はエデンに於てアダムに死を宣告された時、同時にサタンにも死を宣告して置かれた。(創世記三章十五節。イザヤ書十四章十四、廿節。エゼキエル書廿八章十八、十九節)。然らば何故に神はサタンを今日まで生かし置き、彼が人類の上に多くの苦痛を興ふるを放任し置き給ふのであるか。之に對する簡單なる答は斯うである。即ち、サタンは、全人類を神より離反せしめ、彼等をして神を呪詛せしめ得ると傲語した。神はサタンに、此の傲語暴言を立證するに必要なる充分の機會を興へ、同時に人間に向つて彼等が神に對する其の貞節を立證し得る機會を興へられたのである。
サタンは暴語して、「人間の全部はその最も逆境裡に置かれたる時は必ず神を呪詛すべし」と言つた。

は、悪しき者と善意を有する者との向つて一様に宣べ傳へられなければならぬ。(エゼキエル書三章十八・廿一節)。今はエホバがその證者をして御自身の聖名と御國を廣く全地に宣明せしめ給ふ時である。而して此の宣明の仕事が完了すると同時に、神はサタンとその追隨者の全部を撃滅してその最高至上の權力を顯示し給ふ。(イザヤ書四十三章十一・十二節、マタイ傳廿四章十四・廿一節)。善意を有する者即ち「ヨナダブ」級の者は何れも聖書と聖書解明の書物印刷物によつて眞理を學び知らされ、今成就しつゝある神の豫言を諒解しなければならぬ。神の眞理を以て人々を援助する者の全部は「我利心を有せざる者」(出埃及記十八章廿一節)でなければならぬ。人々よ、土地、財産、權力を欲求する人々と組織制度の全部より離れ遠ざかれ。何故なれば斯かる者は神の僕ではないからである。

サタンの組織制度

サタンの目的とするところは、神との勝負に勝利を得ん事にある。神はサタンをして思ふがままにその兇惡を行はしめて、之に干渉されなかつた。然し神はその御豫定の時至るに及びて、サタンの嘘言者にして凡ての惡事の主體なる事を立證し、それと共に御自身が眞實にして絶対に正しき事を證明し給ふのである。サタンはシナルの野に於て己が地的組織制度の建設を開始し、人々をして斯く云はしめた、「いざ邑と塔とを建て、其の塔の頂上を天に達らしめん、斯くして我等の名を掲げて全地の表に散る事を免がれんと」(創世記十一章四節)。

ニムロデは神よりも豪きものとされ、人々は彼に従ふのであつた。(創世記十章八・十節)。サタンは此の時此處で人間崇拜の宗教を始め出したのであつて、彼は之によつて人々をエホバより離反せしめんとした。爾後惡魔は己が組織制度の中に三種の部門を設けて、己が惡しき目的を達成せんと努むるに至つた。それは偽善的禮拜の形式を備ふる宗教と、物質的富を掻き集める商業と、少數者によつて權力を行使する政治の三部門であつた。古代バビロンは特に惡魔の宗教的權力を代表し、古代の埃及は特に商業的權力を、古代アツスリヤは特に政治的權力を代表した。(豫言二第六章を見よ)。

古代バビロンの時よりイスラエル民族編成の時まで地の諸國の全部は惡魔の宗教を行つた。神はイスラエルの子孫を埃及より救ひ出し、彼等に契約と律法を與へ、全能の神に對する眞の禮拜を之に教へ給ふた。(出埃及記廿章一・十節を見よ)。エホバが此の方法で交渉を保たれたる民族は唯此のイスラエル人のみであつた。(アモス書三章二節)。體て惡魔は此の民の上に手を伸ばし、イスラエル人は一の民族として神より離れて、バアル禮拜即ち惡魔の宗教に墮落し、その結果民族的に滅亡して了つた。(エゼキエル書廿一章廿四・廿七節)。イスラエル民族は一の模型であつた。そして此の民の上に發生せる出來事の全部は、今我等の住む此の「末の日」に於て發生する出來事を豫表したる前影であつたのである。イスラエル民族は、クリスチヤンの名を自稱する「キリスト國」制度に屬する諸國を特に豫表してゐた。イスラエル民族の中から取られたる極めて少數の者が神に對する忠誠を保ち、その貞節を立證して神の承認を受けた。その如

「キリスト國」制度と自稱クリスチヤンの中から極めて少數の者が取られて、神に對する貞節と忠誠を保つ事となつてゐる。イスラエル人の指導者即ち教職者と「群の長たち」は傲慢不遜となり、神の承認を得るよりも寧ろ人間の賞讃を博せん事を欲して、悪魔の手に陥つて了つた。「キリスト國」制度の指導者即ち司祭、牧師、司教、法王等の教職者と彼等の「群の長たち」とは「教會」と云ふ強力なる制度を組織し、傲慢不遜、自尊自大となつて、神の承認よりも寧ろ人間の承認と賞讃を受ける事を欲するに至つた。神の此の聖言は「肉に屬けるイスラエル」と「キリスト國」制度を自稱する現代的イスラエルの兩種の上に適用を見る。即ち曰く、「それ彼等は小さき者より大なる者に至るまで皆貪婪者なり。又豫言者より祭司に至るまで皆詭詐をなす者なればなり」(エレミヤ記六章十三節)。

聖書は司祭や牧師を「豫言者」の名で呼ぶ。之等の者は主イエス・キリストの御名によつて強大なる組織制度を造り、神の聖言を説き教ふると自稱するに拘らず其の實は人間製教理を教へて、人々を聖書の眞理の前に無知ならしむるのである。神は斯かる者に就て示し給ふ。「豫言者等は我が名をもて嘘偽を豫言せり。我は之を遣さず、之に命ぜず、之に言はず。彼等は嘘偽の黙示とト筈と虚しき事と、己の心の詐欺を汝等に豫言せり」(エレーミヤ記十四章十四節)。彼等は皆悪魔の僕にして、神の僕に非ず。「汝等身を獻げて僕となり、誰に従ふとも其の従ふところの僕たるを知らざるか。或ひは罪の僕とならば死に及び、或ひは、順の僕とならば義に及ばん」(ロマ書十六章十六節)。

此の事は人々を嘲笑せんが爲に語るに非ずして、唯眞理を卒直に告げ、善意ある人々をして眞理を知り、正義の道を歩ましめよとのエホバの神命に服して語るのである。我利的なる人間の教に盲従する事は、當然その人を死に導く。神とキリスト・イエスの教へに服従する事は即ち永久の生命を意味す。(ヨハネ傳十七章三節)。各人は之等二途の中何れを選ぶかを自ら決定すべきである。

エホバの組織制度

エホバの宇宙的組織制度は最初から存在してゐる。神は忠信なるアブラハムを以て、神の「首都制度」の育成を開始された。神はこれを用ひてサタンとその組織制度を撃滅し、忠信なる人類に祝福を與へ給ふのである。神はアブラハムに斯う告げ給ふた。「汝の裔によりて天下の民(服従する者)皆福祉を得べし」(創世記十二節三節。廿二章十八節)。即ちアブラハム神を信じ、其の信仰を義とせられたるが如し。此の故に信仰による者は、これアブラハムの子なりと汝等知るべし。且つ聖書既に信仰によりて神の異邦人を義とし給ふ事を豫め悟り、先づ福音をアブラハムに傳へて、諸國の民は汝によりて福祉を得んと言へり」(ガラテヤ書三章六―八節)。

アブラハムとサラとの間の獨り子はイサクであつた。神は此のイサクを犠牲の祭物として獻げよとアブラハムに命じ給ふた。(創世記廿二章二―十八節)。イサクを獻ぐる此の事は一の豫言的模圖であつた。その時、アブラハムは「父」即ち生命の授與者なるエホバを代表し、イサクは人間のために一の犠牲の祭物

として献げられたる神の獨り子イエスを代表した。此の實體的イサク即ちイエス・キリストを通じて、父なる神は地上の服従者に祝福を與へ給ふのである。(ロマ書九章七節。ガラテヤ書四章廿八節)。

キリスト・イエスは全人類のための贖ひ主であり、救ひ主であつて、その「體」の成員を以て成る組織制度即ち眞の「教會」の首位者に在す。人間の間で組織されてゐる所謂「教會」は神の教會に非ずして、之はサタンが人々を神より離反するに用ふる道具なるに過ぎない。神エホバはイエスを死より甦らされた。また一切のものを彼の足の下に置き、また彼を一切の者の上に首となし、之を教會に賜ひて其の首となせり。教會は彼の體なり。萬物をもて萬物に満たしむる者の満てるどころなり。(エペソ書一章九-廿三節)。「教會は彼の體にして、彼は其の首なり。彼は元始にして凡ての事につき長とならんために死の中より最初に生れし者なり」(コロサイ書一章十八節)。ベンテコステの日以後、神はキリスト・イエスを通じて眞の教會即ちキリストの「體」の成員十四萬四千人を選択してゐられた。斯く選ばれたる者は神エホバの聖名の爲に證者となるのである。

制限されたる時

西紀前六〇六年、神はイスラエル民族を放棄してはれた。此の時からサタンは全地諸國の上に「神」即ち見えざる支配者となつた。神は、サタンが無干渉で自由に全地諸國を支配する一の期間を制限して置かれた。此の期間は二千五百年間であつて、之は一九一四年に終つた。イエスの豫言されし如く

此の一九一四年にサタンの支配期間は終結を見、その終結の實證として直ちに世界大戰が勃發した。(マタイ傳廿四章三十五節)。「然れども我わが王を我が聖きシオンの山に立てたり」(詩篇二章六節)とのエホバの豫言の成就せるは即ち此の一九一四年であつた。此の時に就て又斯く記さる、「エホバは汝の權力の杖(支配權)をシオンより突き出さしめ給はん」(詩篇百十篇二節)。また左の豫言も一九一四年よりその成就を開始した。「今在し、昔在す全能の主たる神よ、我等感謝す。汝既に大なる權を執りて政事を施し給ふに因る。諸々の國の民怒りを懷けり。汝の怒りも亦至れり。且死にし者を審判して、汝の僕なる豫言者及び聖徒並びに大と小との別ちなく其の名を畏るる者に賞を與へ、地を滅ぼす者を滅ぼし給ふ時既に至れり」(黙示録十一章十七、十八節)。

天に異象

エホバに信服せる者等に或る眞理を顯示すべき神の御豫定の時が到來した。そして「神の宮天に開け」たる一九一八年以後、忠信者は黙示録十二章一-五節に記されある「天に現はれたる二つの大なる異象」の意義を諒解する事を許された。此の豫言は、「日を着」たる一人の婦女が一人の「男兒」を生み、此の男兒が全地諸國の支配者となつた光景を示してゐる。此の婦女は神の宇宙的組織制度を代表す。(イザヤ書五十四章一-十二節)。此の「男兒」は神エホバの立て給へる王にして、正當なる全地の支配者キリスト・イエスを代表す。之が即ち第一の「異象」である。

第二の『異象』は、一の大なる赤き龍ありて、此の『婦女』の前に立ち、生れ出る『男児』を呑み食はんとする光景を示してゐる。此の『赤き龍』はサタンと彼の悪しき組織制度を表象し、之は今、キリストの支配下に成る神の國を撃滅せんと決意す。一九一四年キリスト・イエスが支配を開始すべく遣はさるると直ぐ天界に戦争起り、サタンの悪しき天軍とキリストの聖き天軍とが相戦つた。斯くて天に戦争起れり。ミカエル其の天使を率ひて龍と戦ふ。龍も亦その天使を率ひて之と戦ひしが、勝つこと能はず、且再び天に居ることを得ず、是に於て此の大なる龍即ち悪魔と呼ばれ、サタンと呼ばるる者、全世界の人を惑はす老蛇地に逐ひ下さる。其の天使も亦ともに逐ひ下されたり。(黙示録十二章七・九節)。

一九一四年以後、悲嘆と混乱とは愈々地上に増し加はるのみであつた。之はイエスの豫言されし如くである。(マタイ傳廿四章七、八節。貧窮と苦難、犯罪、死は地に激増を見た。各宗各派の所謂「教會」制度の司祭や牧師等は何れも聲を揃へて、人類の上に臨む現下の之等苦難の全部は神より來るもので、人々が「教會」に對する支持を怠るが故の刑罰であると人々に告げてゐる。司祭や牧師等の斯かる言辭は、心直き人々をして愈々神より離反せしめ、神を呪詛せしむるに至る。之ぞ即ち悪魔にとつては全く思ふ壺である。此の理由によつて之等司祭や牧師はサタンの糾然たる道具である事が明らかである。地上全人類の上に臨む苦難の如何なるものにも神エホバには責任が絶無である。然らば之等の苦難に對する責任は何者の上に歸すべきか。聖書は之に答へて示す、「地と海は禱ひなるかな。そは悪魔己が時の幾許も

無きを知り、大なる怒りを懷きて汝等の所に下ればなり。(黙示録十二章十二節)。

之ぞ即ち之等の苦難と窮乏と混乱に對する責任者はサタン自身なるを明白に立證するものである。神とサタンとの間に決すべき重大勝負の大決戦は今や最も近く迫る。全能の神の大なる日の戦ひなるハルマゲドンの大戦は戦はれざるべからず。悪魔は己が時の最も短きを知り、人々を神より離反せしめ、之を滅ぼす事によつて此の大決戦に勝たんと決意す。此の故に彼はその地的代表者なる司祭、牧師を用ひて之等苦難と混乱、惑迷、悲歎の責任者は神エホバなりと詐はり語らしむるのである。

エホバの『證者』は今普く行き巡りて人々に眞理を語り告ぐる事を命ぜらる。之ぞ神の『婦女』即ち組織制度の産む『子等』である。大戦直前に地にある證者たちは「婦女の裔の遺残者」と呼ばれてゐる。悪魔即ち老蛇とその代理者等が撃ち滅さんと企てつゝあるのは即ち之等の證者である。「龍は女を怒りて其の裔の遺残れる者、即ち神の誠命を守り、イエスの證言を有する者に戦闘を挑まんとて出て行けり」(改譯黙示録十二章十七節)。

此の眞理を人々に語り告げ、善意ある人々をして安然なる道に歩ましめよとはエホバの神命である。(マタイ傳廿四章十四節)。若し神の證者が此の神命に服せざる時は當然其の怠慢の理由によつて滅さる。(使徒行傳三章廿二、廿三節)。エホバの證者は神を愛し、神の眞理を愛す。此の故に彼等はエホバの神命に喜んで服従し、大なる反對の眞つ只中に於て勇敢に眞理を宣明するのである。眞理を愛する者の全部は、今、

之を他の人々に語り告げなければならぬ。その結果としてサタンが過去千幾百年間築き上げたる嘘言の正體は當然曝露さる。サタン所産の偽物キリスト教の全部は之によつて恐怖戰慄す。人々は今神の組織制度の中に於てのみ安然を見出すべし。此の理由によつて人々は今、過去に於て人々を救きたる嘘言の何なるかを知り、斯かる嘘言を教ふる者より離れ去り、而して眞理を學んで、正しき道を歩まなければならぬ。

第五章 嘘言

嘘言とは、眞理と事實とを聞き知るべき者に向つて語られたる嘘偽の言辭であつて、之は他の者に害を及ぼすを元則とす。他を欺き、害せんと目的を以て語られたる言辭は有害なる嘘言である。

神はルシファアを人間の監督官に任命し給ふた。ルシファアは神に忠誠を保ち、人間に眞理を告ぐる事を以て己が責任としてゐた。エバは眞理を知らなければならなかつた。ルシファアはエバに告げて、「禁斷の果實を食するも決して死することなく、之を食ふ事によつて反て彼女を智くならしむ」と言つた。エバは此の嘘言に欺かれた。此の嘘言の結果としてエバは死し、全人類の上に死を到來せしめた。故にルシファアがエバに告げた此の言は惡意ある有害なる嘘言であつた。

今「サタン」、「老蛇」として知られてゐるルシファアは凡ての嘘言の元祖であり、源泉である。彼は直ちに嘘言者となつた。彼の最初の嘘言は人を殺した。イエスはサタンに就て斯う云はれた「彼は最初より人を殺す者なり。又眞理に居らず。そは彼の中に眞理なければなり。彼が嘘言を云ふ時は己より出

して言ふなり。それは彼は嘘言者、また嘘言者の父なればなり」(ヨハネ傳八章四十四節)。「父」とは創案者又は生命の授與者を意味す。嘘言の全部はサタン即ち悪魔によつて案出され、嘘言者は凡て悪魔の子である。此の故にイエスは當時の猶太人の教職者に向つて斯う告げられた。「汝等は己が父なる悪魔より出づ。また其の父の慾を行ふことを好む」と。神より出でたる者は神の聖言を知つて之に服従す。此の故にサタンの嘘言を常に語る者は即ち悪魔の子なる事が明らかである。(ヨハネ傳八章四十四、四十七節)。

イエスの聖言は眞理と嘘言の區別を明示してゐる。イエスは或る人の間に答へて斯う告げられた。「我は之が爲に生れ、之が爲に世に來れり。それは眞理に就て證をなさんが爲なり。すべて眞理に屬する者は我が聲を聴く」(ヨハネ傳十八章三十七節)。「神は偽る事能はず」(テトス書一章二節)。ヘブル書六章十八節。エホバは眞實にして正しく、其の聖言は即ち眞理である。(ヨハネ傳十七章十七節)。此の故に聖言に逆行せる言説の全部は嘘言である。斯かる言説と教理の全部は有害なる嘘言である。人は宜しくその聞ける言の眞偽を確めなければならぬ。若しその言説と教理が神の聖言に反對するものならばそれは絶対の嘘言にして、悪魔より出でたるものである。それが嘘言と判明する時に人は直ちにそれより脱すべきである。此の場合己が教師の何者なるかは一切問題でない。而して斯かる嘘言を教ふる者、支持する者の運命は永久的滅亡である。(黙示録廿一章八、廿七節)。

神は嘘言者を嫌忌し給ふ。(箴言六章十六、十七節)。「嘘言の證人は罰を免がれず、嘘言を吐く者は滅ぶべし」(箴言十一、九節)。悪魔は嘘言を以て完全なる女エバを欺いた。彼は己が代理者を通じて、多くの不完全なる人々を欺く事は必然である。唯一の安然なる道は、神の聖言の眞理を知つて、之に従ひて歩み、聖言に逆行して組み立てられある人間製教理の全部から離れ遠ざかる事である。所謂「教會」制度に屬する者は、依然その中に留まりて聖書に逆行せる教理に従ふか、又はそれより離れて神の聖言の眞理に従ふかの何れかの一を選ばなければならぬ。之を選び取る時に試験は必ず其の人の上に臨む。人は宜しく眞理を知らしめられて、智慧と慰安の與へられん事を神に祈るべきである。

死

人間の教師は斯く云ふ、實際の死と云ふものはない。人はその所謂「死ぬ」時に、眞の生命に移るのであつて、その肉體は死ぬるにしても、彼の靈魂は永久に生きるのである」と。之は所謂「教會」制度の殆ど全部が教ふる教理である。斯かる教理は全くサタンの嘘言である。神は人間に告げ給ふた、「罪を犯す日のうちに汝は必ず死すべし」(創世記二章十七節)。嘘言者サタンは斯う云つた。「汝必ず死ぬる事あらじ」(創世記三章四節)。イエスは「サタンは嘘言者なり」(ヨハネ傳八章四十四節)と言はれた。人々は神エホバとサタンとの何れを信するか。「罪の價は死なり」(ロマ書六章廿三節)と記さる。若し死する事なくば人間は絶對不滅なる者にして、死する事能はざる者である。嘘言は他の嘘言の支持を必要とす。此の故に偽物「キリスト教」の中には靈魂不滅の偽教理が主張さる。

神は凡ての人間は即ち一個の「生物」(靈魂の字は誤譯なり)であると示し給ふ。人間は別に「靈魂」なるものを有してゐるのではない。「エホバ神、土の塵をもて人を造り、生命の氣息を其の鼻に吹き入れ給へり。人即ち生物(生涯は誤譯)となれり」(創世記二章七節)。之に見るも肉體と呼吸のみによつて一の「生物」が成立する事が明らかである。肉體から呼吸が離れた時に其の生物は死するのである。故に斯く記さる。「罪を犯せる靈魂(生物)は死ぬべし」(エゼキエル書十八章四節。ヤコブ書五章廿節。黙示録十六章三節)。人間は皆生物(靈魂と誤譯さる)そのものである。そしてその遺傳せる罪の理由によつて人間は皆死ぬるのである。「誰か生きて死を見ず、又己が靈魂(生物)を陰府(墓)より救ひたる者あらんや」(詩篇八十九篇四十八節)。今慎重に考へ見よ。天使も不滅ではない。何故なれば悪しき天使は皆、神によつて滅されるからである。(詩篇百四十五篇廿節)。惡魔も不滅ではない。何故なれば神はキリスト・イエスを通じて惡魔を必ず滅ぼし給ふ事となつてゐるからである。(ヘブル書二章十四節)。然らば不滅なる者は誰か。聖書は答へて言ふ、神は「唯獨り死なざる者」(テモテ前書六章十六節)と。神はイエスを死より甦らしめて、之に不滅性を與へ給ふた。イエスは再び死ぬる事能はざる者となつたのである。此の故に復活後のイエスは神性の不滅者である。(黙示録一章十八節)。エホバは亦、神の國に於てキリストに參與する十四萬四千人に此の神性の不滅性を與へ給ふ。之等以外の何者にも不滅性は與へられないのである。(黙示録二章十節。ロマ書二章七節。コリント前書十五章五十三節)。之等聖句の明示する處に見るも、人間が皆不滅の靈魂を所有すると云ふ教理は惡魔が人間を欺くために創

案せる絶対の嘘言なる事が明白である。

煉

獄

地上最大の偽物キリスト教制度なる羅馬法王教會制度は人々を欺き教へて、普通善人は死後昇天し、他は煉獄に行くか、永久の苛責苦惱に落ちると云ふ。而して死者は何れも己が爲せし事を意識してゐると云ふ。死者は全く無意識である事が明らかとなる時、煉獄の教理も亦サタンの創案にかかる有害なる教理である事が明らかとなる。

煉獄と地獄の永久苦惱、所謂「地獄の劫火」の教理は決して成立しない。死者は絶対に無意識である。「生ける者は其の死なん事を知る。然ど死ぬる者は何事をも知らず。また應報を受くることも重ねてあらず。其の憶えらるゝ事も遂に忘れらるるに至る。凡て汝の手に堪ふる事は力を盡して之を爲せ。そは汝の行かんところの陰府(墓)には工作も謀計も知識も智慧も有ること無ければなり」(傳道書九章五、十節)。「死者も幽寂とくに下れる者もヤハ(エホバ)を讀め頌ふることなし」(詩篇百五篇十七節)。之等の聖句にみるも死者が死後何處かで苦惱してゐる如き事無きは明白である。普通心直き人ならば、人間を死後永久苦惱の火で生き乍ら苦しめる如き神を愛すること能はざる筈である。人間は無知の獸すらも之を苦しめ惱ます事を好まない。永久苦惱の教理は、愛の神を以て、一の殘虐なる惡鬼羅刹と化せしむ。之ぞ即ち惡魔の願ふ所である。煉獄の教理も亦惡魔の創案にかかり、神エホバの聖名を誹謗して、人々をして神を煉

忌せしむるものである。
 煉獄の教理を教ふる者は、此の偽教理を支持する爲に唯一つの聖句を引用するが、然かも其の聖句は彼等の偽教理を少しも支持してゐない。イエスと共に木に懸けられたる盜賊に關する記録（ルカ傳廿三章卅九―四十三節）が即ちそれである。盜賊の一人は死の直前にイエスに向つて言つた、「主よ、御國に來らん時、我を憶ひ給へ。イエス答へけるは、誠に告げん、今日汝は我と偕に樂園にあるべし」（ルカ傳廿三章四十二、四十三節）。之を今原文による正しき翻譯に見ると斯うなる、「イエス答へけるは、今日誠に汝に告げん。汝は我と偕に樂園にあるべきか」（Botherman氏譯）。即ち「今日」の字の置き場所を誤つたのである。此の盜賊はイエスが神の膏そそぎ給ひし王なる事、イエスは將來に於て神の御國に來り給ふ事を知つて、其の時、主に記憶されん事を願つたのである。之に對してイエスは、「汝は我と偕に樂園にあるべし」と答へ給ふた。即ち「汝若し我を信じ、我が方に立たば、汝は我と偕に樂園にあるべし」と告げられたのである。若し此の盜賊が神の國に於て死より甦らされたる時、主イエス・キリストの側に立ち、主に服従するならば、彼は再生の歡喜と生命の富を受け、彼の住所は樂園、即ち美はしき地上たるべしと告げられたのである。「樂園」とはエデンの如き園を意味す。イエスは其の死せる日に直ちに御國に來り給はなかつた。イエスは死して三日間墓場にあつた。その三日間の終りに神はイエスを死より甦らし給ふた。更に其の四十日後イエスは昇天されたのであつて、それより約千八百年後にイエスは神の國に來り、

王座に立てられて、支配すべく神によつて遣はされたのである。（詩篇二篇六節。百十篇一、二節。默示録十一章十八節）
 此の盜賊は決して天に行かない、何故なれば彼に對する約束は、若し彼がキリスト・イエスの側にあるならば彼は樂園にあるべしとなつてゐるからである。此の盜賊はその死せる日に直ちに天又は樂園に行かなかつた。若しさうならば此の盜賊はイエスよりも前に天にあつた事となる。斯かる事は全く不合理である。此の盜賊は死して墓に行き、今も猶墓にあつて、約束の復活の時を待つてゐるのである。（ヨハネ傳五章廿八、廿九節）。故にイエスは彼に向つて、「今日（此の日、今）、汝に告げん、汝は我と偕に樂園にあるべきか」と言はれたのである。之に見るも此の聖句が煉獄の偽教理を少しも支持してゐない事が明白である。
 煉獄の教理は絶對の嘘言にして、之は全く有害である。「教會」制度に屬する多數の人々は邪導されて、彼等の死せる友は煉獄にあり、司祭と呼ぶ人々の代願によつて煉獄の苦惱から救はれると誤信してゐる。此の口實によつて一般の人々は司祭等に多額の金錢を捧取されてゐる。これ全く詐欺取財の悪行爲である。此の煉獄の偽教理は、神エホバの聖名を誹謗し、人々を神より離反せしむ。之即ち惡魔のなさんと欲するところである。
 眞理を知らずして死せる死者に尙望みありや。然り。その希望は全死者の復活にある。斯く記さる。「義者と不義者との復活あるべし」（改譯使徒行傳廿四章十五節）。「義に立て給ひし一人（イエス）によりて義をもて

世界を審判かんために日を定め、彼を死人の中より甦らせて、保證を萬人に與へ給へり」(改譯使徒行傳十章卅一節)。復活とは死者を生命に復歸せしむる事を意味す。若し死者が煉獄や地獄に於て苦惱の生存をなしてゐるとするならば斯かる者を復活せしむる事は不可能である。死者の復活は神の御約束に基いて絶対の事實である。之に見ても煉獄の教理がサタン所産の嘘言なる事が明らかである。

善人はその死と同時に昇天するか。否！ 何故なれば死者の復活はキリスト・イエスと神の國の到來するまでは決して實現を見ないからである。(テモテ後書四章一節)。忠信なる使徒も、イエス再臨の時に己が復活を得べしと宣言してゐる。(テモテ後書四章八節)。主イエス・キリストに忠信なる之等の者が、「第一の復活」に參與して、天界に於てエホバの王室を形成す。而して其の數は十四萬四千人と定められてある。之等の者以外の復活の希望は地上に於ける復活である。

三位一體

サタンが人々を神エホバより離反せしむる爲に創案したる今一つの嘘言は三位一體の教理である。之は一般「キリスト教」の牧師司祭によつて教へられてゐるものであつて、即ち「父なる神、子なる神、聖靈なる神の三位があつて、之等三位の神は一位であり、永久に同位、同等、同權である」と云ふ。之を正しく説明し得る者は絶無である。故に之は絶対の嘘言である。此の三位一體説は古代バビロンや埃及の神話や其の他の悪魔の宗教の間に有名なる教であつた。

若し此の教理に就て司祭や牧師に説明を求むるならば、彼等は必ず異口同音に斯く答ふ、之は人間の諒解する事能はざる一の神祕だ」と。此の教理は最初第四世紀頃に希臘人の司祭によつて「キリスト教會」制度に提唱された。人々をして此の教理に馴染ましむる爲に三頭一體神の偶像や、三角形様のものが説明に使用された。自稱智者等は此の不可解の教理を諒解せる如く装ひ、唯一の全能者の代りに三位一體神の妖怪を禮拜することによつて容易に悪魔の手中に陥つた。斯かる愚者に就て聖書は示す「其の思念を亂し、其の愚なる心暗くなれり。自ら智しと稱へて、愚なる者となり、朽ちてはざる神の榮光を變へて朽ち壞つべき人及び禽獸、昆蟲の像に似す」(ロマ書一章廿一―廿三節)。サタンの代理者の教ふる三位一體の偽教理は、キリスト・イエスの犠牲の祭物を通じて來る人類の救に對する神の御準備を無効とならしめんと企つるものであり、キリスト・イエスの血潮の價値を否定するものである。

萬物に生命を與ふる全能の神は唯一位にして、キリスト・イエスは神の子であり、イエスは創造の始めなる者として、他の萬物の創造に於てエホバの代理者たりし者であると聖書は明示す。エホバは人間に對して律法を與へて斯く示し給ふ「我は汝の神エホバなり……汝我が面の前に我の外何物をも神とすべからず。汝自己のために何の偶像をも彫むべからず。又上は天に在るもの、下は地にある者並びに地の下の水の中にある者の何の形狀をも造るべからず」(出埃及記廿章二―四節)。「我はエホバなり。是わが名なり」(我はエホバなり。我の外に神なし)(イザヤ書四十二章八節、四十五章五節)。「神即ち萬人の父一位なり」(エ

ペリ書四章六節。エホバは永遠の王に在して、神には始めなく終りなし。エホバは眞の神なり。彼は活ける神なり。永遠の王なり。其の怒りによりて地は震ふ。萬國は其の憤怒にあたる事能はず。(エレミヤ記十章十節、申命記卅三章廿七節)。

神エホバの子なるイエス・キリストは神の創造の始にして、「ロゴス」と呼ばれた。ロゴスは斯く告げ給ふ、「エホバ古昔其の御業をなし初め給へる前に、其の道の始めとして我を創造り給ひき」(後言八章廿二節)。神の創造の始めなるロゴスは、神によつて萬物の嗣子とされた。(エペソ書三章九節、ヘブル書一章一、二節)。キリスト・イエスの證言は之に一致してゐる。即ち曰く、「我は我が父の名によりて來れり」(ヨハネ傳五章四十三節)。「我が天より降りしは、己の意の任を行はん爲に非ず、我を遣はしし者の意のままを行はん爲なり」(ヨハネ傳六章廿八節)。「我が父は我より大なればなり」(ヨハネ傳十四章廿八節)。「キリストの首は神なり」(コリント前書十一章三節)。「我わが意を行ふことを求めず。我を遣はしし父の意を行ふことを求むればなり」(ヨハネ傳五章卅節)。「そは我は己より言ふに非ず。我を遣はしし父わが言ふべきこと、我が語るべき事を命じ給へるなり」(ヨハネ傳十二章四十九節)。イエスは其の地的任務を終つた時に、父なる神エホバに斯う祈られた。「父よ……汝の子汝の榮光を顯はさんが爲に、汝の子の榮を顯はし給へ。此の祈禱はヨハネ傳第十七章に記録されてあるが、若し父と子が同一者であるなれば、如何にしてイエスは己自身に祈る事が出来るか。

或る時イエスは斯う云はれた。「我と父とは一なり」(ヨハネ傳十章卅節)。之は別にイエスとエホバが同一者と云ふを意味するに非ずして、父と子とは常に一致して働く事を意味するのである。此の「一」に就てイエスは斯う父に祈られた。「我は唯彼等の爲にのみ祈らず、彼等の教へによりて我を信する者の爲にも祈るなり。こは皆一にならん爲なり。父よ、汝は我に居り、われ亦汝に居る。斯くの如く彼等も我等に居りて一にならんため、且世をして汝の我を遣はしし事を信せしめん爲なり」(ヨハネ傳十七章廿、廿一節)。神の子イエスは、人類のために一の贖價を備へんが爲に天より地に遣はされた。「盜賊の來るは盜まんとし、殺さんとし、滅ぼさんとするの他なし、我が來るは羊をして生命を得、且豊ならしめん爲なり。我は善き牧者にて己の羊を知る。又己の羊に知らる。父われを知る如く、我も父を知る。我羊のために生命を棄てん」(ヨハネ傳十章十、十一、十五節)。若し父と子が同一者であるならば、子が人類のためにその生命を與へる事は絶対に不可能である。三位一體の偽教理は人類のための贖價たるキリスト・イエスの血潮に對する信仰を破壊するものである。

「聖靈」とは一の神に非ずして、之は神エホバより發するところの肉眼には見えざる靈力の事である。聖なる神より發する靈力なるが故に「聖靈」である。三位一體の教理は聖書に絶対逆行するサタン所産の嘘言にして、之は神に對する人々の信仰を破壊し、人類の救ひに對する神の御準備を否認するものである。

曲變、意義顛倒、牽強附會、噓言、眞理の誤傳は、惡魔が人々を欺き、彼等をして神より離反せしむるために用ふる所の狡猾手段である。之の明白なる一實例に「磐」の問題がある。これは「教會を此の磐の上に立つべし」と云はれたイエスの御言の意義を故意に捻曲したるものである。

エホバ御自身の名稱の「磐」と云ふのがある。何故なればエホバは絶対不動の宇宙的大組織制度の永久の基礎に在すからである。「我はエホバの聖名を頌へ揚げん。エホバは磐に在して、其の御行爲は完全し」(申命記卅二章三、四節)。「エホバは救ひの磐に在す」(申命記卅二章十五節)。「我等の神の如き磐はあることなし」(サムエル前書二章二節)。「エホバは我が巖、我が救ひの角」(詩篇十八篇二節)。「我がたましひ」()は黙して唯神を待つ。我が救ひは神より出るなり。神こそは我が磐、我が救ひなれ。また我が高き槽にしあれば、我甚くは動かされじ」(詩篇六十二篇一、二節)。

エホバの首都制度の首位即ち基礎たる「隅の首石」はキリスト・イエスである。此のイエスは亦聖書の中で一の磐又は「貴き石」として示されてある。ダニエル書二章卅四—四十五節の豫言に、エホバによつて「山(エホバの宇宙的大組織制度)より切られて出でたる」一の石が大なる山(磐の堆積)となつて、全地を蔽ふた事が示されてあるが、此の「石」即ち山こそキリストの支配下に成る神の國を意味するのである。神の組織制度は「シオン」と呼ばる。キリスト・イエスは之の首位者なる「首石」に在し給ふ。「此の故

に神エホバ斯く言ひ給ふ。視よ、われシオンに一つの石を置きてその基となせり。之は試験を経たる石、貴き隅石、固く置きたる石なり。之に依り頼む者は慌つる事なし」(イザヤ卅八章十六節)。

王なるキリスト・イエスは「大なる磐」(イザヤ卅二章二節)と呼ばる。キリスト・イエスは「建築師に捨てられた後に、エホバの大組織制度の首位となつた首石」である。(詩篇百十八篇廿二、廿三節)。多くの聖句は何れも一致して此の事を示してゐる。此のキリスト・イエスは、モーセを模型とする「靈の磐」である。(コリント前書十章四節)。

豫言者の全部は、キリスト・イエスが来て正義をもて全地を支配し給ふ事を豫言してゐるが、之等の豫言はイエスが地に來りし以前に記されたものである。「キリスト」とは「神の膏そそぎ給へる王」、「神の首都制度の首位者」と云ふを意味す。イエスの弟子達は之等の豫言を憶へて居て、此の「キリスト」の來るを待望してゐた。イエスは御自身がそのキリストなる事を弟子達が知つてゐるか否かを試みられた。そして斯う尋ねられた。「汝等は我を言ひて誰となすか」ペテロは弟子達を代表して斯う答へた。「汝はキリスト、活ける神の子なり」(マタイ傳十六章十六節)。イエスはペテロの答の正確なる事と、また此の眞理はエホバによつて顯示された事を彼に告げられた。「ヨナの子シモン、汝は幸福なり。そは血肉汝に示せるに非ず。天に在す我が父なり。汝はペテロ(希臘語の字 Petros 即ち「磐」一石を意味す)なり。我が教會を此の磐(希臘語の字 Πέτρος 即ち「大なる磐」を意味す)の上に建つべし。陰府の門は之に勝つべからず」(マタイ傳十六章

十六一十八節)。

イエスは此の時に「ペテロよ、汝の上に我が教會を建つべし」とは云はれなかつた。古典希臘語ではペテロの名は Petros であるが、イエスは「我が教會を此の磐石 (Petra 即ち巖の山、大なる磐、基礎なる磐) の上に建つべし」(Kotherham 氏譯とその脚注を見よ) と告げられた。故に「此の磐石」はペテロには絶対無關係にして、之は神が御自身の首都制度に對する永遠の基礎として固く置え給へる神の受膏者キリスト・イエスのみに適用さるべきである。此の故に、イエス御自身が「此の磐石」なる事を弟子の心に確信せしむるために、その第廿節で「遂に其の弟子を戒めけるは、我をキリストと人に告ぐることを勿れ」(マタイ傳十六章廿節) と告げて置かれたのである。教會は使徒ペテロの上に築かれるに非ずして、「基礎なる磐石」キリスト・イエスの上に築かれる事には之に見るも明白である。

イエスの言はれし「我が教會」は即ち「活ける神の教會」(テモテ前書三章十五節) と同一であつて、之は地上の人間々にある如何なる組織制度とも絶対に無關係である。「教會」とは「神エホバの聖名のために諸國より召し出されたる一の民」を意味してゐるのであつて、之等の者は天界に於て神の王室の成員とされるのである。(黙示録廿二章四節)。「教會」は使徒ペテロの上に築かれるに非ずして、之はキリスト・イエスの上に建てられるのである。キリストの十二使徒は、十二の礎石として示されてゐる。然しキリスト自身は偉大なる「隅の首石」である。(黙示録廿一章十四節)。即ち斯く記さる。神は「彼(キリスト・イエス)を一切

の者の上に首となし、これを教會に賜ひて、其の首となせり。教會は彼の身體なり」(エペソ書一章廿二、廿三節)。「然れども今はキリスト・イエスに在れば、曩に遠ざかりし汝等、イエスの血によりて近づけり。それ彼に由りて我等二者は一の靈に在りて、父に近づく事を得るなり。是故に汝等は今より旅人に非ず、亦寄寓者に非ず、聖徒と同じ國、また神の家に屬する者なり。且汝等は使徒と豫言者の基の上に建てらる。イエス・キリスト自ら其の隅の首石となれり。全屋皆組み立てて彼の中にあり、漸々に増して、聖き宮主の中に成るなり。汝等も借に彼の中に建てられたり。これ靈によりて神の住み給ふところとなるべき爲なり」(エペソ書二章十三、十八、廿二節)。「教會は彼の身體にして、彼は其の首なり。彼は最初にして、凡ての事につき長とならん爲に死の中より最初に生れしものなり」(コロサイ書一章十八節)。

イエスが「此の磐石の上に」と云はれた時に、ペテロはそれがキリストを意味するものなる事を確實に知つてゐたのである。此の故にペテロは自ら斯く示す「汝等味ひて、主を仁慈ある者と知りたらんには斯くの如くすべし。主は人に捨てられ給へど神に選ばれたる貴き活ける石なり。汝等彼に來り、活ける石の如く建てられて、靈の家となり、亦聖き祭司となり、イエス・キリストに由りて神に喜ばるる靈の祭物を獻ぐべし。そは聖書に録して、我が選びしところの貴き隅の首石をシオンに置く。これを信する者は辱められじ、とあればなり。此の石、信する汝等には貴き物となり、信ぜざる者には工師に乗てられて、隅の首石となれる石となり、また踏く石、破ぐる磐となるなり。彼等は言を信ぜざるによりて之

に預く。此は彼等かく定められたるなり。汝等は選ばれたる族、王なる祭司、聖き民、神に属ける者なり。此は汝等をして召して暗黒より出し、其の異なる光に入れ給ひし者、己の徳を顯はさしめん爲に汝等をかくの如き者となし給へるなり」(マテロ前書二章三一九節)。

斯く聖書の明示するところに見るも、イエスの云はれし「此の磐」をイエス・キリスト以外の他の者に適用すべき理由は絶無である。此のイエスこそ誠にエホバより天地の全權を一任されたる神の代理執行者の長に在るのであつて、即ちエホバの組織制度の「首石」たる「磐」に在るのである。

嘘

言

イエスの此の御言は其の眞意義を全く曲變され、捻ぢ曲げられて、誤傳されたる極端なる嘘言となつて多くの人々を邪導、誤導した。サタン即ち悪魔は人々を神より離反せしむるの目的を以て牽強附會の嘘言を人々の心の中に植へ付けた。使徒等の死後、一の宗教制度は漸次其の姿を出現し來り、次第に人間の間に大なる權勢と勢力を得るに至つた。此の宗教制度は「クリスチヤン」と名附けられた。偶像邪教、悪魔の宗教特有の各種教理が所謂「キリスト教制度」の中に迂り込んで來た。自稱クリスチヤンの諸集會に於て野心家は傲慢不遜、嘲笑的となり、我慾の命ずるがままに諸集會を支配し始めた。彼等は諸集會の中で「教職階級」と呼ぶ一階級を造り出し、一方被支配階級を以て「平信徒」の名稱で呼んだ。然る後に司祭等は「教會」と呼ぶ制度を組織したが、之の中には一般の民衆は實際の意味に於て含ま

れてゐるのではなかつた。支配階級即ち教職階級は極めて少數者によつて形成され、一方「平信徒」の名稱で呼ばれてゐる多數の一般民衆は、此の支配階級なる教職者を物質的に支持しなければならぬ事となつてゐる。支配階級は己等の上に首位即ち「父」として一人間を祭り上げた。悪魔は人々の心の中に、此の首位者を權威附けるために聖書的支持の必要を感じしめた。そして上記マタイ傳十六章十六—十八節のイエスの御言を悪用せしむるに至つた。それは即ち、教會の基礎はイエス・キリストに非ずして、使徒・ペテロであり、キリスト・イエスは此の使徒・ペテロとその後繼者の上に教會を建てたる事、キリスト・イエスは使徒・ペテロを以て「クリスチヤン共和國」の首領たる大統領に任命された事、而してペテロの死後その後繼者たる一團の者が漸次選舉されて教會の首位即ち「父」となるのであると主張するに至つたのである。此の所謂「教會制度」を支配する幹部は「教權」と呼ばれてゐるが、此の制度の首位者の上には、「聖なる教皇、法王、羅馬の司教、イエス・キリストの代表者、聖ペテロの後繼者、使徒の君、最高教長、西部の長老、伊太利の主教、羅馬縣の大僧正、羅馬縣の大司教、法王市の元首」の名稱が附されてゐる。

上記、主イエスの聖言の意義を態々曲變するために多くの著名な記者が種々の曲筆を弄してゐる。左記は「Louay and Rheinisch」に基く「Haydock カトリック聖書」の註解にして、紐育の大司教ジョンの承認を受けたものである。

「我なんちに告げん。而して我が知られざる前に其の理由を告げん。(ヨハネ傳一章四十二節)。汝はペテロと呼ばれざるべからず。何故なれば汝は我が教會の基礎たるべき磐なればなり、之は固く建てらるべし。地獄の門(福リ)は之に勝つ事能はず。若し勝たば此の基礎(即ち汝と汝の後継者等)は顛覆さるべく、その基礎の上に建てられたる教會は顛覆さるべければなり。キリストは此處にてペテロに約束す、即ち教會の存続する限りペテロの後継者も絶えざるべく、彼等は最高の牧者にして之の君たるべし。而して之と全く矛盾撞着せる註釋が同一の聖書に示されてある。聖オーガスチンは數ヶ所に於て之等の言を説明して、「此の磐(即ちキリスト曰自身)の上に」又は「ペテロの告白せる此の磐の上に」と示してゐる。

此のオーガスチンは四三〇年に死んだ。そして此の註解は彼の生存中に記されたるものに相違ないが、後代の註解者は此の聖句をキリストに適用せずして、ペテロに適用するの滑稽を演じてゐるのである。亦他の一註解者は此の同じ聖句に就て斯う記してゐる。「我等の主が『汝はペテロなり』と此處で言はれたのは、シモンがキリストの追隨者の中に加へられたる時に、ペテロと云ふ新しき名を暗示されたのであつて(ヨハネ傳一章四十二節)、イエスは今、シモンの上に何故に此の新しき名稱が與へられたかの理由を明らかにし、即ちペテロにクリスチャン共和國の大統領たる光榮を授與されたのである。之は即ち古き律法に於て、神がアブラムを選んで、彼を強大なる一民族の父祖とせし時に彼の名をアブラムと改めら

れたのと同様である。…我等の主イエスは唯一の教會をペテロの上に築く事を喜ばれた。此の故にキリストの教會の礎石としてのペテロを承認しない教會は、神の所作として認められない事が明らかである。(一八七六年發行キボン著我等の父祖の信仰より)。

イエスの語られし「此の磐」に關する羅馬法王教權の解釋は、聖書中の本問題に關する他の部分と全く逆行矛盾してゐる。此の牽強附會と曲解はサタン即ち欺瞞者なる老蛇によつて創案され、彼の地的代理人なる教職者たちによつて宣傳されたのである。サタンは嘘言者の父である。而してサタンの此の曲解を支持して之を宣傳する者は、その意識すると否とに拘らず彼等は皆サタンの僕である、と聖書は示してゐる。(ロマ書十六章十六節)。之は眞理に絶對逆行する嘘言にして、人々を同じ人間に仕へしめ、斯くして彼等を神より離反せしむる目的を以て行はれつつある大なる奸策であつて、エホバの聖名の上に甚大なる誹謗を到來せしむるものである。

サタンの嘘言から羅馬法王教權が生れ出て、成長した。そして同じくサタンの此の嘘言から「聖父」なる一名稱が生れ出た。此の名稱は羅馬法王教權と呼ぶ一宗教制度の首長に與へられてある。最初の「聖父」がペテロであつて、ペテロの後に後継者があると自稱するのである。ペテロは如何なる場合に於ても己自身を「聖父」の名稱で呼ばなかつた。のみならず、イエスは其の弟子達に告げて「地に在る者を父と稱ふること勿れ。汝等の父は一人即ち天に在る者なり。また導師の稱を受くること勿れ。そは汝等

の導師は一人即ちキリストなり(マタイ傳廿三章一十節)と明らかに告げてゐられる。ペテロは主の聖言に服従した。そして彼が己自身を「父」の名稱で呼ばなかつた事は明らかである。然るに羅馬法王教權の職者たちはイエスの此の嚴命に反して己等自身を「父」、「教父」、「靈父」、「神父」の諸名稱で呼び、又彼等の首領を「聖父」の名で僭稱す。サタンは斯くして多くの人々を邪導し、人々をして人間同志の間で仕へしめ、己が暴言の遂行を企圖してゐるのである。

「聖父」なる名稱と職名の存在を理由づけるために、之等の者はペテロの後繼者なりとの偽教理を組み立てたのである。ペテロが後繼者を有したと教ふる聖句は聖書の中に絶無である。聖書は「羔羊の十二の使徒」(黙示録廿一章十四節)と云ふ。之等使徒の如何なる者にも其の後繼者なき事が明白である。神は其の聖意のままに成員を身體(即ち教會)の中に置き給ふ。人間や人間の團體の如何なる者と雖も之を己が勝手に變更する事は絶對不可能である。(コリント前書十二章十八節)。人間の集團に過ぎざるものが主イエス・キリストの使徒を勝手に任命する事の絶對不可能なるは當然である。主イエス・キリストがその使徒の後繼者を設け給はざる時、人間の間に投票を行つて「聖父」を選擧し、之を以て使徒ペテロの後繼者なりと自稱するは絶對の嘘偽である。

鍵

之と同じ場合に、イエスはペテロに斯う告げられた、「又われ天國の鍵(復恩)を汝に與へん。汝が地に

於て繋ぐことは天に於ても繋ぎ、汝が地に於て解く事は天に於ても解くべし」(マタイ傳十六章十九節)。イエス・キリストの此の聖言も亦羅馬法王教權の手で全く其の眞意義が捻ぢ曲げられてある。

聖書の中で「鍵」は秘められたる眞理を開いて、その意義を諒解する特權を表象してゐる。或る時、イエスは此の事を示すために「鍵」の字を使用した。當時のパリサイ人や律法の教師等はイスラエル人の教職階級を形成してゐた。人々に向つて神の律法を宣明することは之等教職者の特權であつた。彼等は神に對して不信にして、神の國を無視し、人々が神の御目的を諒解する好機を人々から奪ひ去つた。此の理由によつてイエスは彼等に向つて斯う告げられた。「汝等禍ひなるかな、教師よ、知識の鍵を奪ひて自ら入らず、且入らんとする者をも阻めり」(ルカ傳十一章五十二節)。之等不信なる猶太人が所有する筈であつた此の神の恩恵をイエスはペテロに委ね、「天國の鍵」を彼に與へられたのであつて、此の事は即ち、ペテロが神の御豫定の時に天國に關する諒解を與へられる事を意味してゐるのである。

天國は過去永らくの間に互つて人々の知る事能はざりし一の大なる奧義の秘密であつた。即ち斯く記さる、「天國は歴世歴代隠れたる奧義なりしが、今神の聖徒に顯はれたり」(コロサイ書一章廿六、廿七節)。「天國」とは天の王室を意味してゐるのであつて、之はイエス・キリストを「首」として、その「體」たる十四萬四千人を以て形成されるのである。四千餘年に互つて此の大眞理は隠れたる奧義であつた。イエスの弟子達は、イエスの昇天後ペンテコステの日に聖靈が降下するまでは此の奧義を諒解する事が出来

なかつた。使徒行傳第二章十四、十八節。イエスは在世當時、その弟子達に譬喩即ち隱喩を以て語られた。之等の聖言はマタイ傳第十三章に記録されてある。譬に非ざれば彼等に語り給はず、こは、我世の始めより隠されたる秘密を語り出さん、とある豫言に應はせん爲なり。何れかの時に此の奥義の意義を顯示する事は神の御目的であつた。此の故にイエスは、神の國の成育に關する奥義を最初に知る特權を有する者としてペテロを選びし旨を彼に告げ給ふたのである。イエスはペテロに之等の「鍵」(舊約)を與へられた。即ち之等の眞理を己自身とキリストにある兄弟たちのために開く特權を彼に與へられたのである。

此の「鍵」の字が複數になつてゐる事に注意すべきである。聖書の示す事實に基くと、此の「鍵」の數は二つであつた。其の第一は「教會」即ち「天國級」の者を猶太人の間から取らんとする神の御目的を彼等に示す事、其の第二は、此の「天國級」の者を「異邦人」即ち猶太人以外の諸國諸民の間から取らんとする神の御目的を宣明する事、以上。

ペテロは主より受けたる此の兩種の「鍵」を使用した。之はペテロに後繼者が與へられる事を意味するのでは斷じて無かつた。ペテロが己の後繼者を有したと教ふる聖書は絶無である。此の特權はペテロのみに與へられた。故に彼は神の御恵みによつて之等の奥義を開明する特權を行使したのである。今之を聖書の記録に基いて調べて見る。

ペテロ及び他の弟子達は、キリスト・イエスは在世中に猶太人を以て直ちに御國を建設されるのである

ると考へてゐた。此の事はイエス昇天の當日弟子達の發したる言葉によつて明らかである。彼等は斯う尋ねた。「主よ、汝今、國をイスラエルに復さんとするか、(使徒行傳一章六節)その時、イエスは答へて、弟子達は聖靈を受くる時までエルサレムに於て待つべき事、其の時に彼等は神の國の奥義を諒解すべき事を告げられた。其の時より十日後がペンテコステであつた。エルサレムに於てペテロが第一の鍵を受けたのは即ち此の時であつた。此の時に天國の奥義が聖靈によつて初めてペテロに示された。使徒行傳第二章にはペテロが兄弟等の前に立ち、イエス・キリストの死と其の復活の意義及び神の國完成の神業の開始されたる事を説明しつゝある光榮が示されてある。其の時、ペテロは神の聖靈の導きの下に人々に告げて、イエス・キリストはエホバの嘉納されたる神の愛子にして、彼等の久しく待望してゐた大メシヤ即ち王なる事、猶太人は此のイエスを木に懸けて殺害したが、神は彼を死より復活せしめ、之に膏そそぎて王となし給ひし事を宣明した。そして彼は斯う附け加へた。「此の故にイスラエルの全家よ、神は此のイエスを立てて主となし、キリストとなし、膏そそぎて王となし給へる事を確かに知れ」と。

此の時此處でペテロはイエス・キリストより委ねられたる第一の鍵を用ひて、天國の奥義を猶太人の前に開いたのである。然る後にペテロは人々に告げて、御國が建設されて聖き豫言者等の記せるところの御國に關する萬物の復興を見る時至るまで天はイエスを留め置くべきも、其の時至るに及びて神はイエス・キリストを再び遣はし給ふべき事を聲明した。(使徒行傳三章十一、廿一節)。

爾後三年間、使徒等は神の國の福音を猶太人のみに教へ説いた。然る後に主は他の鍵をペテロに授けて、此の天國の奧義を猶太人以外の人々即ち「異邦人」に顯示せしめ給ふた。當時ペテロはヨツバに在つた。主はペテロに、此の福音が異邦人にも傳へられなければならぬ事を教ふる一の異象を示し給ふた。それと同時に一異邦人なるコルネリヲは神に祈つてゐた。主は其の天使を遣はしてコルネリヲに示して、汝の祈願は神の御前に今聴き届けらる。汝使者をヨツバに遣はしてペテロを招け」と示された。(使徒行傳十章四―五節)。然る後、ペテロはコルネリヲに來た。コルネリヲは天使より受けたる異象をペテロに語り告げた。「ペテロを開きて曰ひけるは、我まことに神は偏らざる者にして、何れの國民にても神を敬ひ、義きを行ふ者は其の聖意に適ふと云ふ事を悟る」(使徒行傳十章廿四、廿五節)。

その後、ペテロは他の弟子達との會議席上に於て、神は始めて異邦人を顧み、彼等の間からエホバの聖名の爲に一の民を取りて猶太人の間から選り取られたる者等と共に、キリストの下に神の國を形成せしめ給ふ御目的の福音を異邦人に顯示し給へる旨を兄弟達に告げた。(使徒行傳十五章七―十八節)。之ぞ即ちペテロが主イエスより受けたる第二の鍵を使用して、異邦人に關する神の國の奧義を解明せる事を明示するものである。ペテロに後繼者の必要は絶無である。何故なれば彼は之等二つの鍵を完全に使用して、「天國級」を猶太人と異邦人の間から取らんとする神の御目的の解明を完了したからである。サタンは人の心を迷はして、彼等を神より離反せしむるために之等の嘘言と偽教理を傳へ、人々をしてペテロに

後繼者があるとか、教會の至上權が彼に與へられたとかの嘘偽を信ぜしめたのである。斯くしてサタンは偽物「キリスト教會」制度を用ひて多くの人々を邪導した。

羅馬法王教權はペテロの上に教會が築かれたとの嘘言を人々に教へたるのみならず、「われ天國の鍵を汝に與へん」とのイエス・キリストの聖言をも斯くの如く捻ぢ曲げたのである。羅馬法王教權に屬する有名なる一著述者は之に就て斯う註解した。「イエスがペテロに向つて『我汝に鍵を與へん』と言はれた時に、イエスは『信仰の要塞たる地的エルサレムなる我が教會を支配する最高至上權を汝に與へん。汝と汝の後繼者は永久に我が地的代表者たるべし』と云ふ事を意味されたのである」(一九〇四年發行、第七十八増大版「我等の父祖の信仰」より)。

「使徒ペテロの後繼者」なる辭句の聖書中に絶無なる事に注意すべきである。

キリスト・イエスが教會をペテロと彼の後繼者の上に建てられたと云ふ此の嘘言は、亦「法王は聖書を説明する時に絶対無過誤である」と云ふ大嘘言を生み出すに至つた。(上記「我等の父祖の信仰」第一一九、二〇頁)。此の大嘘言はペテロ自身の言によつて特に強く否定されてゐる。(改譯ペテロ後書一章廿節)。

「陰府の門」

イエスはペテロに斯う告げられた。「我が教會(十四、四千の石)を此の磐(キリスト、神の受膏者)の上に建つべし。陰府の門は之に勝つべからず」と。然らば此の「陰府の門」とは何か。「陰府」(改譯書には「黄

「泉」と譯して「よみ」と假名して居れり。又或る場合「地獄」とも解さる」とは死の状態即ち墓を意味し、一方「門」は死と墓に入る道の意味してゐる。アダムは己が犯せる罪のために死の宣告を受け、彼の子孫である人類は皆此の罪を遺傳して、全部が罪の中に生れ出た。斯くして「陰府の門」は全人類の前に常に開かれてあるであつて、如何なる人間も之に勝つ事は出来ぬのである。

神は人類を此の死と墓より救ひ出すために、イエスを立ててその贖ひ主、救ひ主とされた。イエスは彼を信じて服従する者をして滅ぶる事なく、生命を得しめんが爲に己が生命を與へ給ふた。詩篇第十六篇には、イエスは死して、陰府に行きしも、其處には止まられなかつたと云ふ事が記されてある。(使徒行傳第二章四一節二節)。キリスト・イエスは「教會」の首位であり、基である。故に陰府はイエスに勝つ事が出来なかつた。何故なれば神はイエスを死より甦らされたからである。(使徒行傳十章四節)。故にイエスは示し給ふ、「我は生ける者なり。前に死にし事あり。視よ、我は世々限りなく生きん。アメン。我は陰府と死との鍵を持って」(黙示録一章十八節)。イエス・キリストは死と陰府を完全に征服し給ふたのである。「鍵を持って」とイエスが言はれたのは、即ち人類を死と墓より解放する全權能がイエスに委ねられた事を意味す。イエスは神の王室を形成するところの忠信なる十四萬四千人に就て斯く示し給ふ、「幸福なるかな、聖なるかな。この人々に對して第二の死は權威を有たず」(改訂黙示録廿章六節見よ)。之に見ても「陰府」はキリストと其の體の成員即ち教會の上に權を有せざる事が明白である。之等の者は不滅の神性に復活さ

れるのであつて、再び死の危険に遭遇しないのである。(コリント前書十五章五十二一五十四節)。

イエス及び第一の復活と御國に參與する者たちに就て更に斯く記さる。それは彼(イエス)全ての敵を其の足の下に置く時までには王たらざるを得ざればなり。最後に滅ぼさる敵は死なり。此の朽つる者が朽ちざる者を衣、此の死ぬる者が死なざる者を衣し時、聖書に録して、死は勝に吞まれん、とあるに應ふべし。(コリント前書十五章廿五、廿六、五十四節)。

此の「陰府の門」なる字の意義も羅馬法王教權の詭辯家連中によつて又捻ぢ曲げられ、これは羅馬法王教權の難攻不落、絶對無敵なる状態を意味するものなるかの如くに曲變されてゐる。「我等の父祖の信仰」(第二二頁)。此の宗教的大政治制度の指導者たちは此の嘘偽の結論に基いて全地諸國の支配を強行せんと決意し、「陰府の門」は羅馬法王教會に對して全く無力であると誇稱してゐる。即ち言を換へて言ふと此の宗教的大政治制度の指導者等は、墓と陰府との間に契約を有してゐるから死と陰府は羅馬法王教權の上には全く無力であると云ふのである。然るに一方聖書は明示して、神は羅馬法王教權を怒りて必ず之を撃滅し給ふべしと教へてゐる。

マタイ傳十六章十六一十八節に記録されあるイエスの此の聖言の曲變は全くサタンの發明に成る嘘言の結果である。此の大嘘言は過去千幾百年間主張され、多數の人々は皆これに欺かれて來た。此の理由によつて羅馬法王教權は今、聖書と其の眞の解明の前に人々を無知ならしめ置かんと必死狂奔しつつあ

るのである。斯く欺かれて、尙此の嘘言に固執する頑迷者は必ず己の上に大なる損害と悲嘆を招来すべし。善意を以て眞理を探し求め、キリスト・イエスに頼り頼る者は充分に眞理を興へられて、之に随ひ歩む。眞理は何者の上にも強制される事なし。眞理を學び知るの特權は唯神より興へらるる大なる恵みの賜物である。

嘘言の數々

神の聖言は以下の諸教理の絶對嘘偽なる事を明示してゐる。即ち、死は無いと云ふ事、人間は皆不滅の靈魂を有してゐると云ふ事、死者の多數は煉獄の中で孤立無援の苦惱を續けてゐると云ふ事、之等の死者は司祭等の代願と祈禱によつて其の苦惱が滅せられ、短縮される事、此の故に人々は此の代願を頼むために司祭に金錢を支拂ふは正當なる事、神の教會は使徒ペテロの上に建てられたる事、使徒ペテロはその後繼者を有する事、使徒ペテロは最初の法王なる事、彼の後繼者は法王に順次選舉せられたる事、使徒ペテロの所謂「後繼者」は法王として罪を赦免する權力を有する事等、以上、羅馬法王教權の教ふる之等諸教理はサタンの發明になる絶對の嘘偽である、と聖書は證明してゐる。此の宗教的大政治制度は伊太利羅馬のヴァチカン市にその本據を有す。眞面目なる「カトリック大衆」は之等偽教理の發明に對しては全く責任を有してゐない。之等「カトリック大衆」は唯邪導されて、此の組織制度に無知の支援を興へてゐるに過ぎない。而して此の組織制度は「カトリック大衆」の膏血に肥え太つて愈々其

の強大を増し加へてゐるのである。

羅馬法王教權が全地諸國を支配せんと企てつゝある一の大政治的組織體なる事は一般の知悉するところである。此の教權は全地諸國に大公使、特別使節を派遣し、又法王自身は常に此の世の政治的諸問題に容喙してゐる。斯かるものは神の組織制度に非ず、亦キリスト・イエスの聖言に服従してゐるのではない。イエスは斯く示し給ふ「我が國は此の世の國に非ず」(ヨハネ傳十八章六節)。サタン即ち惡魔は「此の世の神」であつて、此の世はキリスト・イエスによつて撃ち滅される事となつてゐる。「暗黒の主」なるサタンと此の世の組織制度は共に滅されるのである。此の一事に見てもイエス・キリストは羅馬法王教權の設立に全く無關係なりし事が明らかである。

羅馬法王教權の指導者等は極めて傲慢不遜、自尊自大、狡猾嘲笑的であつて、其の内部の醜怪事實を隠蔽するに努力してゐる。エホバは彼等に此の事の必ずあるべきを豫知し、その豫言者をして斯く豫言せしめて置かれた。「己が謀計をエホバに深く隠さんとする者は禍ひなるかな。暗き中にありて事を行ひて言ふ、誰か我を見んや。誰か我を知らんやと。汝等は曲れり。いかで陶工師を見て土塊の如く思ふべけんや。造られし者は己を造れる者を指して、我を作れるに非ずと言ふを得んや。形造られたる器は、形造りし者をさして智慧無しと云ふを得んや」(イザヤ廿五章十五、十六節)。

過去千五百餘年間に互る此の羅馬法王教權の歴史は、此の制度の支配者たちが常に人々の手から聖書

を奪ひ取つてゐた事を明示してゐる。神を求めてその聖意をなさん事を願ふ神の民は「エルサレムに屬する者」として表象されてゐる。何故なれば神は此の邑の上にその聖名を置き給ふたからである。羅馬法王教權の支配者等は眞理を傳へんとする人々を嘲笑し、唯法王のみが聖書を教ふる全權威を保有すると偽稱す。彼等は死と墓と契約するが故に「陰府の門」は羅馬法王教權に勝つ事能はずと誇稱す。然と神は告げて、陰府と死との間に結べる彼等の契約も無効となり、此の邪惡制度は必ず撃滅さるべしと明示し給ふ。(イザヤ書廿八章十四、十八節)。此の組織制度はヘルマゲドンに於て完全に滅亡するのである。羅馬法王教權は神の聖言の眞意義を除き去り、之に自製の偽教理を附け加ふ。斯かる者に就てイエスは示し給ふ、「我この書の豫言の言を聞く者に證をなす。若し此の書の豫言の言に増し加ふる者あれば、神はこの書に録すところの災禍を以て之に加へん。若し此の書の豫言の言を削る者あれば、神これをして此の書に録すところの生命の樹の果と、聖き都とに與ることなからしむ。」(黙示録廿二章十八、十九節)。

羅馬法王教權はその自製の邪教理を以て諸國諸民を亂醉癡痺、全き痴呆とならしめた。神は羅馬法王教權及びサタンの全組織制度の上に「バビロン」なる一名稱を與へ給ふ。今、神とその御國に對して善意を有する者に向つて主は告げ給ふ、「我が民よ、汝等彼の罪に共に與り、また彼の災禍に共に遇ふことを免れんがため其の中を出づべし。」(黙示録十八章一、四節)。

第六章 「囚人」

エホバは牢獄を有し給はず、又何者をも監禁し給はず。エホバの證者は屢々惡魔と其の代理者の手によつて牢獄内に監禁されるが、此の時之等の忠信者は「エホバの俘囚人」の名で呼ばれる。之は即ち彼等がエホバの民なる事を意味す。牢獄は暗く、被監禁者を苦しめる場所である。死そのものを「牢獄」と呼ぶ事は出来ぬ、何故なれば死者は無意識にして苦しむ事なきが故である。牢獄は惡魔の所産である。神エホバの豫言に曰く、「我が扶くる我が僕、我が心喜ぶ我が撰人を視よ。我エホバ、公義をもて汝を召したり。我汝の手を執り、汝を護り、汝を民の契約とし、異邦人の光となし、而して盲者の眼を開き、俘囚人を牢獄より出し、暗黒に住める者を檻の中より出さしめん。」(イザヤ書四十二章一、七節)。

サタンは宗教制度を以て暗黒偽善の牢獄となし、此の中に多くの眞面目なる人々を監禁して苦しむ。エホバに選ばれたる僕に對する神命は、之等の俘囚人を牢獄より救ひ出すにある。

俘囚人とは他の者の手に縛られて、その自由を奪はれたる者を謂ふ。此の被監禁状態にある者は生存

してゐなければならぬ。何故なれば死者は囚人と呼ぶ事が出来ないからである。他の者の爲に己が眼を眞理の前に盲まされた者は、即ち無知の囚囚人である。暗黒に彷徨して己が行く道知らざる者は、行動の自由を有せざるが故に一の囚囚人である。サタンは「暗黒の權威」である。彼はその悪しき代理者と道具を用ひて人類を暗黒の中に監禁す。(コリント後書四章四一六節。エペソ書六章十二節。コロサイ書一章十三節。ヨハネ第一書五章十九節)。

上記イザヤの豫言は、イエス・キリストが審判を行ふ權威を持つて神の宮に臨み給ふた時よりその成就を開始した。此の故に此の「囚囚人」の中には左の者等が含まれてゐる。其の第一は、「エホバの王室」の成員とされた者、特にモルデカイとナオミによつて代表されし者と、エステルとルツによつて代表されたる者、即ち「遺残者」を形成する者の全部。その第二は、「ヨナダブ」級の者即ち「他の羊」級の者である。この結論は「囚囚人」に關する諸聖句に就て之より研究を進めるに従つて明瞭となる。神と契約を結べる者は其の契約によつて神に繋がる。然しサタンが暴力を以て彼等に迫り來る時、彼等はサタンを恐れ、己が責務を怠り、サタンの罠に陥る。エホバは彼等がサタンの囚囚人となるを放任し置き給ふ。彼等が己の被監禁状態と、何故に斯くなれるかの理由を自覺し、エホバに全く歸順してその救出を祈り求むる時に、神は彼等の叫びを聞きて之を救ひ出し給ふ。之に一致して斯く記さる。「我は苦しみ、且憂苦あり。神よ、願はくは汝の救ひ我を高きところに置かんことを。謙遜者は之を見て喜

べり。神を慕ふ者よ、汝等の心は生くべし。エホバは乏しき者の聲を聞き、その囚囚人を輕しめ給はざればなり」(詩篇六十九節廿九―卅三節)。此處に示された「囚囚人」は、神の契約の民特に己が責務怠慢のため敵によつて監禁され、主イエスが神の宮に臨み給へる時に救ひ出されて主の御許に集められたる「遺残者」を意味してゐる。彼等は神の子であり、敵に監禁されてゐた囚囚人であつた。

世界大戦中、地上にあつた神の聖徒は敵の手によつて死の危険の狀態に置かれた。一九一四年より始まつた世界大戦は「選ばれし者のために」一九一八年に突如中止された。之は彼等がエホバの聖名のために證言を進めんが爲であつた。(マタイ傳廿四―廿二節)。世界大戦中、地にある神の聖徒は苦み、その重荷の彼等の上より取り除かれん事を神に祈つた。こは囚囚人の嘆きを聞き、死に定まれる者を解き放ち」(詩篇百二篇廿節)。

何故に彼等はその牢獄より解放されん事を祈願したか。彼等は「エホバの聖名のための一民」として此の世より召し出された。事實と豫言は共に示して、彼等は神エホバの聖名に奉仕する爲に此の被監禁状態より解放せられん事を祈願したと教へてゐる。「人々のシオンにてエホバの聖名をあらはし、エルサレムにて其の頌美を顯はさん爲なり」(詩篇百二篇廿一節)。

而して此の豫言は、彼等の祈願の神に聞かれる時を定めてゐる。「エホバはシオンを築き、榮光をもて現はれ給へり。エホバは乏しき者の祈願を顧み、彼等の祈願を輕しめ給はざりき」(詩篇百二篇十六、十七節)。

神は彼等の祈願を斥けず、之を聞き給ふた。『エホバは乏しき者の聲を聞き、その囚囚人を輕しめ給はざりき』(詩篇六十九篇廿三節)。之等囚囚人は確信を以て斯く祈る。『神はシオンを救ひ、ユダの諸々の邑を建て給ふべければなり。彼等は其處に住み、且これを己が有とせん。其の僕の裔も亦これを嗣ぎ、其の聖名を愛しむ者其の中に住まん』(詩篇六十九篇廿五、廿六節)。

救ひ主

神エホバはキリスト・イエスを立てて、彼を神の民の指導者となし、指揮者、救ひ主に任命された。(イザヤ書五十五章四節)。今地上にありてキリスト・イエスの忠信なる追隨者を形成する者は、キリストの指導下にエホバの聖名のために證言をなすべき事を命ぜらる。彼等はエホバの『僕』を形成し、イザヤ書四十二章六、七節に示される如く『囚囚人』を牢獄より解放する使命を受く。悪魔は己が『囚囚人』の解放される事を好まず、寧ろ之等を滅さんとてその全力を盡す。故に此の囚囚人解放の仕事は惡魔側の妨害と抗爭の裡に行はる。神に善意を有する囚囚人が光輝を得て、サタンの牢獄より脱出せんが爲に眞理は今、神命に従つて宣明されざるべからず。

使命

神の『僕』の受けたる使命に曰く、『我汝を護りて民の契約とし、國(地)を起し、荒れすたれたる地をまた産業として彼等に嗣がしめん』(イザヤ書四十九章八節)。此の豫言は先づ第一に靈的イストラエルに適用さ

る。即ち先づ『遺殘者』に對する保證たるキリスト・イエスは、後に『遺殘者』と共に神の組織制度に來る『民』即ちイエスによつて示された『他の羊』級を形成する善意者に對する保證となり給ふ。(ゼカリヤ書八章廿一、廿三節。ヨハネ傳十章十六節を見よ)。神の聖名が全地に知らざるべき豫定の時が來た。而して忠信者はエホバの聖名のために其の證者とならなければならぬ。故にその使命は『地を起し』とあるのである。『遺殘者』は世界大戦中を通じて『異邦人』の蹂躪下にあつた。(撒示後十一章二節)『遺殘者』は解放されたる時にエホバの聖名のために『起ちて光を發つ』のであつた。(イザヤ書六十章一章。五十一、五十七節。五十二節二節)。

斯く記さる『汝』…ヤコブ(忠信なる遺殘者)の諸々の支族を起し…(イザヤ書四十九章六節)と。又斯く示さる『ユダの諸々の邑に就ては、重ねて建てらるべし。我その荒れ廢れたるところを舊に復さんと云ふ…』又クロス(キリストを意味す)に就ては、彼は我が牧者、凡て我が好む所を成らしむる者なりと言はん(イザヤ書四十四章廿六、廿八節)。神は之に就て又斯く示し給ふ、『其の日には、我(我が僕キリストによつて)ダビデの倒れたる幕屋を興し、其の破壞を修繕ひ、其の傾圮れたるを興し、古昔の日の如くに之を建て直すべし』(アモス書九章十一節)。「他の羊」なる地の善意者に就ては今「地の基」がエホバによつて置えられるのである。(イザヤ書五十一章十六節)。

神の選び給ひし『僕』キリストは今、管に「地を起す」のみならず「荒れ廢れたる地をまた産業とし

て彼等に嗣がしめん』(イザヤ書四十九章八節)との任務を有してゐる。此の豫言は先づ最初に、世界大戦中地を奪はれたる靈的イスラエルの上に適用を見る。即ち記さる。『汝の荒れ廢れたるところ、毀たれたる地』(イザヤ書四十九章十九節)。然る後に『彼等は義の樹、エホバの植え給ふ者、其の榮光を顯はす者と稱へられん』。而して豫言者は更に云ふ、『彼等は久しく荒れたる所を修繕ひ、上古より廢れたる處を起し、荒れたる邑々を重ねて新にし、代々廢れたるところを再び建つべし』(イザヤ書六十二、三、四節)。此の荒廢は世界大戦中になされた。神の民の建設が先づ最初に行はれた。然る後に『他の羊』(即ちヨナダブ族)のための仕事事が之に續いて行はれるのである。主イエスは此の級の者に向つて告げ給ふ、『我が父に恵まれる者よ、來りて創世より以來汝等のために備へられたる國を嗣げ』(マタイ傳廿五章卅四節)。

神の『僕』の受けし任務に就て更に云ふ、『我縛められたる者に、出てよ、と云ひ、暗黒に居る者に、現はれよ、と言はん。彼等は途すがら食ふ事をなし、諸々の禿なる山にも牧草を得べし』(イザヤ書四十九章九節)。

此處に示されある『縛められたる者』即ち『俘囚人』とは何者か。之等『俘囚人』は先づ最初に、モルデカイとナオミによつて豫表されたる『忠義にして智き僕』級の者(マタイ傳廿四章四十五節)及び後に牢獄より解放されて之と共に『遺残者』を形成せるルツ級即ちエステル級の上に適用され、然る後に『他の羊』級即ち『ヨナダブ』級の上に適用されるのである。之等の者は皆共に『バビロン』即ちサタンの組

織制度の中に監禁されてゐた。神の選び給ひし『僕』キリストは彼等に向つて順次『出てよ』と告げ給ふ。之は彼等が常に實際の牢獄より出て來る事のみならず、『バビロン』の名稱で呼ばれたるサタンの組織制度より出て來る事であつて、之はハルマゲドンの直前に行はれるのである。『汝等バビロンの中より逃げよ。カルデア人の地より出てよ。群の前に行くところの牡羊の如くせよ』(エレミヤ書五十一章八節)。「我が民よ、汝ら其の中より出て、各々エホバの烈しき聖怒を免れて其の生命を救へ」(エレミヤ書五十一章四十五節。同時にエレミヤ記五十一章六節。默示録十八章四節。コリント後書六章十七、十八節を見よ)。

之等の者は何れも皆暗黒の中にあつた。故に『僕』の受けし使命に云ふ、『暗黒に居る者に、顯はれよ』(イザヤ書四十九章九節)。之は即ち彼等が「サタンの組織制度と一致する者に非ざる事を己等自身で公けに宣言せよ」と云ふ事を意味してゐるのである。即ち彼等は、己等がサタンの牢獄制度より既に脱出せる事、己等は今エホバの側に立つ者なる事、己等は今エホバの聖名のために活ける證言をなす者なる事を公けに聲明しなければならぬのであつて、斯くして彼等は己が受けたる光を輝かさなければならぬ。(エペソ書五章八節)。斯く行ひて斷えずエホバに忠信なる奉仕を勵む者に就て斯く示さる。『彼等途すがら食ふ事をなし、諸々の禿なる山にも牧草を得べし』と。彼等は最早暗黒に坐せず、重ねて餓えず、エホバと其の大牧者キリストによつて養ひ導かれ行くのである。世界大戦中彼等の牧場は禿とされた。然ど神は今彼等に告げ給ふ、『われ河を禿の山に開かん』(イザヤ書四十一章十八節)。

神の組織制度に属する者は今神とその「聖き僕」キリスト・イエスによつて導かれ、慰められ、祝福される。彼等は俄えず、渴かず、又焼ける砂も熱き日も撃つ事なし。彼等を憐れむ者之を導きて、泉の傍に和かに導き給ふべければなり。『イザヤ書四十九章十節。此の豫言は黙示録七章十六節にも示されてあるが、之等は皆「大なる群」の上に適用されるのである。之に見るも「大なる群」は此のイザヤの豫言の中に含まれてゐる事が明らかである。而して之は常に彼等に適用されるのみならず、曾てバビロンの監禁から解放されて、神の組織制度の一部とされた者等にも適用されるのである。即ち之に就て斯く記さる。「視よ、人々或ひは遠方より來り、或ひは北、また西より來らん。或ひはまたシニムの地より來るべし。」

「天よ、歌へ。地よ、喜べ。諸々の山よ、聲を發して歌へ。エホバは其の民を慰め、其の苦しむ者を憐み給へばなり。然どシオンは言へり。エホバ我を棄て、主我を忘れ給へりと。婦その乳兒を忘れて、己の腹の子を憐まざることあらんや。假ひ彼等忘ることありとも我は汝等を忘ることなし。われ掌になんぢを彫刻めり。汝の石垣（城壁）は常に我が前にあり。汝の子等は急ぎ來り、汝を毀つ者、汝を荒す者は汝より出て去らん。汝目を擧げて環視せよ。之等のもの皆相集りて汝が許に來るべし。エホバ宜はく、我は活く。汝之等を皆身によそほして飾となし、新婦の帯の如くに之を纏ふべし。汝の荒れ且廢れたる處、毀たれたる地は此の後住ふ者多くして狭きを覺えん。汝を吞み盡しし者遙かに離れ去るべし。」

「古昔、別れたりし汝の子等は後の日、汝の耳のあたりにて語り合はん。曰く、此處は我がために狭し。汝外に行きて我に住むべき所を得しめよと。其の時、汝心の裏に云はん、誰か我が爲に之等の者を生みしや。われ子を失ひて獨り居り、且捕はれ、且漂流ひたり。誰か之を育てしや。視よ、我一人残されたり。之等は何處に居りしや。主エホバ言ひ給はく、視よ、我手を諸々の國に向ひて擧げ、旗を諸々の民に向ひて立てん。斯くて彼等は其の懷中に汝の子等を携へ、其の肩に汝の女等に乗せ來らん。諸々の王は汝の養父となり、其后妃は汝の乳母となり、彼等は其の面を地につけて汝に俯伏し、汝の足の塵を嘗め。而して汝は我がエホバなるを知り、我を待ち望む者の耻辱を蒙ること無きを知るならん。』(イザヤ書四十九章十二-十三節)。

エホバは、バビロンに在りてエホバの設け給ひし避難の道を探し求むる者に憐憫を示し給ふ。主がシオンを築き給ひし後、エホバの側に立つ者は、己等を教ふる者はエホバとキリスト・イエスのみなる事を深く感受し、投票によりて選舉されたる長老や、司祭、牧師等を以て最早己が教師、指導者としなないのである。『それは寶座の前にある羔羊彼等を養ひ、彼等を活ける水の源泉に導き、又神彼等の涙を其の目より拭ひ給ふべければなり』(黙示録七章十七節)。「イエス答へて曰ひけるは、汝若し神の賜物と、我に飲ませよと言ふ者の誰なるかを知らば、汝我に求めん。然ば活ける水を汝に與ふべし。我が與ふる水を飲む者は永遠に渴く事なし。且我が與ふる水は、其の中にて泉となり、湧き出て、永久の生命に至るべし。」

(ヨハネ傳四章十、十四節)。

エホバはシオンを忘れ給はず！ 即ち豫言者は言ふ、「昔、別れたりし汝の子等は後の日、汝の耳のあたりにて語り合はん。曰く、此處は我が爲に狭し。汝外に行きて、我に住むべき所を得しめよ」と(イザヤ書四十九章廿節)。之ぞ即ち多くの「子等」の「大なる群」がバビロンより出て來る事を示す。多くの人々は神に來る。而して生命を興ふる御國の果を彼等に携へ行くべき任務を受けたる「遺殘者」即ち「エホバの證者」は誠に祝福されたる者なるかな。解放されたる「俘囚人」は他の者等と共にエホバの聖名を宣明して、エホバの王と其の御國を宣べ傳へなければならぬ。

『上にありて權を有てる者』

『上にありて權を有てる者』に就ての誤解は、多くの人々をバビロンの俘囚人とならしめた。即ち記さる『上にありて權を有てる者』に凡て人々隨ふべし。それは神より出ざる權なく、凡そ有るところの權は、神の立て給ふ所なればなり。是故に權に逆ふ者は神の定に逆くなり。逆く者は自ら其の審判を受くべし。有司は惡き行の畏れなり。汝權を畏れざることを欲ふか。唯善を行へ(ロマ書十三章一―三節)。

此の聖言は地上諸國の政府やその支配權者を意味してゐるのではない。之は『召を蒙りて聖徒となれ』(ロマ書一章七節)者に向つて語られてあるであつて、他の如何なる者に向つても告げられてあるのではない。而して之等の者の上に『權を有てる者』とは神エホバとキリスト・イエスであつて、神にしても

その王室にしても共に天に屬する者である。此の世を支配する諸權は神より出でゐるのではない。イエスは明示して、『我が國は此の世の國に非ず』(ヨハネ傳十八章廿六節)と告げ給ふ。又イエスは示して、此の世の主即ち支配者はサタン即ち惡魔であり、御自身は此のサタンと全く無關係である事を明らかにし給ふた。(ヨハネ傳十二章廿一節、十四章卅節、コリント後書四章三、四節)。神に歸順する者は、神の律法に背反せざる場合に於てのみ此の世の法律に服従するのである。

イエスは弟子達に向つて、『カイザルの物をカイザル(此の世の俗權)に納め、神の物は神に納めよ』(ルカ傳廿章廿五節)と教へ給ふた。エホバが一の事を命じ給ふ時、地上の如何なる律法も之を阻止する事は出來ぬ、何故なれば神は最高至上の權威に在し、キリスト・イエスは神の代理執行者にしてエホバの『劍』あるからである。(申命記廿二章四十一節)。神は此の『劍』を以てサタンと彼の組織制度の上に審判を執行し給ふ。『彼(イエス・キリスト)は徒らに双(劍)を執らず。神の僕たれば惡を行ふ者に怒をもて報ゆる者なり』(ロマ書十三章四節)。此の世の諸國の法律の中に正しきものには従ふべし。然れど神の律法に反する法律は惡しきものなるが故にキリスト・イエスの追隨者は之に服する事は出來ないのである。

今一例を擧げて見る。米國の法律によると街道に自動車を走らす場合、彼は鑑札即ち許可を受けなければならぬ。之は神の律法に反するものならざるが故に至ての人は歡んで此の法律を守らなければならぬ。而して若し一州の法律によつて「戸別を訪問して神の福音を傳へる場合、汝、警察官憲より許可を

受けなければならぬ」と命令される場合、斯かる法律は神の律法に背反するものなるが故に之を守る事は出来ぬ。神は神と契約を結べる全部の者に向つて「神の國の福音を他の人々に傳達せよ」と特に命じ給ふ。キリスト・イエスもその追隨者に向つて此の事を特に命じられた。(イザヤ書四十二章十二節。マタイ傳廿四章十四節。十章五十一節。神とキリスト・イエスは「上にありて權を有てる者」である。而してこの神命に服せざる者の全部は必ず取り滅されるのである。(使徒行傳三章廿二、廿三節)。此の理由に基いて、使徒等は福音を宣べ傳へよとの故によつて此の世の役人に檢舉された時に斯う云つた。「人に従ふより神に従ふは爲すべきの事なり」(使徒行傳五章廿九節。四章十三、十九節)。自動車運轉のために許可の鑑札を受ける事は即ち「カイザルの物はカイザル(世俗權)に返す」事であり、戸別を訪問して神の國の福音を傳へる事は即ち「神のものは神に返す」事である。而して地上の諸權が聖徒の此の行動を阻止する事は絶対不可能である。

人々は此の「上にありて權を有てる者」が州市郡の役人であると誤信してゐるが故に、彼等は之を恐れて、勇敢に神の國の福音を宣明する事が出来ないのである。「此の世の神」サタンは此の誤信を人々に與へて、人々の神に服従するを妨げた。神を愛する者は今、此の制縛より脱して、神に歡喜の服従をなすのである。(ロマ書十三章五節)。

過去數年間、キリストの支配下に成る神の國の福音が廣く全地に宣べ傳へられ、多くの善意者が此の

福音に接した。然し之等善意者は、此の「上にありて權を有てる者」が此の世の世俗權を意味するものと誤信するが故に、役人たちを恐れて、神の國の福音を他の人々に傳達する事を躊躇した。彼等は教會制度の内や官廳の内に多くの不正不義の行はれつゝある現状を目撃して、此の憎むべき不正のために嘆き叫んでゐた。神は今、此の眞理の福音を之等善意者に傳へて、彼等に眞理を學び知らしめ、彼等をしてサタンの組織制度の重荷の下より脱して、神と其の御國の側に立たしめ給ふ。之ぞ即ち人々にとつて唯一の希望である。(マタイ傳十二章十八、廿一節)。

人々は諸國諸民に組織された。而して支配者も被支配者も共に神の聖言に無知なるためサタンの欺瞞に陥り、彼の牢獄の中に俘囚人となつた。聖書と各種實證は共に一致して示して、今、人々が神の光に照らされ、神は如何にしてサタンの牢獄の扉を開きて、神に對して善意を有する者を救ひ出し、彼等をして唯一の安然なる場所即ち神の組織制度の中に避難せしめ給ふかに就て學び知るべき時の到來せる事を立證してゐる。サタンは過去千幾百年間、羅馬法王教權を用ひて人々を暗黒の中に囚へて居た。遙かの昔、古代の人々によつて演じられた一の豫言的大戲曲は、善意を有する人々が如何にして暗黒と貧窮と失望の中に捕縛せられるに至りしかの理由と、神は如何にして彼等のために道を開き、彼等が歡喜してその大路を歩み、限りなき富に導かれ行くかを豫示したのである。

第七章　ペリシテ人

エホバはアブラハムをその故郷の地より携へ出し、見知らぬ土地に彼を導きて、その地を彼に與へんと約束された。(創世記十二章一七節)。その地は即ちカナンの地であつた。アブラハムとサラとの間にイサクが生れた。爾後、アブラハム、サラ、イサク及び彼等の子孫は數千年間に亙りて一の豫言的大戯曲の中に持ち役を演じ、神の國の生育を豫告した。數百年後、アブラハムの子孫は埃及に在り、神エホバはモーセとヨシユアの手によつて彼等を埃及より導き出し給ひ、彼等は神がアブラハムに與へんと約束されたカナンの地へ導かれて行つた。アブラハムの子孫は神の選民であつて、之は今日、エホバとキリストの側に立つ者を豫表した。イスラエル人(アブラハムの子孫の事)が約束の地に達した時に、其處には地中海沿岸に堅固なる城塞を築いて住んでゐたペリシテ人を發見した。ペリシテ人はイスラエル人を大ひに暴壓したが、神は御豫定の時にペリシテ人を撃滅して了はれた。ペリシテ人の全滅より遙か後にエホバは豫言者をして斯く記さしめ置かれた、『海邊に住める者及びケレテの國民は禍ひなるかな。ペリシテ人の國カ

ナンよ、エホバの言汝等を攻む。我汝を滅して、住む者無きに至らしむべし。(ゼバニヤ書二章五節)。

エホバは最初より全部の事を知悉し給ふ。神は世の始めより其全ての所作を知り給へり。(使徒行傳ト五章十八節)。サタンが強大なる組織制度を築いてエホバの聖名を侮辱誹謗し、神に服従する忠信者の上に暴行迫害を加ふる事を神は最初から知悉し給ふのであつた。神は此の事を、神の御豫定の時至るまでは絶対に諒解し得ざるやうに象徴的の辭句を以て豫言して置かれた。その御豫定の時は今到來した。神の眞理を知らん事を願ひ求むる人々は今神の光に照らされて此の祝福を受けるのである。所謂「カトリック大衆」の間には多くの眞面目なる人あり、彼等も等しく此の神の眞理を學び知る機會を與へらる。之等の人々は、今羅馬法王教權の教へつゝある偽教理そのものの製造に絶對無關係である。眞摯なる人々は眞理を學び知つて己が自由を得、正しき道に歩まん事を願ひ求む。眞理は神の聖言の中にのみ發見さる。大豫言者キリスト・イエスは今、サタンの牢獄の扉を破りて、盲者の眼を開き、善意を有する者等を輝く光の道に導き出し給ふ。

エホバは、サタンの世の終結が來り、神の王が王座に立てられて審判の爲に神の宮に臨み給ふ時に行ひ給ふ大撃滅破壊の御仕事を豫告する目的を以て、上記ゼバニヤの豫言を記述せしめて置かれた。此の驚くべき御仕事はエホバの聖名證明のためになされるのである。此の御仕事は、至上者エホバの聖名を誹謗侮辱せる諸々の敵の上に執行せらる。之等の敵は己が我利私慾のために意識して此の惡事をなした

るが故に「悪しき者」と聖書の中に呼ばれてゐる。「悪しき者は滅び、エホバの敵は牧場の榮の枯るるが如くに失せ、煙の如くに消え行かん」(詩篇廿七篇廿節)。此の敵は、神の受膏者たちが神との御國に就ての眞理を語るの故を以てエホバの忠信者の上に殘虐なる迫害を加へた。神を愛して之に奉仕する者が今、之等の敵がエホバの聖手によつて全滅に歸せしめられる事に就ての明らかなる知識を得べき豫定の時が到來した。之は「遺殘者」にとつて實に重要なるものであつて、彼等は此の事を知ることによつて慰められ、其の希望を愈々固くするのである。(ロマ書十五章四節)。「神は我が仇につきての願望を我に見せ給はん」(詩篇五十九篇十節)とは彼等に對する神の御約束である。「又我が眼は我が仇に就きて願へる事を見、我が耳は我等に逆らひて起り立つ惡をなす者に就きて願へることを聞きたり。義しき者は棕櫚の樹の如く榮へ、レバノンの香柏の如く育つべし」(詩篇九十二篇十一、十二節)。

エホバの忠信者等の切なる願ひは、エホバの聖名の證明のために、エホバの敵が全滅せん事である。今日此の時に就て斯く豫言する「それはエホバは凡ての患難より我を救ひ給へり。我が目は我が仇に就きての願望を見たり」(詩篇五十四篇七節)。又斯く記さる「神は其の敵の首を撃ち破り給はん。愈の中止まる者の髪多き顛頂を撃ち破り給はん」(詩篇六十八篇廿二節)。此の「髪多き顛頂」とは、神の聖意を行ふと偽稱しつづ其の實は惡魔の代理者たりし偽善者を表象す。之等の「敵は塵をなめん」(詩篇七十二篇九節)。

其の敵とは？

イスラエル人と關係して行動したペリシテ人は、此の世の末に發生を見る更に大なる事を豫表した。即ち斯く記さる「彼等が遇へる此の凡ての事は鑑(原語は「手本」若くは「訓型」となり居れり)となれり。且之等の事を録されたるは、末の世に遇へる我等を警むるためなり」(コリント前書十章十一節)。此の故にペリシテ人は、主イエスが神の宮に臨み給へる後に活動を開始し、特にエホバに奉仕する者を迫害するところの特殊の敵を豫表したのである。ダビデは膏をそがれて全イスラエル人の上に王とされた。北方諸支族の代表者アブネルは神の導きの下に、イスラエル全支族のダビデに歸順する旨を示して斯う云つた。

「アブネル、イスラエルの長老たちと語りて言ひけるは、汝等は前よりダビデを汝等の王となさんことを求め居たり。然ば今之をなすべし。それはエホバ、ダビデに就て語りて、我わが僕ダビデの手をもて、我が民イスラエルをペリシテ人の手より、また其の諸々の敵の手より救ひ出さんと云ひ給ひたればなり」と(サムエル後書三章十七、十八節)。此の豫言は即ち、ペリシテ人は神が末の日に刑罰を執行し給ふ或る種の敵を豫表せることを明示してゐる。ダビデはエホバの愛子即ち今、王座に立てられて審判のために神の宮に臨み給ひしイエス・キリストの模型であつた。然らば神とその受膏者に敵對するペリシテ人の豫表した特殊の敵とは抑々何者なるか。

此のペリシテ人は羅馬法王教權を豫表した。之の中には意識して此の邪惡制度の惡行爲に支援を與へつゝある全部の者を含んでゐる事は勿論である。而して之は今日、實際に於て「キリスト國」制度の全

公的分子を包含してゐる。サタンの組織制度は宗教、商業、政治の三部門に分れてゐるが、之等三部門はアンモン、モアブ及びセイル山の人々の三民族によつて豫表された。歴代下廿一章一、廿二、廿三節。ペリシテ人は神の民に迫害を加ふるところのサタンの組織制度中の宗教的部門を特に代表した。此の宗教的部門は、神に奉仕すると偽稱する偽善者なるが故にエホバの聖前に於て全く憎まれる者である。

サムソンが主役を演じた豫言的戯曲は、神の受膏者は神に全く信服せざるべからざる事と、死に至るまで忠信を盡さなければならぬ事を特に力説してゐる。ペリシテ人に就て此處に研究せんとする主なる要點は、この實體的ペリシテ人によつて行はれる神の受膏者に對する迫害と、ペリシテ人の上に行ひ給ふエホバの御仕事に關してである。此の故に神を愛する人々は宜しく以下の事を注意して調べ、之によつて勇氣と希望を増し加ふべきである。

ペリシテ人はミヅライムを通じてのハムの子孫である。(創世記十章六、十三、十四節。アモス書九章七節)。彼等は惡魔禮拜者であつて、其の神は魚神「ダゴン」と「バアルゼブブ」であつた。(士師記十六章廿三節。サムエル書卅一章八、十節。列王紀略下二章二、三節)。神はペリシテ人を「陰陽師」即ち卜筮者と呼びて之を排棄されたが、之は惡魔禮拜者、惡魔の宗教を行ふ者なることを意味す。(イザヤ書二章六節)。ペリシテ人は埃及(サタンの組織制度の模範)より出て、パレスチナに移住して地中海の沿岸地方を占據したが、此の地域はユダの支族の所領と定められてゐた處であつた。ペリシテ人は終始神の選民を壓迫した。此の故に彼等はサタン

の組織制度より出て來れりと自稱し、神を禮拜すると自稱しつゝ其の實惡魔を禮拜して之に仕へつゝある者を豫表したのである。

羅馬法王教權は所謂「キリスト國」制度を支配する公的政府である。曾つて「反抗主義」と呼ばれてゐたものは既に死して、所謂「反抗派」は今羅馬法王教權の支配下にある。「反抗主義」は全く有名無實と化した。羅馬法王教權は自派發行の印刷物によつて己自身を斯く定義してゐる。「羅馬法王教權即ちカトリック教會の支配體は教皇陛下を大首長とし、陛下の下に樞機聖院、數種の聖省、即ち樞機官を長官とする常任宗教委員會、大教長、大司教、司教、法王廳特派大使、特別使節、牧者、知事、長官、僧院長、監督を以て組織形成せる」(The Official Catholic Directory 一九三五年版)。

羅馬法王教權は不正不義の方法を用ひて、眞理に無知なる數億民衆の思想と行動を支配す。羅馬法王教權が之等多數民衆を支配する爲に用ふる方法とは即ち欺瞞である。之等の人々が此の教權の悪しき支配下から解放される時が到來した。此の故にエホバは今、羅馬法王教權の醜惡なる正體を曝露し之に對するエホバの御目的を顯示し給ふのである。

エホバは今、キリスト・イエスの支配下に成る正義の政府を建設し、正義を以て全地を支配すべき御目的を進展せしめ給ふ。此の神の國が全地を全く支配する時至る迄は、サタンは全地諸國の「神」即ち見えざる支配者である。此の故にイエスは「我が國は此の世の國に非ず」(ヨハネ傳十八章廿六節)と示し給